

骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

梅木田遺跡・白山社及び駒形根神社・平泉野遺跡・山王窟

平成29年3月

一関市教育委員会

序

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺経蔵の荘園であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されています。平成17年には9つの区域が国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定されました。さらに、18年には「一関本寺の農村景観」として国の重要文化的景観に選定されています。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村荘園遺跡」については、24年度に世界遺産暫定一覧表に登載されており、当教育委員会は重点的に調査研究を行っています。

本年度は、25年度から継続している「梅木田遺跡」と「白山社及び駒形根神社」、27年度から継続している「平泉野遺跡」の発掘調査を実施したほか、「山王窟」の地形測量を実施しました。本書は、これらの調査成果をまとめたものであり、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後に、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力をいただきました。衷心より感謝を申し上げます。

平成29年3月

一関市教育委員会

教育長 小菅 正晴



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略図（複製） 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細図(複製) 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背図（複製） 原典は中尊寺蔵



白山社及び駒形根神社 住居5確認状況



平泉野遺跡(若井原194-115地点)完掘全景

例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が平成28年度に実施した骨寺村荘園遺跡確認調査の報告書である。
- 2 調査は国庫補助事業および県補助事業を活用した。
- 3 調査は、平成7年に国の重要文化財に指定された『陸奥国骨寺村絵図』（中尊寺蔵）の現地として、一関市巖美町本寺地区に所在する国指定史跡骨寺村荘園遺跡の範囲および内容確認のための発掘調査である。
- 4 28年度調査対象地は、骨寺村荘園遺跡の構成要素である「梅木田遺跡」「白山社及び駒形根神社」「山王窟」および隣接地にある「平泉野遺跡」である。
- 5 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。
- 6 調査体制は以下のとおりである。

教育委員会	文化財課	課長	佐藤武生
		文化財係長	畠山浩
		学芸員	菅原孝明
		文化財調査研究員	山川純一
		文化財調査研究員	二階堂里絵
- 7 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は菅原が行った。
- 8 土層断面図の土色表示は新版標準土色帳1997年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。
- 9 調査に係る三次元測量および国土座標取り付け業務は株式会社八州北東北支社に、調査補助および調査区刈り払い業務は本寺地区地域づくり推進協議会に、自然科学分析に係る業務は株式会社加速器分析研究所に、それぞれ委託した。
- 10 報告書作成にあたっては、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会および同世界遺産推進部会、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導と助言を得ている。また、出土遺物の鑑定については、高木晃氏・羽柴直人氏（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）の指導をいただいた。
- 11 調査協力者・機関（敬称略・順不同）

安達訓仁、石川慶男、伊藤光一、日下和寿、小巖芳夫、佐々木一男、佐々木勝志、佐々木源輔、佐々木登志也、佐々木需、佐藤栄左衛門、佐藤勲、佐藤金朗、佐藤賢吉、佐藤凡夫、佐藤徳美、佐藤弘征、佐藤みゑ子、佐藤光男、佐藤育美、佐藤やす子、佐藤六郎、幡野寛治、村木二郎、本寺地区地域づくり推進協議会、骨寺村ガイドス運営協議会、文化庁、岩手県教育委員会、平泉町教育委員会、奥州市教育委員会
- 12 本書に係る調査報告会は、平成29年2月11日に骨寺村荘園交流館「若神子亭」で実施した。

目 次

序	001
カラー図版	003
例言	007
目次	008
1 位置と環境	009
2 調査に至る経緯	013
3 梅木田遺跡の調査	019
4 白山社及び駒形根神社(駒形5、若井原194-1地点)の調査	029
5 平泉野遺跡(中川9地点)の調査	044
6 平泉野遺跡(若井原194-115地点)の調査	048
7 山王窟の調査	055
8 骨寺村荘園遺跡の踏査	057
9 平泉野遺跡(若井原194-115地点)の土壌分析	061
10 AMS法による平泉野遺跡(若井原194-115地点)の年代測定	067
11 総括	073
遺物観察表	075
写真図版	079
抄録	102

1 位置と環境

1 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年(2005)9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年(2011)9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km²である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山(須川岳)を中心とする火山性山岳風景地

の国指定「栗駒国定公園」(昭和43年(1968))や北上川水系磐井川流域の国指定史跡「骨寺村荘園遺跡」(平成17年)および国選定重要文化的景観「一関本寺の農村景観」(平成18年(2006))、下流部には磐井川によって滝あるいは急流、深淵となって変化に富んだ溪谷景観をなす国指定名勝及び天然記念物「巖美溪」(昭和2年(1927))がある。市の東部には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、古生代の石灰岩層が浸食されてできた国指定名勝「^{げいび}狛鼻溪」(大正14年(1925))がある。

2 骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海拔高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海拔230～260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班(総括:広田純一(岩手大学教授))による一連の研究成果がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流する間に、いくつもの狭窄地による数珠状の小盆地が形成されている点にある。磐井川の流域には硬質の巖美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底(縦方向)と河岸(横方向)への侵食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、巖美層が交互に出現する理由は、断層活動により巖美層に褶曲が生じているためであるという(土井2012)。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺

跡は所在する。

現在の植生について、気候と植物・植生を担当した島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がり、斜面下部には植林によるスギ林、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布するとしている。一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られ、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映している(島田2012)。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田a火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物(オモダカ・サジオモダカ属)の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサやソバの花粉も増加している。また堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている(平塚他2012)。ただし、十和田a火山灰の降下以降に上記の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかどうかを検討課題となる。年代についても、やはり発掘成果との突合が不可欠である。

3 歴史的環境

中尊寺文書 骨寺村の中尊寺荘園としての始まりを示す文書は、『中尊寺文書』の一つ「中尊寺経蔵別当補任状案」である。そこには自在房蓮光^{じざいぼうれんこう}という僧侶が、紺紙金銀字交書一切経^{こんしきんぎんじこうしよいつさいきょう}を奉行し、8年をかけて完成させたこと、その功により蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領としたことが記されている。日付は天治三年(1126)三月二十五日、発給者は藤原清衡である。

『中尊寺文書』には、骨寺村の伝領に関する譲状・補任状・安堵状が多数あり、室町時代まで経蔵別当領として相伝されていることが確認できる。その他、村の内部構造に関する文書として、「骨寺村所出物日記」(文保2年(1318)3月)や「骨寺村在家日記」(室町時代か)があり、貢納者と品目が書き出されている。

吾妻鏡 文治五年(1189)の奥州合戦で奥州藤原氏が滅亡し、中尊寺は庇護者を失うこととなった。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮^{しんれん}が所領の安堵を求めるため、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、「中尊寺は清衡が建立したこと」「鳥羽院の御願所となったこと」「蓮光から寺領の寄付を受け、それを御祈禱料に充当していること」「経蔵は紺紙金銀字交書一切経を納めている霊場であること」を述べている。その上で、中尊寺の存続と、合戦で住民が逃げ出した寺領の安堵を求めている。

これに対し頼朝は、経蔵別当領の一つ骨寺村の四至(村境)を定め、その上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東は鑑懸^{かぎかけ}、西は山王窟、南は磐井川、北は峯山堂馬坂^{みたけどうまざか}である。

陸奥国骨寺村絵図 中尊寺大長寿院には2枚の絵図が残されている。簡略絵図(仏神絵図)と呼ばれるもの(カラー図版1)、詳細絵図(在家絵図)と呼ばれるもの(カラー図版2)である。また、詳

細絵図の裏にも絵図があり、紙背絵図(カラー図版3)と呼ばれている。簡略絵図と詳細絵図は西を天(上)に、山稜部に囲まれた村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至とほぼ同じである。つまり、頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

紙背絵図は、詳細絵図の裏側に描かれたもので、絵図の他に「骨寺絵図案」「寺領□□境論」「具書」等の文字も確認されている。

これら絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説(伊藤1957・吉田2008)と裁判の証拠書類説(大石1984)が示されてきたが、紙背絵図と文字が発見されたことにより(黒田1995)、所領争いの裁判書類であることが有力となった。そしてその作成時期は簡略絵図が鎌倉時代中期、詳細絵図が鎌倉時代後期にそれぞれ作成されたと推定されている。

磐井郡西岩井村絵図(元禄十二年(1699)) 磐井郡のうち西岩井24カ村を描いたもので、そのうち五串村の中に「本寺」という文字が見える。これはもとの骨寺村であり、この時すでに「骨寺」は「本寺」と呼ばれるようになっていたことがわかる。

平泉雑記(安永二年(1773)) 平泉に関する文献の調査・掲載と考証、現地踏査や伝承を収録したもので、骨寺村は「骨寺」の項で紹介されている。「本寺」の地に骨寺という寺があったが今はなく、「骨」が「本」に変わった時期は不明、としている。

風土記御用書出(安永四年(1775)) 仙台藩が領内の各村に提出させた書出である。その一つである五串村の書出に、本寺は「端郷本寺^{はごうほんでら}」として記載され、名所や旧跡等がその由来と共に細かく書き出されている。その中には『陸奥国骨寺村絵図』や『中尊寺文書』の「骨寺村在家日記」にある「六所明神、小名若神子^{ろくしょみょうじん わかみこ}」、「山王社、小名山王山^{ふどうのいわや}」、「不動窟、小名真坂」の別当が中尊寺の北本坊、西谷坊、小前沢坊であるとしている。西谷坊

は経蔵別当職を世襲する大長寿院である。また、中尊寺の書出である「関山風土記」には、慈恵塚が中尊寺一山の惣持である（保持されている）こ

4 骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果

骨寺村荘園遺跡からは、縄文時代前期から弥生時代中期までの土器や石器が出土している。

平成21年度調査で逆茂木が残る陥穴を、22・23年度調査で楕円形の陥穴を確認している。これらは駒形根神社西方の平泉野台地で発見しており、当該地は狩り場として機能していたと想定される。また、不動窟でも縄文土器が出土しており、遺跡は丘陵部全体に分布するものと推定できる。

28年度調査では、平泉野台地南東部で縄文時代中期中葉の竪穴住居、土坑、ピット群からなる比較的規模の大きい集落を確認した。

不動窟では、縄文時代前期と弥生時代中期の土器が出土しているが、窟が利用されていたことを推定するまでには至っていない。その後、しばらくの間、村の様相を示す考古資料は見られない。

次に確認できるのは、9世紀後半ごろの土師器や須恵器である。21年度調査では、平泉野台地から9世紀後半ごろの内面黒色処理された土師器碗や須恵器が出土している。同時期とみられる土師器と須恵器は、24年度調査（景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）でも出土している。さらに、味ヶ沢でも同時期の須恵器片を採集しており、どうやらこのあたりから村の開発が行われたようである。ただし、遺構との関係は依然として明確ではない。

12世紀に中尊寺経蔵別当領となったことと関係する調査成果もある。遠西遺跡からは、12世紀の常滑窯産三筋壺と13世紀と推定される底部糸切りの小型かわらけが出土している。梅木田遺跡からは、遺構外ではあるが13世紀中頃～後半の龍泉窯系青磁鎗蓮弁文碗が出土している。これら在家に関わる痕跡は、本寺地区の北側丘陵部の裾部に分布し、絵図に描かれた散居形態をよく反映している。現在も山裾には屋敷が建ち並び、中

とが記されている。これらの記載から、本寺（骨寺）が中尊寺の荘園でなくなった後も、形を変えて関わりが続いていることがわかる。

世以来の景観を継承している。

さて、北側丘陵部東端に慈恵塚がある。22年度調査では、塚本体および周辺の精査を行った。直径は約10m、最大高は約2.2mで、同心円状に溝と土塁を伴うことが判明した。この形態は北東北特有の巨大経塚と酷似（関根2009）しており、村を見下ろす立地からも経塚である可能性が高い。慈恵塚からは、大堀相馬窯産の土瓶や瀬戸窯産の燈明具など近世以降の遺物が出土している。

周辺にある慈恵大師に関わる石造物は近世後期に建てられたものである。地誌類の整理から塚が慈恵大師伝承と結びついたのは『封内風土記』（1772）以降であることが推定できる。つまり、塚は近世後期に「慈恵塚」と称され、再顕彰されたものと推定できる。ちなみに絵図に描かれた「慈恵柄（塚）」やその図像は後筆であることが指摘されている（大石1984）が、後筆の時期も再顕彰された後であることが推定できる。

23年度には不動窟を調査した。窟は最大高約3m、奥行き約13mの自然洞窟である。壁面に燈明具を置くための穴が、入口部に貫を通した痕跡が見つかった。おそらくある時期において扉等で窟内部を閉塞し、燈明を灯した痕跡であると考えられる。

他の調査成果として、梅木田遺跡から17世紀以降の掘立柱建物を複数確認したほか、陶磁器類も出土している。遠西遺跡でも掘立柱建物を確認しているが、出土遺物が少ないため年代の推定が困難である。

以上のことから、骨寺村荘園遺跡は弥生時代以降の一時期を除き、縄文時代から現代まで人々が生活を営んでいた場所であることが想定できる。（一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「1.位置と環境」を引用、加筆）

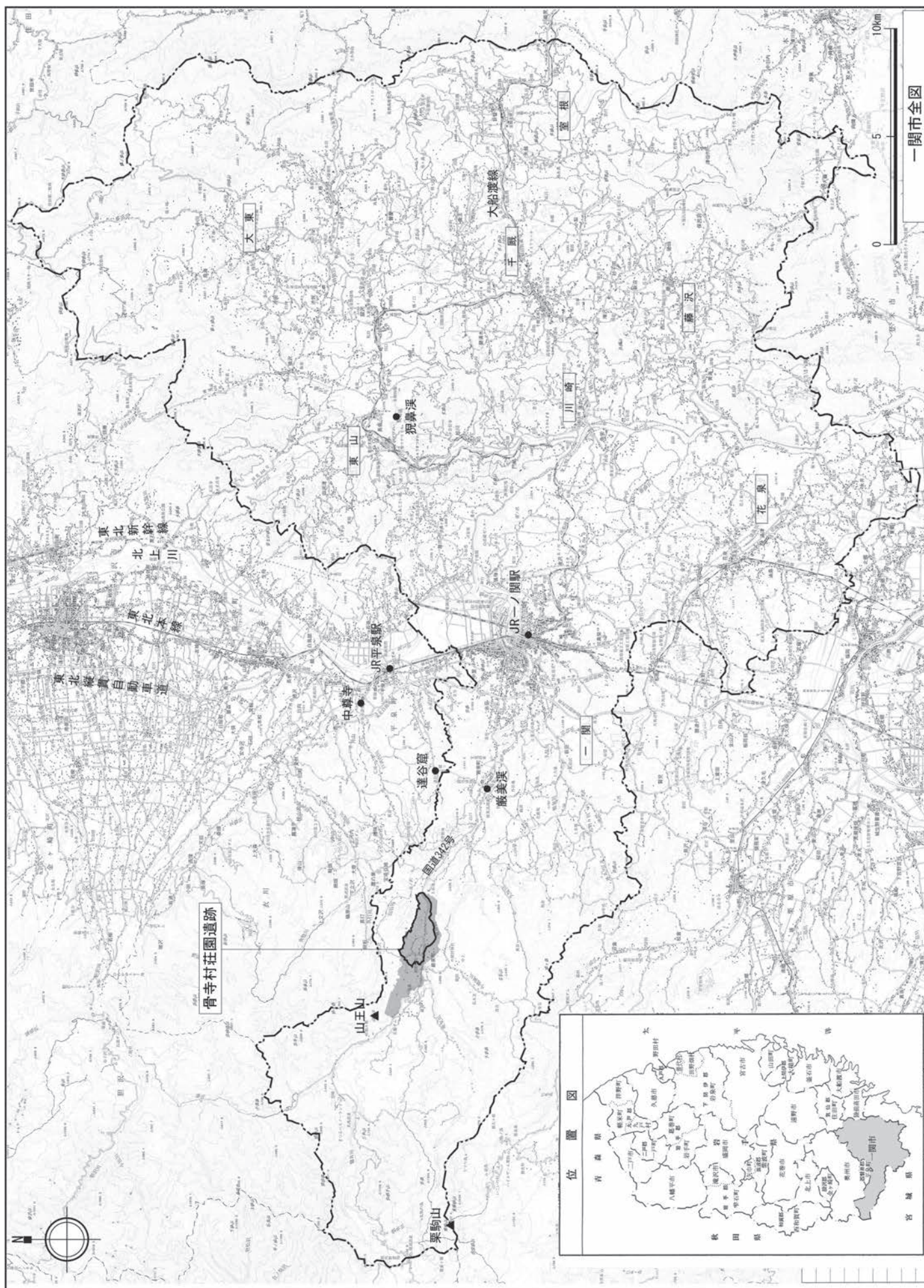


図1 骨寺村荘園遺跡位置図

2 調査に至る経緯

1 骨寺村荘園遺跡にかかるこれまでの取り組み

平成5年2月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成7年4月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成7年度	陸奥国骨寺村調査委員会(委員長、東北学院大学教授大石直正氏)発足、歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成8年～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会が主体の調査開始、1/2000ベースマップ作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査、総柱の掘立柱建物確認、用途不明の金属製品出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、圃場整備と遺跡保存について調整を検討
平成13年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物確認、かわらけ片、常滑三筋壺片出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、整備と保存の方向について答申、「骨寺村荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案、史跡と営農の調和を図り、文化財を活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物確認
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年6月	骨寺村荘園遺跡が「平泉の文化遺産」の資産に追加
平成15年8月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会が設置される
平成16年3月	本寺地区地域づくり推進協議会発足、景観保全・活用、世界遺産登録に向け、集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年3月2日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される 文部科学省告示第22号 (山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂(拝殿))
平成17年度	平泉野遺跡確認調査、縄文時代の石器出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年7月28日	本寺地区の平野部を中心とした約337.5haが重要文化的景観に選定 文部科学省告示第121号
平成18年9月14日	政府が「平泉の文化遺産」を世界文化遺産へ推薦することを決定、世界遺産条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉-浄土世界を基調とする文化的景観」として世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1、153-1確認調査、縄文土器片、石器等出土
平成19年8月26～30日	イコモス現地調査
平成20年5月	イコモス「登録延期」勧告
平成20年6月14日	岩手宮城内陸地震(マグニチュード7.2)発生、震源地は本寺地区の西方約3km
平成20年7月	世界遺産委員会で「平泉-浄土世界を基調とする文化的景観」の登録延期が決定
平成21年度	平泉野遺跡(若井原188地点ほか)確認調査、縄文土器、石器剥片、陥穴、9世紀代の土師器と須恵器が出土

平成21年4月4日	国際専門家会議、推薦書作成委員会において平成23年世界遺産登録をめざす資産の絞り込みが提案され、平成23年の世界遺産登録後の対応資産として、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡、達谷窟の4資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年1月	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」として世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査及び三次元測量の実施、近世地誌類と出土遺物、石造物整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡(若井原194-1地点)確認調査、縄文時代の焚火跡を確認
平成22年9月8,9日	イコモス現地調査 調査員 ワン・リジュン氏(中国イコモス国内委員)
平成23年3月11日	14時46分頃 マグニチュード9.0の巨大地震発生(震災名:東日本大震災)
平成23年度	不動窟確認調査、精査及び三次元測量の実施、貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴を確認
平成23年5月	イコモス「登録」勧告
平成23年6月29日	世界遺産委員会で「平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録が決定 但し、柳之御所遺跡を除く
平成23年11月14日	第1回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年3月22日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴を確認 伝ミタケ堂確認調査、自然決壊による崩落岩盤確認 不動窟確認調査、基盤層とみられる自然堆積層確認
平成24年5月18日	第3回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年9月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群(拡張)」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」の拡張登録に向けた関係者(県教育長、二市一町首長)会議 開催 拡張登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年1月30日	第4回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査、遺構・遺物ともに発見されず 不動窟確認調査、窟前面に3基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社(中川6地点)確認調査、土地造成と掘立柱建物を確認 梅木田遺跡確認調査、13世紀とみられる龍泉窯系青磁鎚蓮弁文碗片出土
平成25年11月22,23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成26年1月7日	第5回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社(中川4,6地点)確認調査、中川4地点の塚の自然科学分析を実施 梅木田遺跡確認調査、近世中後期の遺構変遷を推定
平成26年11月29,30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成27年1月6日	第6回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成27年1月26日	本寺地区の一部約6.7haが重要文化的景観に追加選定 文部科学省告示第6号
平成27年度	白山社及び駒形根神社(中川6地点)確認調査、平場の造成時期を17世紀以降と結論付け 梅木田遺跡確認調査、17世紀以降の掘立柱建物を確認 平泉野遺跡(若井原194-115地点)確認調査、17世紀以降の段切り造成区画を確認
平成27年11月14,15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催

平成28年1月5日	第7回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年度	梅木田遺跡確認調査 白山社及び駒形根神社(駒形5、若井原194-1地点) 確認調査 平泉野遺跡(中川9、若井原194-115地点) 確認調査 山王窟三次元測量
平成28年8月4日～6日	平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員と海外専門家との意見交換会 開催 (第8回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け)
平成28年10月3日	第9回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年12月3,4日	平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成29年1月12日	第10回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催

2 平成28年度調査に至る経緯

一関市教育委員会は、平成8年度に骨寺村荘園遺跡の調査に着手し、11年度から発掘調査を継続して実施している。

目的は、『陸奥国骨寺村絵図』の現地である本寺地区の絵図に描かれた田圃、在家、宗教施設の痕跡を確認することである。調査の結果、本寺地区北側の山裾には在家とみられる遺構が多く、その一部から中世の遺物が出土した。そのことから遺構の時代も中世まで遡る可能性を示唆している。一方、宗教施設の調査については、中世に遡る遺構・遺物の発見には至っていない。村落遺跡としての把握は進んでいるものの、宗教施設の調査では明確な成果を挙げられていないのが現状である。

市教育委員会は、15年度から骨寺村荘園遺跡を平泉の文化遺産の一つとして世界文化遺産への登録を推進してきた。しかし、20年に平泉は登録延期となったため、21年に登録推進の資産候補の絞り込みが提案された。そして、骨寺村荘園遺跡は更なる調査研究が必要と判断され、資産候補から外れ拡張登録を目指すことになったのである。

そのため、市教育委員会は7カ年の発掘調査計画を立て、特に宗教施設に関わる調査を中心に実施してきた。そうした中、23年に「平泉一仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺産群」が世界文化遺産に登録され、翌24年には、骨寺村荘

園遺跡(一関市)、柳之御所遺跡(平泉町)、達谷窟(平泉町)、白鳥館遺跡(奥州市)、長者ヶ原廃寺跡(奥州市)の5つの拡張予定資産が世界遺産暫定一覧表に記載された。

これを受け、拡張登録を目指す関係区市町間で5カ年の重点調査を実施することを確認した。世界遺産拡張登録につながる考古学的成果を積み重ねることが求められているのである。

28年度は、市教育委員会の7カ年の調査計画では補足調査と総括報告書刊行の時期に、区市町で確認した5カ年の重点調査期間では4年目(調査は最終年度)である。25年度から調査している「梅木田遺跡」は、調査の最終段階を迎え、昨年度に引き続き、確認調査を実施した。「白山社及び駒形根神社」(若井原194-1地点)と「平泉野遺跡」(中川9地点)は、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会の指導を踏まえ、平泉野台地南東部平場の縁辺部を調査した。このうち平泉野遺跡は、27年度に引き続き、若井原194-115地点も調査した。そのほか、山王窟の地形測量を実施した。

これまで(平成11～28年度)調査した地点を図2-1、図2-2、表1に示した。

(菅原)

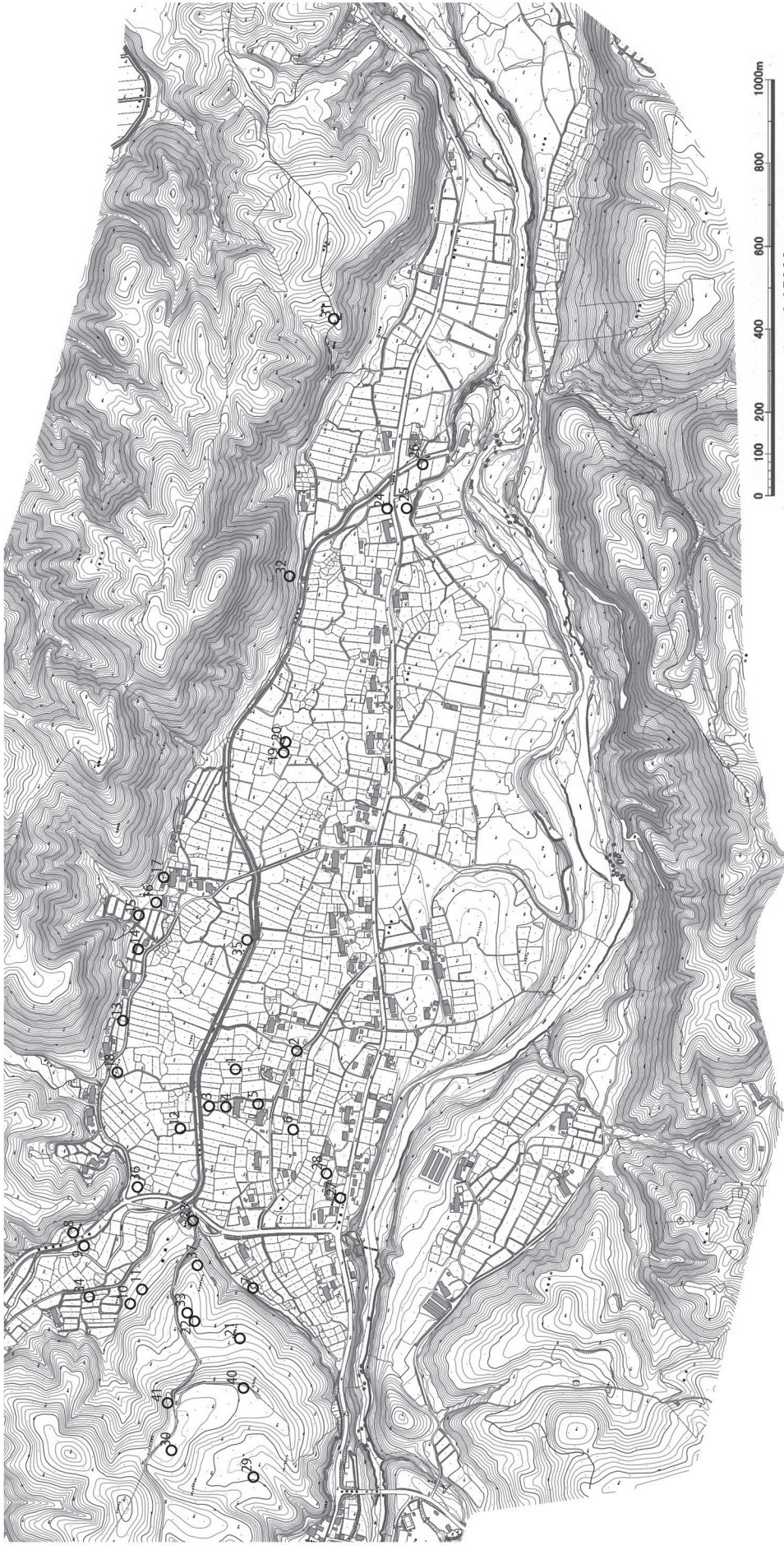


図2-1-1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点(1)

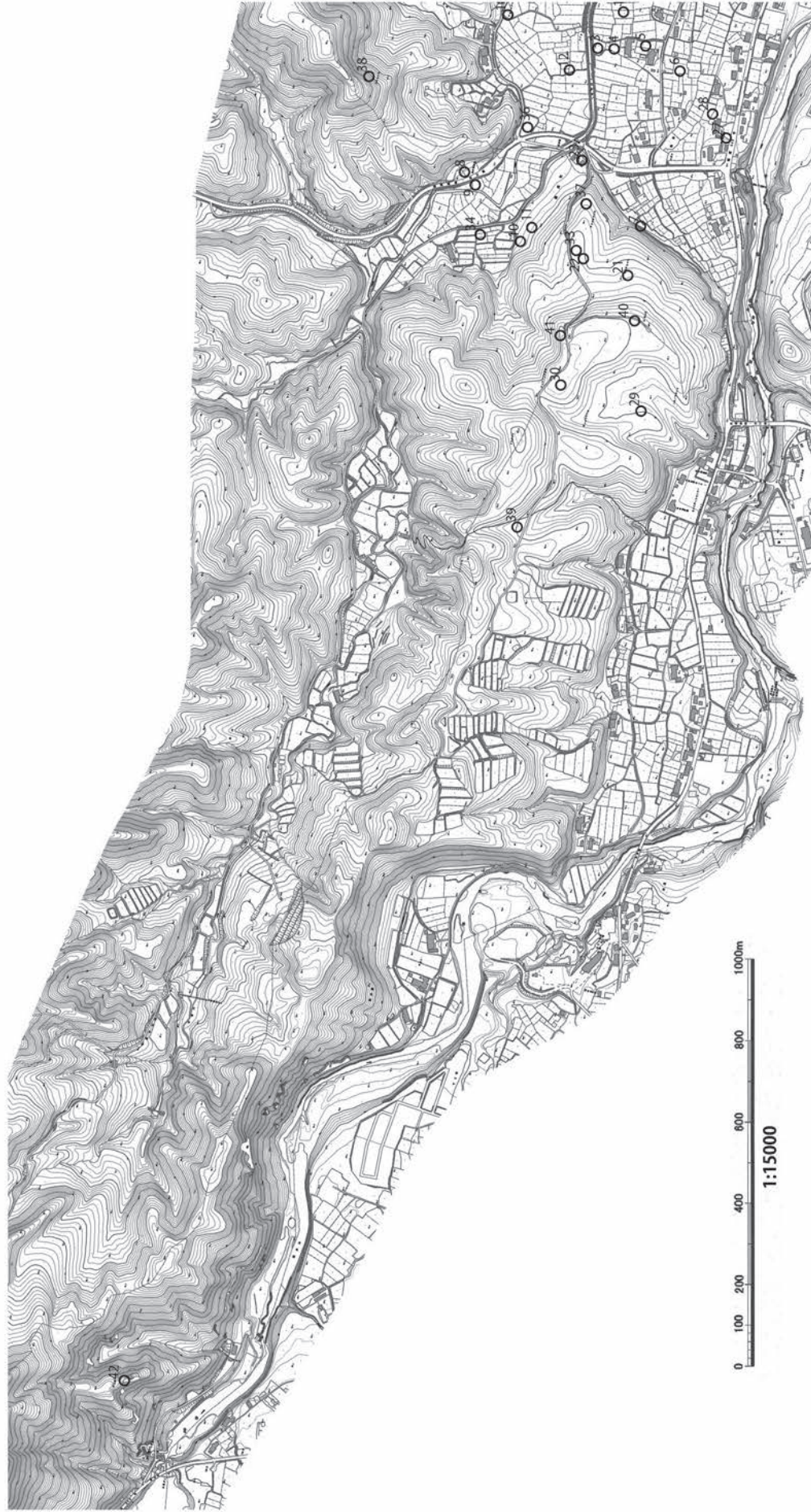


図2-1-2 骨寺村荘園遺跡における既調査地点(2)

表1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点一覧表

番号	調査地点	遺構・遺物	調査年度
1	沖要害52-1	なし	平成11年度
2	沖要害72、77、本寺中屋敷遺跡	掘立柱建物、石組井戸、銅製品	平成11年度
3	駒形85-1	柱穴、柱根、木製品	平成11年度
4	駒形86	小穴	平成11年度
5	駒形89-2	銅製品	平成11年度
6	駒形96-1、107-1	なし	平成11年度
7	駒形40-2、44	なし	平成11年度
8	中川30-1、32-1、梅木田遺跡	掘立柱建物、溝、柱根、陶器、中国産磁器片	平成12・25～28年度
9	中川28-1、35	なし	平成12年度
10	中川6	近世造成面、掘立柱建物、建物礎石、池状遺構、近世磁器片	平成12・25～27年度
11	中川4	塚	平成25・26年度
12	要害141-4、146-3	なし	平成12年度
13	要害118、119	なし	平成13年度
14	要害79-1、114-1、115-2、遠西遺跡	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、溝、柱根、常滑三筋壺片、かわらけ片	平成13・14年度
15	要害70、72	柱穴、井戸、焼土・炭化物	平成13年度
16	要害69-1	なし	平成13年度
17	要害23、54-1	近世板蔵基礎	平成13年度
18	要害127-2	なし	平成14年度
19	若神子31-2、若神子社	石祠	平成16年度
20	若神子43、45、46	なし	平成16年度
21	駒形5、白山社及び駒形根神社	炭窯	平成17年度
22	駒形5、白山社及び駒形根神社	石匙	平成17年度
23	駒形8-1、白山社及び駒形根神社	小穴、石鏃、銭	平成18年度
24	若神子85-3、87-1、90-4、92-2	なし	平成18年度
25	若神子88-1	なし	平成18年度
26	若神子81、86-1、86-4	なし	平成18年度
27	駒形153-1	なし	平成19年度
28	駒形151-1	溝、縄文土器片、石器	平成19年度
29	若井原188、194-35、194-36、平泉野遺跡	陥穴、旧流路、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片	平成21年度
30	若井原194-1、平泉野遺跡	焚火跡、縄文土器片、石器剥片	平成22年度
31	下真坂25-5、慈恵塚	近世陶磁器、近世銭	平成22年度
32	下真坂80-2、不動窟	洞窟、柱穴、縄文土器片、弥生土器片、石器剥片、近世銭	平成23～25年度
33	駒形5、白山社及び駒形根神社	土坑、縄文土器片、石器	平成23年度
34	中川19-1	土坑、縄文土器片、石器	平成20年度
35	要害59-1	小穴	平成20年度
36	要害194-1、194-2	柱穴、土師器片、須恵器片	平成23・24年度
37	駒形7、白山社及び駒形根神社	陥穴、縄文土器片、石器剥片	平成24年度
38	要害204-1、伝ミタケ堂跡	なし	平成24・25年度
39	若井原194-115、平泉野遺跡	塚、縄文土器片、近世磁器片	平成27・28年度
40	若井原194-1、駒形5、白山社及び駒形根神社	竪穴住居、土坑、溝、縄文土器片、土偶、石器、近世陶磁器片	平成28年度
41	中川9、平泉野遺跡	溝	平成28年度
42	若井原194-33、山王窟	近世石造物	平成28年度

※番号は図2-1、図2-2と対応

3 梅木田遺跡の調査

本調査は、梅木田遺跡の内容を確認するためのものであり、調査地点は、一関市巖美町字中川30-1に所在する(図2-1-8、図3)。

梅木田遺跡には、西から最西部平場、西部上段平場、西部下段平場、中央部平場、東部平場の5カ所の平場がある。

平成12、25・26年度の調査では、中央部平場は丘陵裾部を段切りして造成されていること、段切りと平場の接点には区画溝が掘られ、段切り造成の下段平場を活用して掘立柱建物、柱列、柱穴群、溝などからなる居住域が形成されていること、を確認した。これらは、3期(古い順に1・2・3期)に細別される。3期に属する掘立柱建物4を構成するP203、掘立柱建物2を構成するP205の掘方埋土から近世磁器、1期に属する溝9の埋土から17世紀末から18世紀末までの肥前産陶器が出土しており、いずれの時期も近世であることが判明した(一関市教育委員会2015)。

(1) 基本層序(図4、写真図版1-3)

北壁から、代表的な5つの層を挙げる。

II層(4層) 10YR2/3黒褐色粘土質シルト。明瞭な混入物なし。粘性中。しまり極めて強。旧畑耕作土。

III層(6層) 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。明瞭な混入物なし。粘性強。しまり強。沢および自然窪地堆積土。

(2) 確認した遺構

今回確認した遺構(図5)は、掘立柱建物3棟、柱穴群、溝1条、小溝状遺構群1群である。

掘立柱建物7(図6、写真図版1-4・5、2-6~10、3-11~14)

東西2間以上、南北3間の東西棟とみられる側柱掘立柱建物である。方向は北側柱列で、N-61°-Eである。西側は調査区外に延びており、長軸5.7m以上、短軸4.3m、北側柱列の柱間は西から未詳、

また、26・27年度に調査した西部下段平場では、掘立柱建物、柱列、柱穴群、小溝状遺構群(畑耕作痕)からなる居住域を確認した。遺構から遺物は出土していないが、排土・表土から出土した17世紀中頃から近代までの陶磁器(17世紀末から18世紀末までの肥前産、18・19世紀の大堀相馬産の碗・皿などの日常雑器が多い)から、屋敷は17世紀後半から近代まで存続していた蓋然性が高い(一関市教育委員会2016)。

28年度の調査は、東部平場にどのように遺構が分布し、土地が利用されているのかを解明することを目的とした。畑・草地の刈り払いを行って調査区の設定をした後、土層の堆積状況と遺構の有無を確認するため、掘削を行った。調査期間は、平成28年4月25日~6月30日、調査面積は、約318㎡である。なお、調査終了後は残土を用いて埋め戻し、原状を復帰した。

VI層(19層) 10YR2/1黒色粘土質シルト。明瞭な混入物なし。粘性中。しまり中。沢および自然窪地堆積土。

VII層(20層) 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。明瞭な混入物なし。粘性中。しまり強。地山直上層。

VIII層(21層) 10YR5/6黄褐色粘土質シルト。明瞭な混入物なし。粘性中。しまり極めて強。地山。

1.95m、1.85m、東側柱列の柱間は北から1.65m、1.5m、1.15m、南側柱列の柱間は西から未詳、1.90m、1.95mを測る。P5・6・7では柱痕跡がみられるが、それ以外では抜き取られている。柱穴の掘方は、P8は円形に近いが、ほかはすべて楕円形である。規模は最小のP3・5で0.45m×0.4m、最大のP6で0.8m×0.75mである。各柱穴からの出土遺物はない。

掘立柱建物 8 (図 7、写真図版 1 - 4・5、3 - 15、4 - 16 ~ 22)

長軸 5 間、短軸間数未詳の南北棟とみられる側柱掘立柱建物である。方向は東側柱列で、N - 29° - W である。西側は調査区外に延びており、長軸 11.2 m、短軸 3.15 m 以上、北側および南側柱列の柱間は未詳、東側柱列の柱間は北から 2.2 m、1.9 m、2.0 m、2.55 m、2.55 m を測る。P 6 は柱が抜き取られているが、そのほかの柱穴は柱痕跡がみられる。柱穴の掘方は、楕円形および不整形である。規模は最小の P 6 で 0.55 m × 0.45 m、最大の P 4 で 0.7 m × 0.6 m である。各柱穴からの出土遺物はない。溝 14 は、本建物と方向を共にすることから区画溝であった可能性が高い。

溝 14 (図 7、写真図版 3 - 15、4 - 23、5 - 24)

掘立柱建物 8 の北・東・南辺を囲むように位置し、南辺西側は調査区外に延びる。北辺長 4.1 m、東辺長 15.6 m、南辺長 1.7 m 以上、幅 0.35 ~ 0.95 m、走行方向は北辺で、N - 74° - E、東辺で、N - 29° - W、南辺で、N - 59° - E である。断面形状は北辺では上部が開く U 字形、東辺では皿形を呈し、確認面からの深さは 0.15 ~ 0.25 m である。出土遺物はない。本溝は、掘立柱建物 8 と方向を共にす

(3) 出土遺物 (表 10・14、写真図版 7 - 43・44)

基本層 I 層 (表土) から陶磁器片 15 点、石製品 2 点、石鏃 2 点、剥片 2 点の合計 21 点が出土した。

詳細は遺物観察表および写真図版に掲載した。

基本層 I 層 (表土) からは、昨年度と同様に江戸時代を中心とした時期の陶磁器類が出土しており、

(4) まとめ

調査の結果、東部平場には掘立柱建物 3 棟からなる屋敷が営まれていたことが判明した。いずれの建物も長軸方向をそろえており、重複関係もないことから、同時に存在していたと考えられる。その時期は不詳だが、表土からは江戸時代 (17 世紀末頃) から近代までの陶磁器が出土しており、江戸時代後期 (あるいは明治期まで存続する) とみておきたい。

ることからその区画溝であった可能性が高い。

掘立柱建物 9 (図 8、写真図版 3 - 15、5 - 25 ~ 28、6 - 29 ~ 35)

長軸 3 間以上、短軸 2 間の東西棟の側柱掘立柱建物である。方向は北側柱列で、N - 59° - E である。長軸 6.2 m 以上、短軸 4.25 m、北側柱列の柱間は西から 1.95 m、1.4 m、1.6 m、未詳、西側柱列の柱間は北から 2.15 m、2.1 m、南側柱列の柱間は西から 1.8 m、1.5 m、未詳である。P 8・9 は柱が抜き取られているが、そのほかの柱穴は柱痕跡がみられる。P 10 の柱痕跡最下部には柱材が残存していた。柱穴の掘方は、P 1・3・6・8・10 がほぼ円形で、それ以外は楕円形である。規模は最小の P 8 で 0.25 m × 0.25 m、最大の P 7 で 0.65 m × 0.45 m で、各柱穴からの出土遺物はない。

小溝状遺構群 (図 5、写真図版 7 - 41・42)

5 条並んだ状態で確認した。西側は調査区外に延びる。5 条の確認長は最も短いもので 0.35 m 以上、最も長いもので 1.3 m 以上、幅 0.25 ~ 0.4 m、深さ 0.05 ~ 0.2 m、断面形状は皿形および上部が開く U 字状を呈する。遺物は出土していない。畑の天地返しの痕跡とみられる。

今回の調査地点が、「ウメノキタ (梅木田)」と呼ばれる屋敷であったとの地元の伝承を裏付ける。「ウメノキタ」屋敷の廃絶後、畑地となり耕作された際に屋敷で用いられていた陶磁器類が破碎され、旧畑耕作土や表土に混在したものと考えられる。

梅木田遺跡のこれまでの発掘調査 (平成 12、25 ~ 28 年度) の成果を考え合わせると、3 カ所の平場 (西部下段平場、中央部平場、東部平場) に (狭義の) 2 ~ 3 軒からなる屋敷が存在していたことになる。安永四年 (1775) に書かれた磐井郡五串村の『風土記御用書出』に記載のある「一梅木田屋敷 壺軒」は、あるいはこれ (広義の 1 軒?) を指すのかもしれない。 (山川)



图3 梅木田遺跡平成28年度調査区(東部平台)位置図



図4 梅木田遺跡調査区東壁・西壁土層断面図

土層注記

- 1 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。10YR3/2 黒褐色粘土質シルト、10YR5/4 におい黄褐色砂質シルト、地山粒・小〜極大ブロックを含むところがある。泉道側は礫地が顕著。表土。基本土層I層。
- 2 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小・小ブロック少量含む。溝14。
- 3 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。明瞭な混入物なし。小溝状遺構群。
- 4 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。明瞭な混入物なし。田畑耕作土。基本土層II層。
- 5 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。明瞭な混入物なし。下部は黒みを帯びる。Pit.607。
- 6 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。明瞭な混入物なし。沢および自然露地堆積土。基本土層III層。
- 7 10YR2/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小・小ブロック微量含む。Pit.606。
- 8 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小・小ブロック少量、10YR3/1 黒褐色粘土質シルト小ブロック微量含む。
- 9 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。下部に10YR3/2 黒褐色砂質シルトを層状に含む。水成堆積。
- 10 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性やや強。しまり中。地山極小ブロック微量含む。
- 11 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。10YR3/1 黒褐色粘土質シルトおよび地山と互層をなす。水成堆積。
- 12 10YR3/2 黒褐色砂質シルト。粘性ややあり。しまり極めて強。10YR3/1 黒褐色粘土質シルトおよび地山と互層をなす。水成堆積。
- 13 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性やや強。しまり強。10YR3/2 黒褐色粘土質シルト極小〜中ブロックおよび地山極小〜大ブロックを中量含む。部分的に互層となるところもある。
- 14 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。明瞭な混入物なし。
- 15 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性やや強。しまり強。地山極小ブロック微量含む。Pit.608 上層。
- 16 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。地山極小・小ブロック少量含む。Pit.608 下層。
- 17 10YR2/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。明瞭な混入物なし。基本土層IV層。
- 18 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性やや強。しまり強。地山極小〜中ブロックをやや多量含む。基本土層V層。
- 19 10YR2/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。明瞭な混入物なし。沢および自然露地堆積土。基本土層VI層。
- 20 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。明瞭な混入物なし。基本土層VII層。
- 21 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。明瞭な混入物なし。地山。基本土層VIII層。
- 22 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性強。しまり極めて強。明瞭な混入物なし。地山。基本土層IX層。
- 23 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。明瞭な混入物なし。地山。基本土層X層。

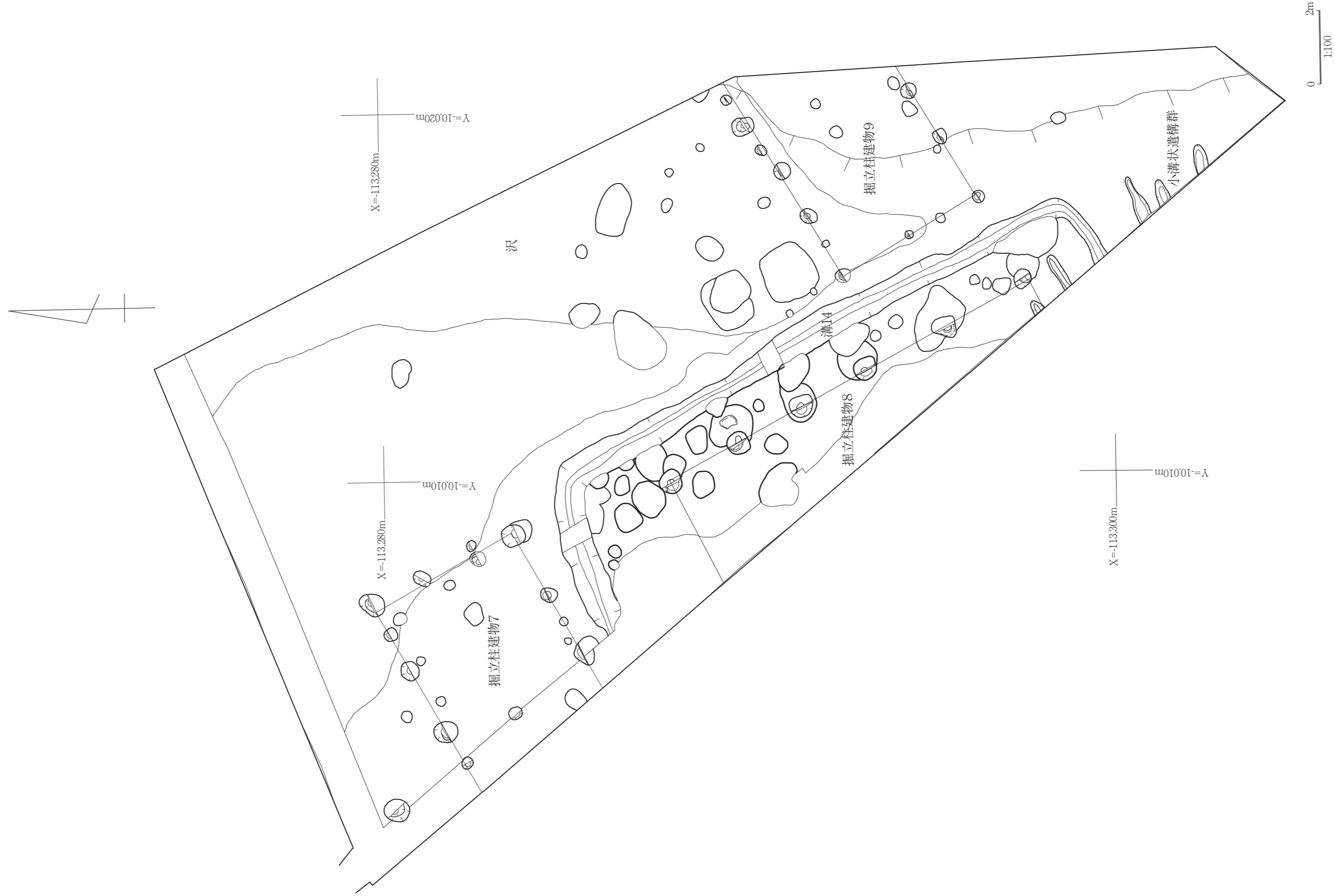
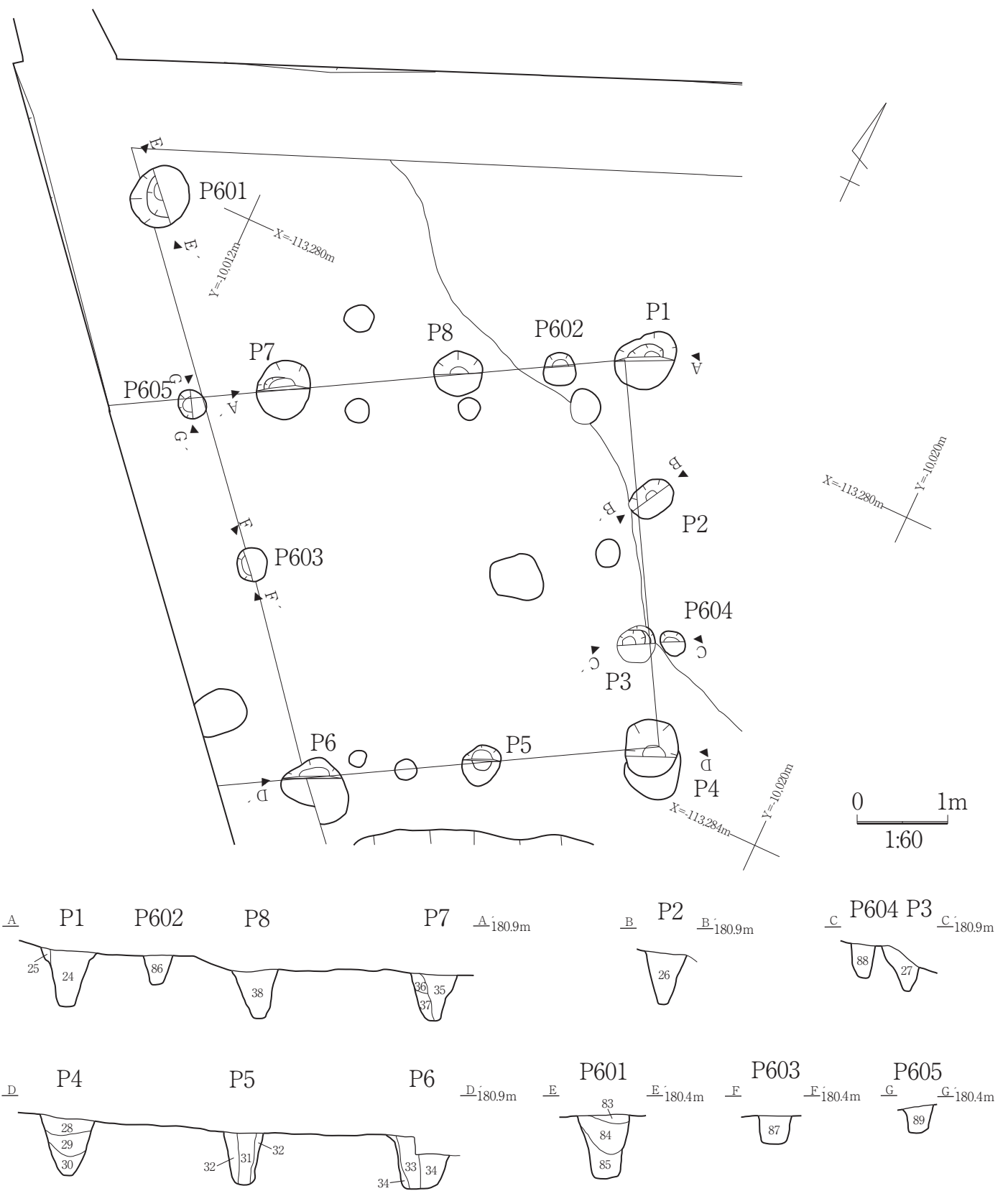


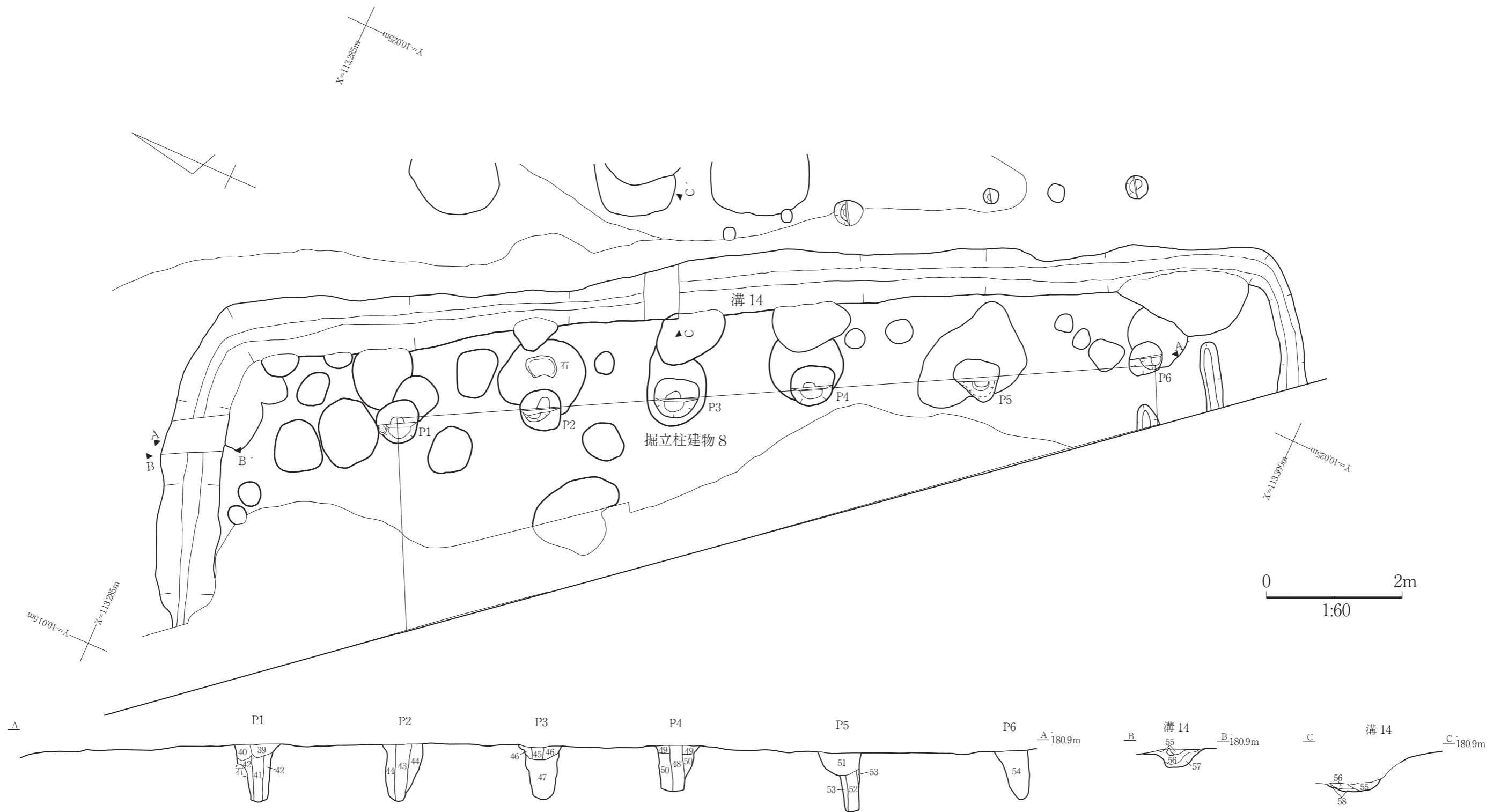
图5 梅木田遺跡遺構全体図



掘立柱建物 7

- 24 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小・小ブロック微量含む。P1 埋土上層。
- 25 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小ブロック微量含む。P1 埋土下層。
- 26 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小・小ブロック微量含む。P2 埋土。
- 27 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小・小・大ブロック少量含む。P3 埋土。
- 28 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小〜中ブロック少量含む。P4 埋土上層。
- 29 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山小ブロック微量含む。P4 埋土中層。
- 30 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小〜大ブロック中量含む。P4 埋土下層。
- 31 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小・小ブロック微量含む。P5 柱痕跡。
- 32 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小〜中ブロック極多量含む。P5 掘方埋土。
- 33 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小・小ブロック微量含む。P6 柱痕跡。
- 34 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小〜大ブロック極多量含む。P6 掘方埋土。
- 35 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまりやや弱。地山極小ブロック微量含む。P7 柱痕跡。
- 36 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小〜中ブロック少量含む。P7 掘方埋土上層。
- 37 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。明瞭な混入物なし。P7 掘方埋土下層。
- 38 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小ブロック微量含む。P8 埋土。
- Pit
- 83 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小〜中ブロック微量含む。P601 埋土上層。
- 84 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小〜中ブロック中量含む。P601 埋土中層。
- 85 10YR2/1 黒色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小〜大ブロック中量含む。P601 埋土下層。
- 86 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小ブロック微量含む。P602 埋土。
- 87 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。明瞭な混入物なし。P603 埋土。
- 88 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。明瞭な混入物なし。P604 埋土。
- 89 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小ブロック微量含む。P605 埋土。

図6 梅木田遺跡掘立柱建物7平面図・土層断面図



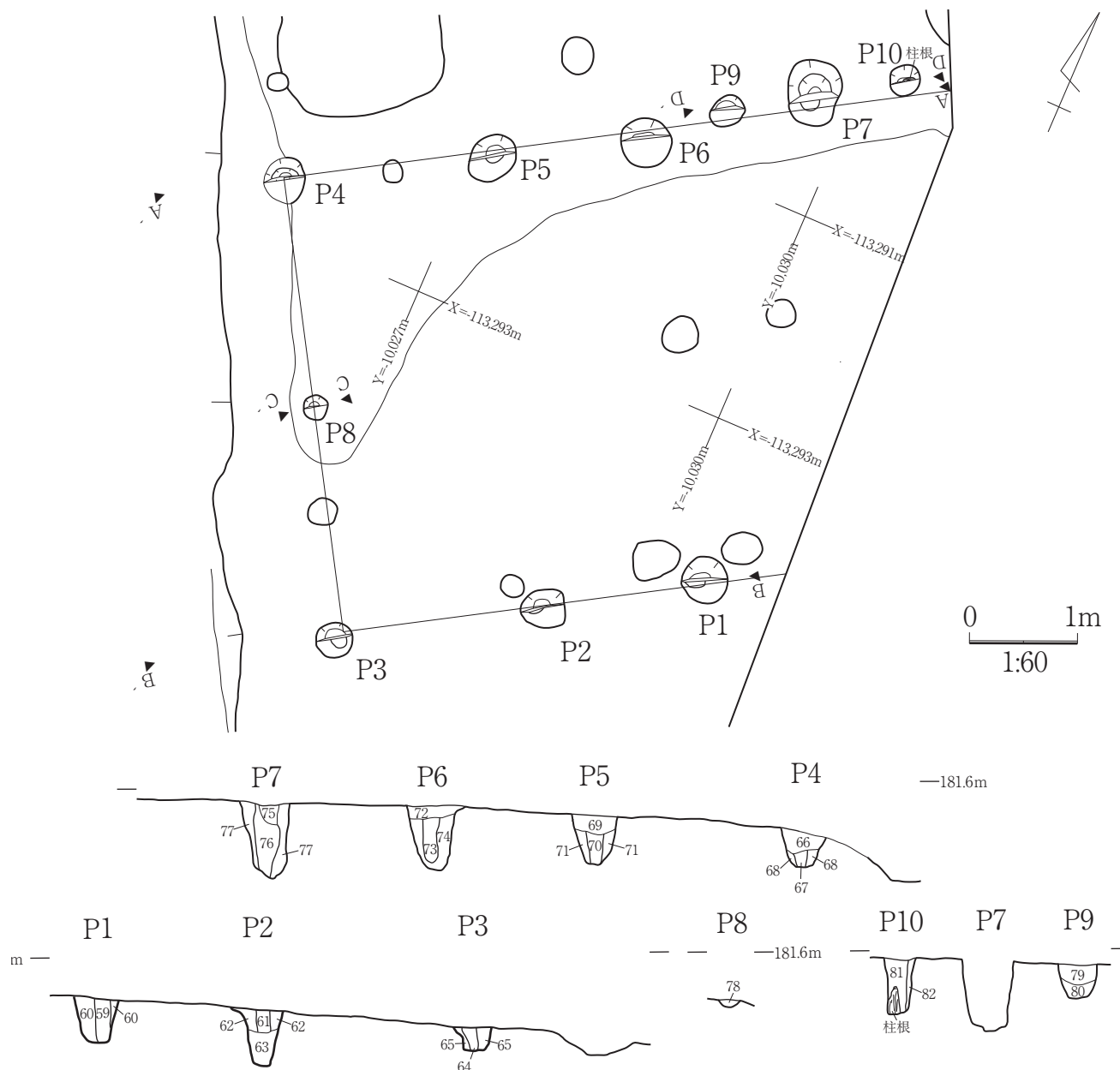
掘立柱建物 8

- 39 10R 3/2黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまりやや弱。10R 2/1黒 色粘土質シルト小・中ブロック少量含む。P1 柱抜取穴。
- 40 10R 3/黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまりやや弱。明瞭な混入物なし。P1 柱痕跡。
- 41 10R 3/黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小～大ブロック中量含む。P1堀 方埋土上層。
- 42 10R 3/1黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小～大ブロック極多量含む。P1堀 方埋土下層。
- 43 10R 3/1黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまりやや弱。10R 3/2黒 褐色粘土質シルト中・大ブロック中量、下部に地山小～極大ブロック多量含む。P2注 痕跡。
- 44 10R 3/2黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小～中ブロック多量、10R 3/1黒 褐色粘土質シルト極小・小ブロック少量、炭化物粒微量含む。P2堀 方埋土。
- 45 10R 3/黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小・小ブロック中量含む。P3注 痕跡。
- 46 10R 3/2黒 褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。地山極小～大ブロック多量含む。P3堀 方埋土。
- 47 10R 3/2黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山小・中ブロック中量、10R 3/1黒 褐色粘土質シルト小～大ブロック少量含む。P3堀 方埋土下層もしくは古期柱穴埋土。
- 48 10R 3/2黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまりやや弱。地山極小・小ブロック微量含む。P4注 痕跡。
- 49 10R 3/1黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小～中ブロック多量含む。P4堀 方埋土上層。
- 50 10R 3/2黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。10R 3/1黒 褐色粘土質シルト中・大ブロックおよび地山小～極大ブロック少量含む。P4堀 方埋土下層。
- 51 10R 3/1黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小～極大ブロック多量含む。P5注 抜取穴。
- 52 10R 3/2黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまりやや弱。地山極小～中ブロック少量含む。P5注 痕跡。
- 53 10R 3/1黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山小～大ブロック中量含む。P5堀 方埋土。
- 54 10R 3/1黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小～大ブロック多量含む。P6埋 土。

溝 14

- 55 10R 3/1黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小・小ブロック少量、炭化物粒・焼土粒微量含む。
- 56 10R 3/2黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山中～極大ブロック極多量含む。
- 57 10R 3/2黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小・小ブロック極微量含む。上部に10R 2/1黒 色粘土質シルトが層状に入る。下部は主体土と地山の互層（水成堆積）。
- 58 10R 3/2黒 褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。明瞭な混入物なし。

図7 梅木田遺跡掘立柱建物8、溝14平面図・土層断面図



掘立柱建物 9

- 59 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山小・中ブロック少量含む。P1 柱痕跡。
- 60 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山小～大ブロック極多量含む。P1 掘方埋土。
- 61 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。明瞭な混入物なし。P2 柱痕跡。
- 62 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。10YR3/2 黒褐色粘土質シルト小・中ブロック中量、地山極小・小ブロック少量含む。P2 掘方埋土。
- 63 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。地山と互層をなす。P2 掘方整形土。
- 64 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小・小ブロック微量含む。P3 柱痕跡。
- 65 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山小～大ブロック中量含む。P3 掘方埋土。
- 66 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小・小ブロック中量含む。P4 柱抜取穴。
- 67 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり弱。明瞭な混入物なし。P4 柱痕跡。
- 68 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小・小ブロック微量含む。P4 掘方埋土。
- 69 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山小ブロック少量、10YR3/1 黒褐色粘土質シルト小ブロック微量含む。P5 柱抜取穴。
- 70 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山小ブロック微量含む。P5 柱痕跡。
- 71 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。地山極小・小ブロッ

- ク中量含む。P5 掘方埋土。
- 72 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山小ブロック少量、10YR3/1 黒褐色粘土質シルト小ブロック微量含む。P6 柱抜取穴。
- 73 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山小ブロック微量含む。P6 柱痕跡。
- 74 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。地山極小・小ブロック中量含む。P6 掘方埋土。
- 75 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまりやや弱。地山極小・小ブロック微量含む。P7 埋土。
- 76 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山および 10YR5/6 黄褐色砂と互層。P7 柱痕跡。※柱根が腐食後に陥没し、水成堆積によって埋没?。
- 77 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小～中ブロック少量含む。P7 掘方埋土。
- 78 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小～中ブロック微量含む。P8 埋土。
- 79 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小ブロック微量含む。P9 埋土上層。
- 80 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。地山極小・小ブロック少量含む。P9 埋土下層。
- 81 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山極小・小ブロック微量含む。P10 柱痕跡。※下部に柱根残存。
- 82 10YR4/3 におい黄褐色粘土質シルト。粘性中。しまり強。明瞭な混入物なし。P10 掘方埋土。

図8 梅木田遺跡掘立柱建物9平面図・土層断面図

4 白山社及び駒形根神社(駒形5、若井原194-1地点)の調査

本調査は、遺構の有無とその内容、特に『陸奥国骨寺村絵図』に描かれた「骨寺(堂)跡」の痕跡を確認するためのものであり、調査地点は、一関市巖美町字駒形5、字若井原194-1に所在する(図2-1-40、図9)。

駒形根神社の南側から西に延びる林道を約500m進んだところで白山社へ向かう南北方向の林道と接続している。ここは平泉野台地と呼ばれる丘陵の東端付近、南東方向に張り出した平場の東縁辺部にあたる。

この平場縁辺部にどのように遺構が分布し、土地が利用されているのかを解明することを目的とした。最初に、林道周辺の下草の刈り払い、樹木の伐採を行い、北から南に順に7ヶ所の調査区(1～7トレンチ)の設定をした後、土層の堆積状況及び遺構の有無を確認するため、掘削を行った。調査期間は、平成28年7月25日～12月14日、調査面積は、約883㎡である。なお、調査終了後は残土を用いて埋め戻し、原状を復帰した。

(1) 基本層序(図10、写真図版8-1・2・6、9-9・11・12、10-16、12-24・26)

代表的な6つの層を挙げる。

Ⅲ層(3層) 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒・小ブロック微量、炭化物粒極微量含む。粘性強。しまり強。

Ⅳ層(4層) 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・小・中ブロック少量、炭化物粒・焼土粒極微量含む。粘性中。しまり中。斜面自然堆積層上層。

Ⅴ層(5層) 10YR3/4暗褐色粘土質シルト。地山粒・小～大ブロック少量、10YR2/2黒褐色粘土質シルト小・中ブロック微量、炭化物粒極微量含む。

粘性極めて強。しまり中。斜面自然堆積層下層。

Ⅵ層(6層) 10YR3/2黒褐色粘土質シルト。地山粒・小ブロック微量、炭化物粒極微量含む。粘性強。しまり中。

Ⅶ層(7層) 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。地山粒・小・中ブロック中量含む。粘性極めて強。しまり強。地山直上層。

Ⅷ層(8層) 10YR5/8黄褐色粘土質シルト。明瞭な混入物なし。粘性強。しまり極めて強。地山。

(2) 確認した遺構

今回確認した遺構(図11～15)は、竪穴住居(縄文時代)8棟、土坑67基、ピット143基、溝4条、焼土遺構1基である。トレンチごと、種別ごとに整理・集計し、示した(表2)。

図11～15および表2から読み取れるように、4トレンチ南半、5トレンチ、7トレンチに遺構が集中して分布する。逆に、1～3トレンチ、4トレンチ北半、6トレンチの遺構の分布密度は低い。

なお、遺構の掘り込みは土坑1以外行っていない。また、土坑1からの出土遺物はなく、遺物はすべて表土および攪乱から出土している。

ここでは、主要な遺構について記す。

竪穴住居1(図10、13、写真図版9-11・13、10-15)

4トレンチで確認した。東側は調査区外に延びているが、ほぼ円形のプランを呈するものとみられる。長軸6.2m以上。埋土の状況から縄文時代のもものとみられる。掘り下げ停止面からは、埋土が黒褐色のピット1基、にぶい赤褐色および暗赤褐色の焼土を中量含むピット2基、磨石1点、被熱し赤変した台石を確認した。

竪穴住居2(図10、13、写真図版9-12・13、10-15)

4トレンチで確認した。西側および南側は調査区外に延びているが、ほぼ円形のプランを呈する

ものとみられる。長軸3.8m以上。埋土の状況から縄文時代のものとみられる。掘り下げ停止面には、炭化材が散見され、焼失家屋であった可能性がある。

竪穴住居3 (図14、写真図版10-18、11-19・20)

5トレンチで確認した。西側は調査区外に延びている。遺構の遺存状態が悪く、本来の規模は不明だが、長軸4.5m以上。住居本体の埋土は、上層の黒色土と下層の暗褐色土からなる。長径20~25cmほどの河原石を直径70cmほどの円形に組んだ石囲炉があり、黒褐色土で埋没している。石囲炉を中心にほぼ円形のプランを呈していたと考えられる。埋土の状況および付属施設の特徴から縄文時代中期のものである。掘り下げ停止面からは、にぶい赤褐色の焼土単層からなるPit 1基を確認した。

竪穴住居4 (図14、写真図版10-18、11-21)

5トレンチで確認した。西側および東側は調査区外に延びている。遺存状態が悪いが、ほぼ円形のプランを呈するものとみられる。長軸5.0m以上。埋土は、暗褐色土であり、その状況から縄文時代のものの可能性が高い。

竪穴住居5 (図10、14、写真図版10-16・18、11-23)

5トレンチで確認した。南側の一部は調査区外に延びているが、ほぼ円形のプランを呈することがわかる。直径約6m。埋土の状況から縄文時代のものの可能性が高い。

竪穴住居6 (図14、写真図版11-22)

5トレンチで確認した。西側および東側は調査区外に延びているが、ほぼ円形のプランを呈するものとみられる。長軸6m以上。埋土は、暗褐色

土であり、その状況から縄文時代のものの可能性が高い。

竪穴住居7 (図14)

5トレンチで確認した。西側の一部は調査区外に延びているが、楕円形のプランを呈するものとみられる。長軸約5m。付属施設。埋土は、暗褐色土であり、その状況から縄文時代のものの可能性が高い。

竪穴住居8 (図10、14、写真図版12-26・27)

7トレンチで確認した。西側・東側・南側は調査区外に延びているが、ほぼ円形のプランを呈するものとみられる。長軸5.4m以上。埋土の状況から縄文時代のものとみられる。掘り下げ停止面からは、にぶい赤褐色の焼土からなるPit 1基、石皿もしくは台石とみられる長径35cmほどの礫石器、縄文土器片などを確認した。なお、この周辺の表土層から篋状石器がまとまって出土していることから、本来はこの住居に伴っていた可能性がある。

土坑1 (図10、11、写真図版8-5)

1トレンチで確認した。北側は調査区外に延びているが、ほぼ円形のプランを呈するものとみられる。長軸1.0m以上、深さ65~70m。断面形は、上部が開くU字形である。遺物は出土していない。埋土の状況から縄文時代のものの可能性が高い。

焼土遺構 (図11)

1トレンチで確認した。西側は調査区外に延びているが、ほぼ円形のプランを呈するものとみられる。長軸20cm。埋土は黒褐色土で、焼土粒をやや多く含む。掘り込み周囲の地山は被熱し、赤味かかった褐色に変化、硬化している。屋外の地床炉とみられる。縄文時代のものか？

(3) 出土遺物 (写真図版12-28、13-29・30、14-31・32、15-33)

近世の陶磁器3点、縄文時代の土器(深鉢・無頸壺?) 1555点、土製品(土器片製円板・土偶) 21点、焼粘土塊4点、剥片石器(剥片を含む、尖頭器・篋状石器・石匙) 137点、礫石器(凹石・磨石ほか)

24点、石製品(砥石?・台石ほか) 7点、その他(礫) 1点の合計1752点が出土した。種別ごと、トレンチごとに整理・集計し、示した(表3、4)。抽出した遺物のうち主要なものの一部は、遺物観察表

(表12、15)に掲載した。

表3、4からも読み取れるように、4トレンチ、5トレンチ、7トレンチから遺物が集中して出土している。逆に、1～3トレンチ、6トレンチからは遺物の出土が少ない。このことは、遺構の分布密度と整合的である。

出土した縄文土器深鉢のキャリパー形の器形、渦巻文を施した中空把手、橋状把手、渦巻状突起、

(4) まとめ

調査の結果、竪穴住居・土坑・ピット群からなる比較的規模の大きい集落が営まれていたことが判明した。

時期は、確認した遺構(竪穴住居・石囲炉)、遺物(縄文土器・土偶)の特徴から縄文時代中期中葉が中心であると考えられる。

横S字状突起などの装飾、器面に貼り付けられる無調整の細隆線、沈線・隆線による施文は、縄文時代中期中葉の特徴を示している。

前代の中期前葉(大木7 b 式期)で多用される原体圧痕、連弧文も一定量認められるものの、その中心は中期中葉(大木8 a 式期)にあるとみられる。

近世の遺物は、陶磁器の小片3点のみで、古代から中世にかけての遺物は出土していない。今回の調査では、『陸奥国骨寺村絵図』に描かれた「骨寺(堂)跡」の痕跡を確認することはできなかった。

(山川)

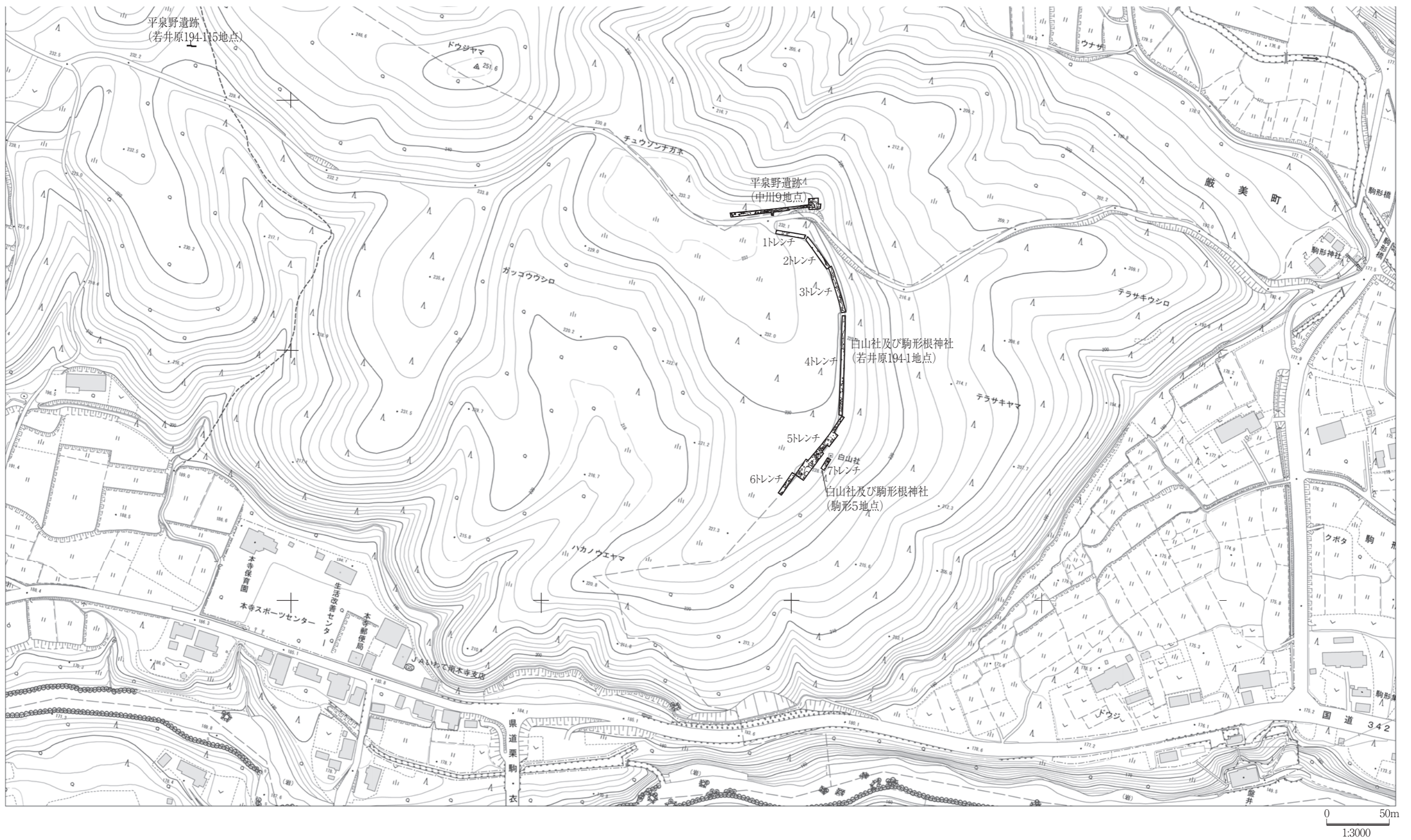


図9 白山社及び駒形根神社、平泉野遺跡調査区配置図

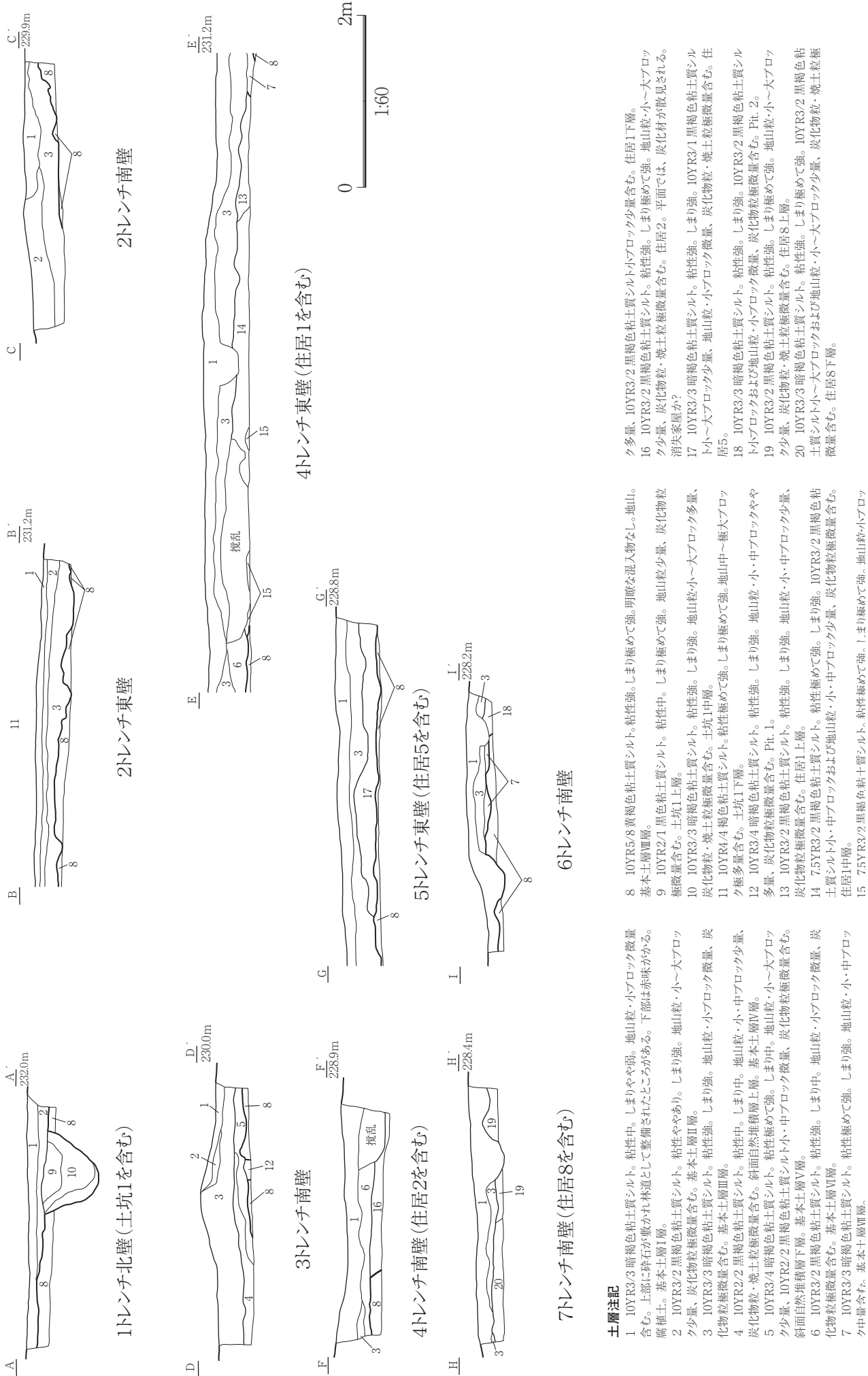


図 10 白山社及び駒形根神社土層断面図

土層法記

- 1 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性中。しまりやや弱。地山粒・小・中・大プロック少量、上部に碎石が散かれ林道として整備されたところがある。下部は赤味がかる腐植土。基本土層I層。
- 2 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性ややあり。しまり強。地山粒・小～大プロック少量、炭化物粒極微量含む。基本土層II層。
- 3 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。地山粒・小・中・大プロック少量含む。基本土層III層。
- 4 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。粘性中。しまり中。地山粒・小・中・大プロック少量、炭化物粒・焼土粒極微量含む。斜面自然堆積層上層。基本土層IV層。
- 5 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。粘性極めて強。しまり中。地山粒・小～大プロック少量、10YR2/2 黒褐色粘土質シルト・中・大プロック微量、炭化物粒極微量含む。斜面自然堆積層下層。基本土層V層。
- 6 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性強。しまり中。地山粒・小・中・大プロック少量、炭化物粒極微量含む。基本土層VI層。
- 7 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性極めて強。しまり強。地山粒・小・中・大プロック少量含む。基本土層VII層。

- 8 10YR5/8 黄褐色粘土質シルト。粘性弱。しまり極めて強。明瞭な混入物なし。地山。基本土層VIII層。
- 9 10YR2/1 黒色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。地山粒少量、炭化物粒極微量含む。土坑I上層。
- 10 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。地山粒小～大プロック多量、炭化物粒・焼土粒極微量含む。土坑I中層。
- 11 10YR4/4 褐色粘土質シルト。粘性極めて強。地山中～極大プロック多量含む。土坑I下層。
- 12 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。地山粒・小・中・大プロックやや多量、炭化物粒極微量含む。Pit. 1。
- 13 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。地山粒・小・中・大プロック少量、炭化物粒極微量含む。住居1上層。
- 14 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性極めて強。しまり強。10YR3/2 黒褐色粘土質シルト・中・大プロックおよび地山粒・小・中・大プロック少量、炭化物粒極微量含む。住居1中層。
- 15 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性極めて強。しまり極めて強。地山粒・小・大プロック

ク多量、10YR3/2 黒褐色粘土質シルト・小・大プロック少量含む。住居1下層。
 16 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性強。しまり極めて強。地山粒・小～大プロック少量、炭化物粒・焼土粒極微量含む。住居2。平面では、炭化材が散見される。消失家屋か？

- 17 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。10YR3/1 黒褐色粘土質シルト・小～大プロック少量、地山粒・小・大プロック微量、炭化物粒・焼土粒極微量含む。住居5。
- 18 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。10YR3/2 黒褐色粘土質シルト・小・大プロックおよび地山粒・小・大プロック微量、炭化物粒極微量含む。Pit. 2。
- 19 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。粘性強。しまり極めて強。地山粒・小～大プロック少量、炭化物粒・焼土粒極微量含む。住居8上層。
- 20 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。粘性強。しまり極めて強。10YR3/2 黒褐色粘土質シルト・小～大プロックおよび地山粒・小～大プロック少量、炭化物粒・焼土粒極微量含む。住居8下層。

1トレンチ北壁(土坑1を含む)

2トレンチ東壁

2トレンチ南壁

3トレンチ南壁

4トレンチ東壁(住居1を含む)

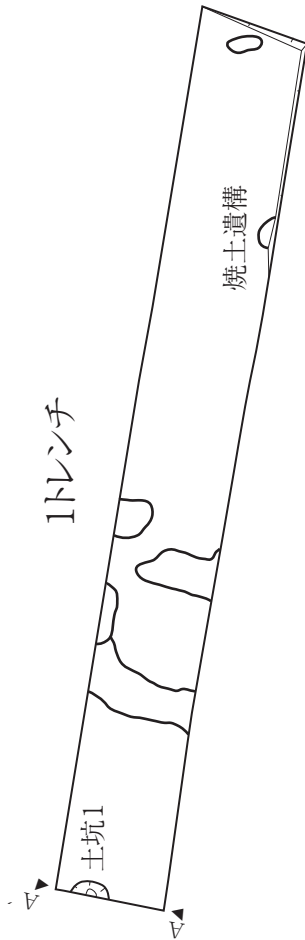
4トレンチ南壁(住居2を含む)

5トレンチ東壁(住居5を含む)

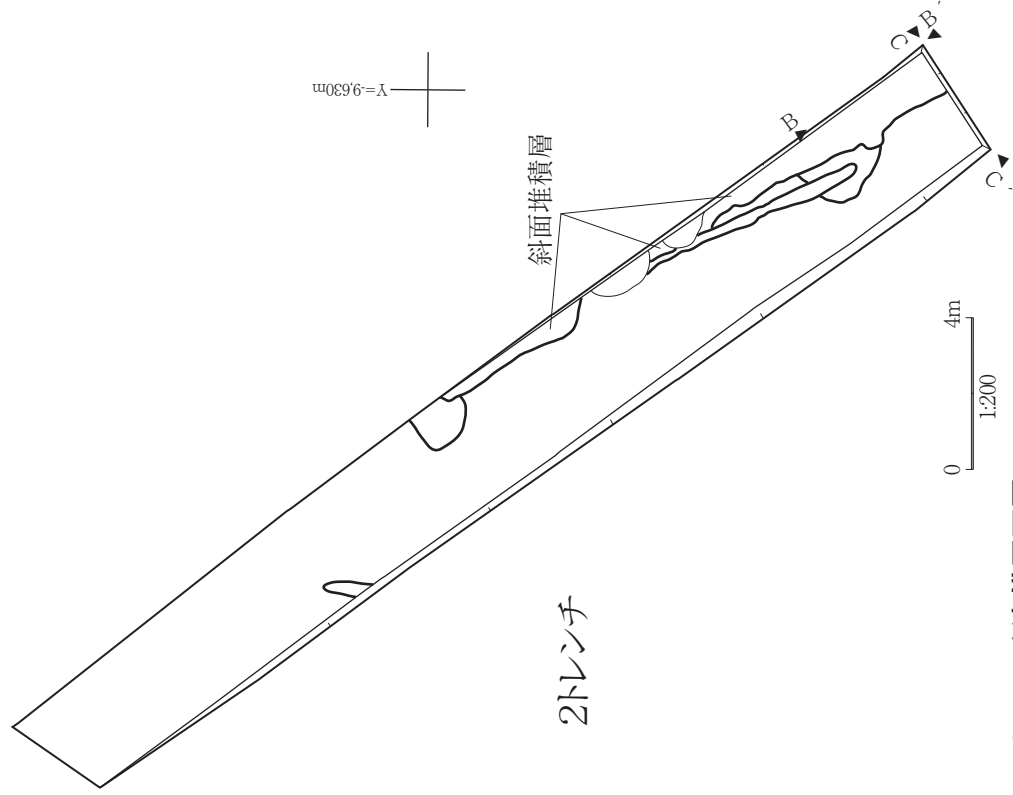
7トレンチ南壁(住居8を含む)

6トレンチ南壁

X=-113,500m



X=-113,520m
Y=9,600m



Y=9,630m

図11 白山社及び駒形根神社 1・2トレンチ遺構平面図

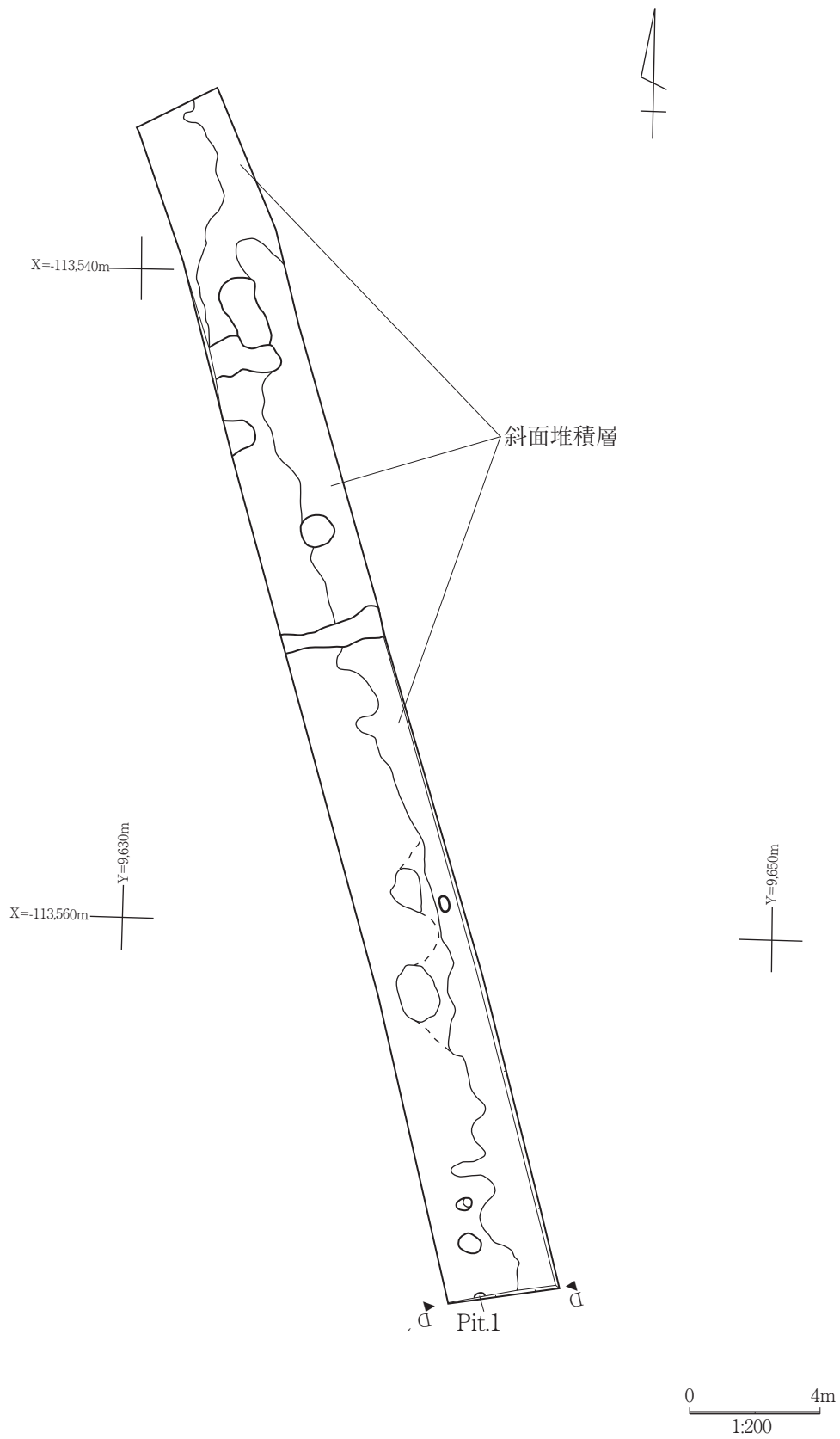


図12 白山社及び駒形根神社3トレンチ遺構平面図

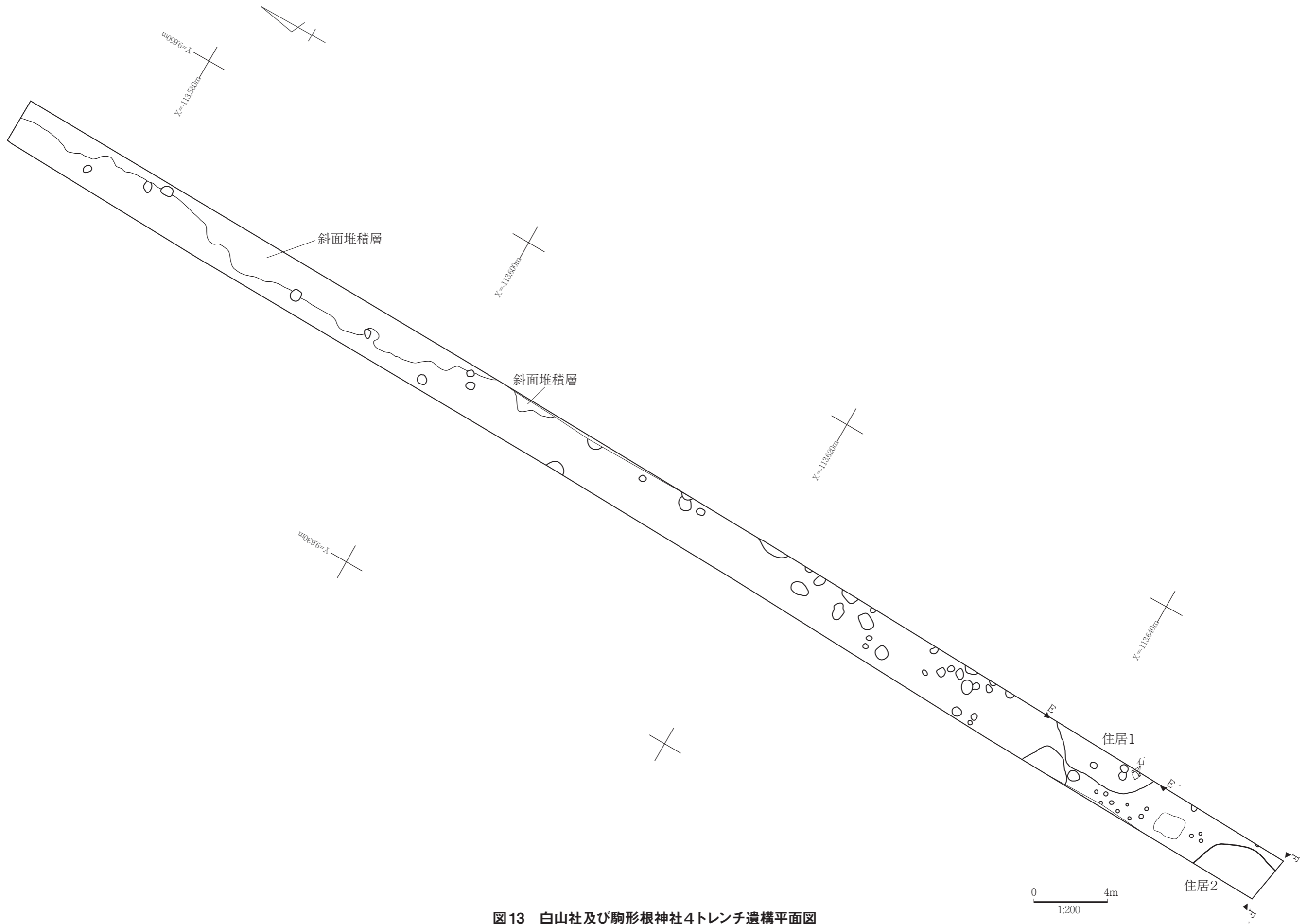


図13 白山社及び駒形根神社4トレンチ遺構平面図

表2 白山社及び駒形根神社確認遺構集計表

区分	竪穴住居	土坑	Pit	溝	焼土遺構	計
1トレンチ	0	6	0	0	1	7
2トレンチ	0	2	0	2	0	4
3トレンチ	0	4	4	1	0	9
4トレンチ	2	11	46	0	0	59
5トレンチ	5	33	72	0	0	110
6トレンチ	0	5	12	1	0	18
7トレンチ	1	6	9	0	0	16
計	8	67	143	4	1	223

表3 白山社及び駒形根神社土器・土製品破片集計表

区分		1トレンチ	2トレンチ	3トレンチ	4トレンチ	5トレンチ	6トレンチ	7トレンチ	計		
土器	縄文土器 深鉢	口縁部	0	0	1	47	107	1	24	180	1552
		頸部	0	0	0	21	20	0	7	48	
		胴部	2	1	2	399	709	20	138	1271	
		底部	0	0	0	13	32	1	7	53	
	縄文土器 無頸壺?	口縁部	0	0	0	0	3	0	0	3	
土製品	土器片製円板	—	0	0	1	4	12	0	2	19	21
	土偶	—	0	0	0	1	1	0	0	2	
その他	焼粘土塊	—	0	0	0	0	4	0	0	4	
計			2	1	4	485	888	22	178	1580	

表4 白山社及び駒形根神社石器・石製品破片集計表

区分		1トレンチ	2トレンチ	3トレンチ	4トレンチ	5トレンチ	6トレンチ	7トレンチ	計		
石器	剥片石器	尖頭器	頁岩	0	0	0	0	1	0	0	1
		筥状石器	頁岩	0	0	0	0	1	0	5	6
		石匙	頁岩	0	0	0	1	1	0	0	2
	剥片	頁岩	3	1	1	12	64	2	21	104	128
		赤色頁岩	0	0	0	0	1	0	2	3	
		玉髓	1	0	0	1	7	0	2	11	
		珪化木	0	0	0	0	0	1	0	1	
		黒曜岩	0	0	0	0	3	0	2	5	
		凝灰岩	0	0	0	0	2	0	0	2	
		泥岩	0	0	0	0	2	0	0	2	
	礫石器	凹石	安山岩	0	0	0	1	9	1	1	12
磨石		安山岩	0	0	0	0	7	2	2	11	
敲磨器?		安山岩	0	0	0	0	1	0	0	1	
石製品	砥石?	安山岩質溶岩	0	0	0	0	0	1	1	2	
	台石	安山岩	0	0	0	0	2	0	0	2	
	台石?	安山岩	0	0	0	0	2	0	1	3	
その他	礫	泥岩	0	0	0	0	0	0	1	1	
計			4	1	1	15	103	7	38	169	

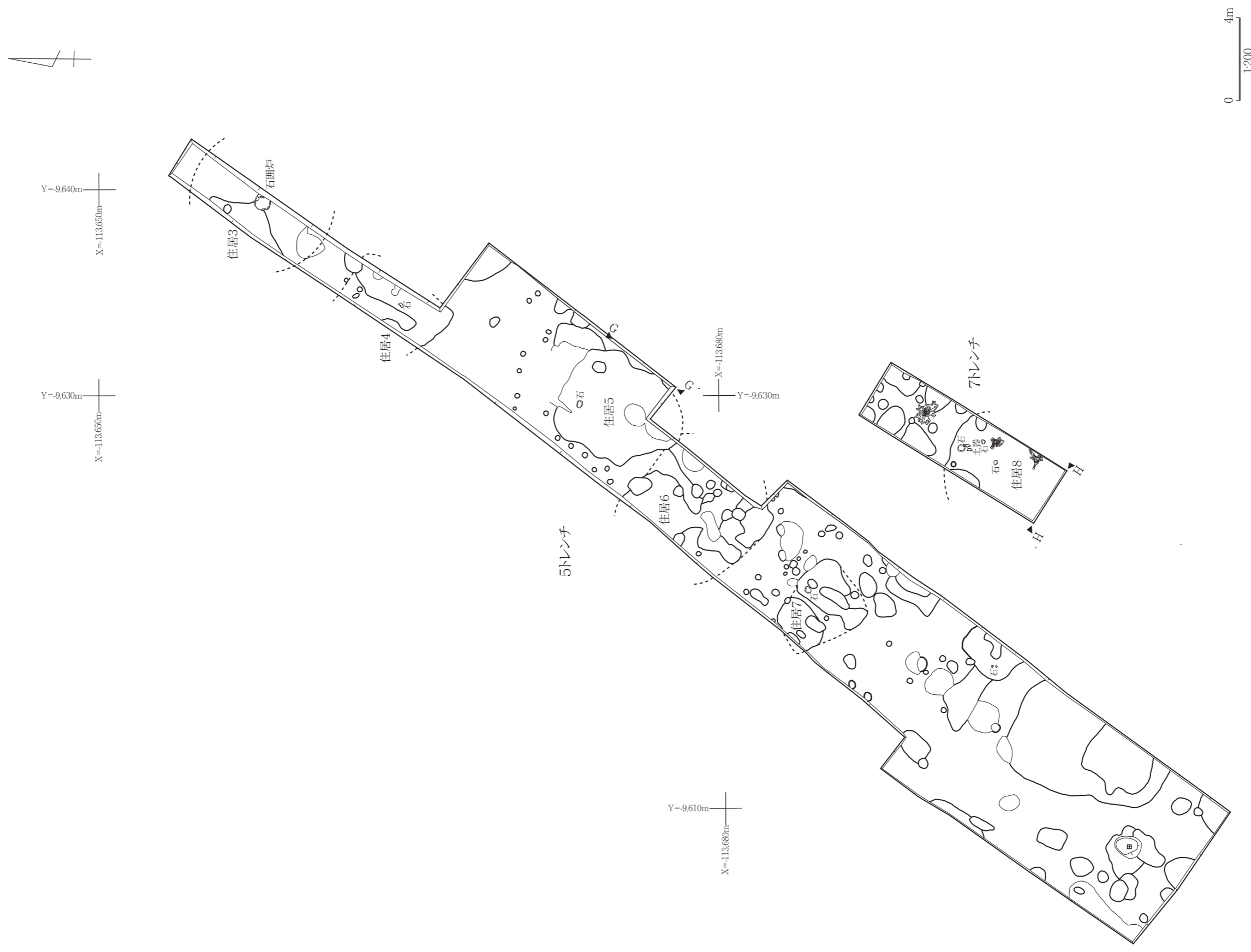


図14 白山社及び駒形根神社5・7トレンチ遺構平面図

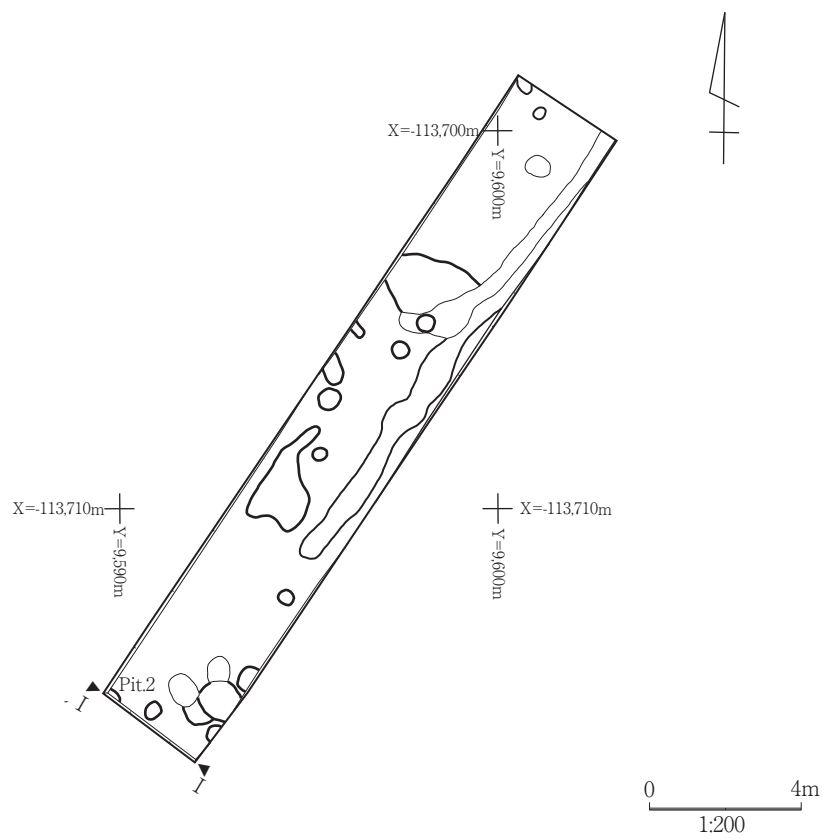


図15 白山社及び駒形根神社6トレンチ遺構平面図

5 平泉野遺跡(中川9地点)の調査

調査地点は、一関市巖美町字中川9である(図2-1-41、図9)。平泉野台地で最も広い南東部の平場の北東縁辺部の山林を調査した。すぐ東側は、中川、駒形、若井原の3つの字境である。駒形根神社の南側から西に延びる林道を約500m進んだところで白山社へ向かう南北方向の林道と接続しているところである。

調査期間は平成28年11月15日から12月8日、調査面積は222㎡である。

樹木を伐採、刈り払いの上、地形を観察したところ、南東部の平場の北東隅に約10m四方の平場

を確認した。ここに約8m四方のトレンチを、その西側に林道に沿って長さ約60m、幅2～3mのトレンチ(写真図版16-1)を設定した。

表土を除去して遺構を確認し、その一部を断ち割って断面を観察した。

利用した測量基準杭の成果は以下のとおり。

・基H28-14

X = -113498.338, Y = +9569.839, H = 232.374,

・基H28-15

X = -113496.133, Y = +9516.690, H = 233.055

(1) 基本土層

I層(1層) 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物粒を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土。

II層(2層) 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物粒を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。

III層(11層) 10YR3/3暗褐色シルト。地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に10～20%混じる。炭化物粒を微量含む。粘性あり。しまりあり。地山の漸移層。

IV層(12層) 10YR5/8黄褐色粘性シルト。粘性強い。しまりあり。地山。

(2) 主な遺構

溝1 調査区の東半で確認した(図16・17、写真図版16-2、17-3・4、18-5)。平場の縁辺の地形に沿って西から東に35m、そこから南に向きを変えて5m延び、東西に走る林道の造成によって切られている。西端も西側の谷地形を避け

て、さらに調査区外の南西方向に延びるものとみられる。上幅約0.8m、深さ約0.2m、断面は皿形である。埋土は暗褐色シルトに地山塊が少量混じる。出土遺物はなく、年代は不明である。

(3) 出土遺物(写真図版18-6)

縄文時代の土器(深鉢)64点、剥片石器(剥片を含む、筥状石器)7点、礫石器(凹石)1点、合わせて72点が、遺構外から出土した。

縄文土器深鉢にみられる橋状把手、渦巻状突起などの装飾、器面に貼り付けられる無調整の細隆

線、沈線・隆線による施文は、縄文時代中期中葉(大木8a式期)の特徴を示している。

種別ごと、部位ごとに整理・集計して示した(表5)。抽出した遺物のうち主要なものは、遺物観察表(表13・16)に掲載した。

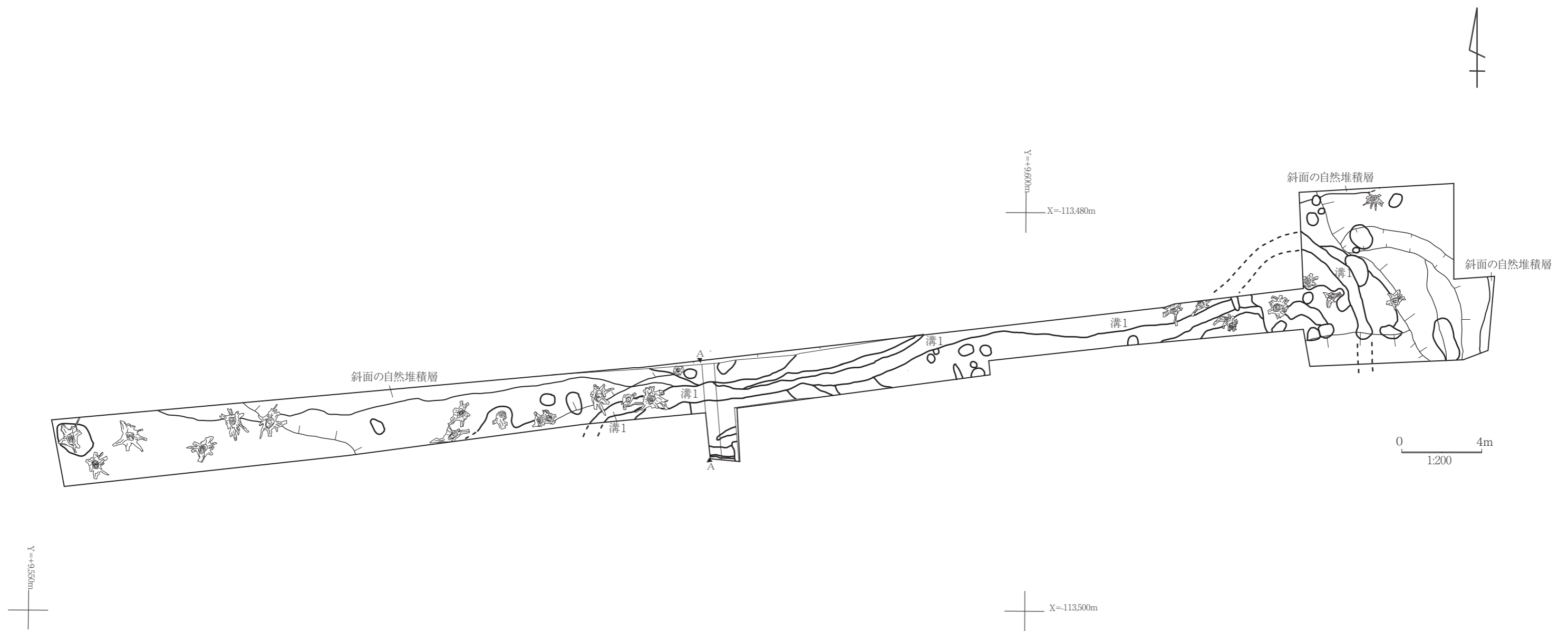


図16 平泉野遺跡(中川9地点)遺構配置図

表5 平泉野遺跡(中川9地点)出土遺物破片集計表

	土器				石器			計
	縄文土器 深鉢				剥片石器		礫石器	
	口縁部	頸部	胴部	底部	碗状石器 (頁岩製)	剥片 (頁岩)	凹石 (安山岩製)	
	計	6	3	55	0	1	6	
	64				7			
					8			

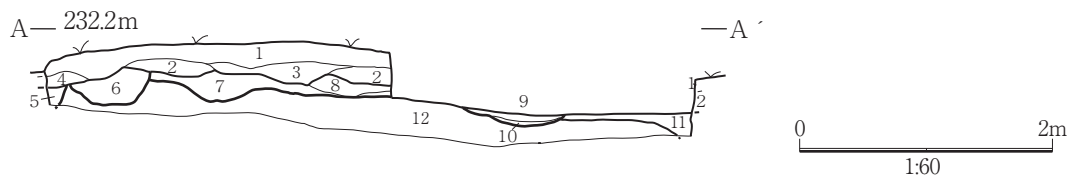
(4) まとめ

この調査地点では、南東部の平場の北東縁辺部に、地形に沿って延びる溝を確認し、周辺の表土層から縄文土器および石器、剥片が出土した。

しかし、溝の形状から縄文時代のものとは考え難く、古代以降のものと思われる。年代は不明であるが、区画溝、あるいは道路側溝の可能性が有る。

28年度に発掘調査を実施した本調査地点の南にある白山社及び駒形根神社の若井原194-1地点で、溝1の延長部とみられる溝は確認できなかった。この溝については、その両端の延長部がどこに向かうのか、その性格と年代を解明するための継続調査が必要である。

(二階堂、(3)は山川)



土層注記

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト。炭化物含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土。基本土層I層。
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト。炭化物含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。基本土層II層。
- 3 10YR3/4 暗褐色シルト。地山塊(径0.5～5.0cm大)均一に20～30%混。炭化物含む。粘性あり。しまりなし。攪乱?。
- 4 10YR3/2 黒褐色粘土。砂利が入る。林道の造成土。
- 5 10YR3/3 暗褐色シルト。地山粘土塊(径0.5～5.0cm大)均一に20～30%混。炭化物含む。粘性あり。しまりあり。遺構?。
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。地山塊(径0.5～10.0cm大)均一に20～30%混。混。炭化物含む。粘性あり。しまりあり。溝?。
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。地山塊(径0.5～5.0cm大)均一に30～40%混。混。炭化物含む。粘性あり。しまりあり。
- 8 10YR3/4 暗褐色シルト。地山塊(径0.5～5.0cm大)均一に10～20%混。炭化物含む。粘性あり。しまりあり。
- 9 10YR3/3 暗褐色シルト。地山塊(径0.5～10.0cm大)一部に3～5%混。炭化物含む。粘性あり。しまりあり。溝の上層。
- 10 10YR3/3 暗褐色シルト。地山塊(径0.5～5.0cm大)均一に30～40%混。炭化物少量含む。粘性あり。しまりあり。溝の下層。
- 11 10YR3/3 暗褐色シルト。地山塊(径0.5～5.0cm大)均一に10～20%混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりあり。地山漸移層?。基本土層III層。
- 12 10YR5/8 黄褐色粘性シルト。粘性強い。しまりあり。地山。基本土層IV層。

図17 平泉野遺跡(中川9地点)土層断面図

6 平泉野遺跡(若井原 194-115 地点) の調査

平泉野台地の頂部付近は、標高258mの「オイノモリ」と標高251mの「ドウジヤマ」が連なる。2つの丘の南側に沿って、東端の駒形根神社から西に向かう林道があり、丘の間を南北に縦断する道が延びる。調査地点は、2つの道が交差する場所で、巖美町字若井原 194-115 である(図 2-2-39、図 9)。東南東約 950 m に駒形根神社が、南東約 600 m に白山社がある。

「オイノモリ」と「ドウジヤマ」の丘に囲まれた沢部分、2つの道が交差する地点の北西側に、南側が開口して広がる「U」字形の段切り区画がある。その内側の中心付近には、2基の塚がある(写真図版 19-1-2)。区画は、長辺約 50 m、短辺(北辺)約 17 m、内面積約 1430㎡で、全体的に南に向かって緩やかに傾斜する。

調査地点の段切り地形は、平成 26 年度踏査で発見(一関市教育委員会 2015)し、塚群は、國學院大學の踏査で発見(國學院大學 1997)されていた。

27 年度、外側の道も含めた範囲の三次元地形測量と段切り区画の北東部にトレンチを設定し、発掘調査を実施した(図 18)。段切りの造成土からは遺物の出土はなかったが、放射性炭素年代測定(AMS 法)を行った結果、古くとも近世以降のものであることがわかった。

28 年度は、塚の年代が段切り造成が行われた時期と同じか否かを確認するため、北側の塚 1 について発掘調査を行った。現地での調査期間は平成 28 年 7 月 1 日から 12 月 5 日まで、調査面積は 3.5 ㎡である。

利用した測量基準杭の成果は以下のとおりである。

基 A2-2 X=-113383.284, Y=+9119.723,
H=228.623

基 A2-6 X=-113330.706, Y=+9125.603,
H=233.039



平泉野遺跡(若井原 194-115 地点) の調査の様子

(1) 基本土層 (図20、写真図版21-2、22-2)

I層(1層) 10YR2/3暗褐色シルト。炭化物粒を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土。

II層(7層) 10YR2/3暗褐色シルト。炭化物粒を少量含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。

III層(9層) 10YR2/2黒褐色シルト。炭化物粒を少量含む。粘性あり。しまりあり。有機質分多く

やわらかい土。旧表土層。

IV層(8層) 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物粒を少量含む。粘性あり。しまりあり。

V層(11層) 10YR5/6黄褐色シルト。暗褐色シルトが均一に少量混じる。炭化物粒を微量含む。粘性あり。しまりあり。砂礫を多く含む。地山漸移層。

(2) 遺構

塚1 段切り区画の内側の中心よりやや北寄り、 $X = -113.355$ 、 $Y = +9.130$ 付近にある(図18・19)。現況の規模は直径約3mの概ね円形で高さは約0.4m。表面に石が集中する(図20、写真図版20-3)。現況での塚中心部を勘案して幅0.5mのトレンチを設定した(図20)。

塚の構築は、まずIII層の上から浅いレンズ状に掘り窪め、その上に積み土を三層積み重ねている(図20-2~4層、写真図版21-5-6、22-7)。基底部分は約4m、積み土の高さは約0.6mである。積み土上層には大小の礫が多量に含まれている。積み土の下の塚の中央に近い位置で主体部とみられる掘り込みを確認した(図20-5層、写真図版21-6、22-7)。V層の上面から掘りこまれている。直径1.0mの概ね円形で深さは約0.2mと比較的浅い。埋土は有機質分の多い柔らかい均質の黒土であり、骨片など肉眼で見える遺物は出土しなかった。塚の表面はI層に覆われるが、

多量の石が露出している。これらは形状や大きさがばらばらで、付近の地山に含まれる石と同様のものである。

遺物は出土していない。積み土と主体部の埋土に自然科学分析を実施した(第9・10章)。土壌分析の結果、主体部に人や動物の遺体を埋葬した痕跡は確認できず、積み土からは炭化した稲の籾殻が微量に検出された。また放射性炭素年代測定の結果、16世紀以降に構築されたものであることがわかった。

溝1 塚1の積み土の下で確認した(図20-10層、写真図版22-8)。上幅0.7m、深さ0.25mで、断面は皿形である。埋土は暗褐色シルトに地山塊が混じり、大小の礫が含まれている。遺物の出土はない。東側トレンチで溝は確認されなかったことから、塚の構築に伴う周溝ではなく、それより古い時期の遺構である可能性が高い。

(3) まとめ

区画内部の中央付近にある2基の塚のひとつを調査した結果、16世紀以降に構築されたものであることを確認した。

塚の埋土に含まれていた16点の炭化物試料の中に、近世以降のものは1点もなかったことから、塚は中世後半頃に構築された可能性が高い。

一方、27年度の調査で、段切り区画の造成土からは18世紀以降の炭化物が多数検出されている。区画の造成は、塚の構築後ある程度の年月を隔てて造成された可能性がある。

(二階堂)

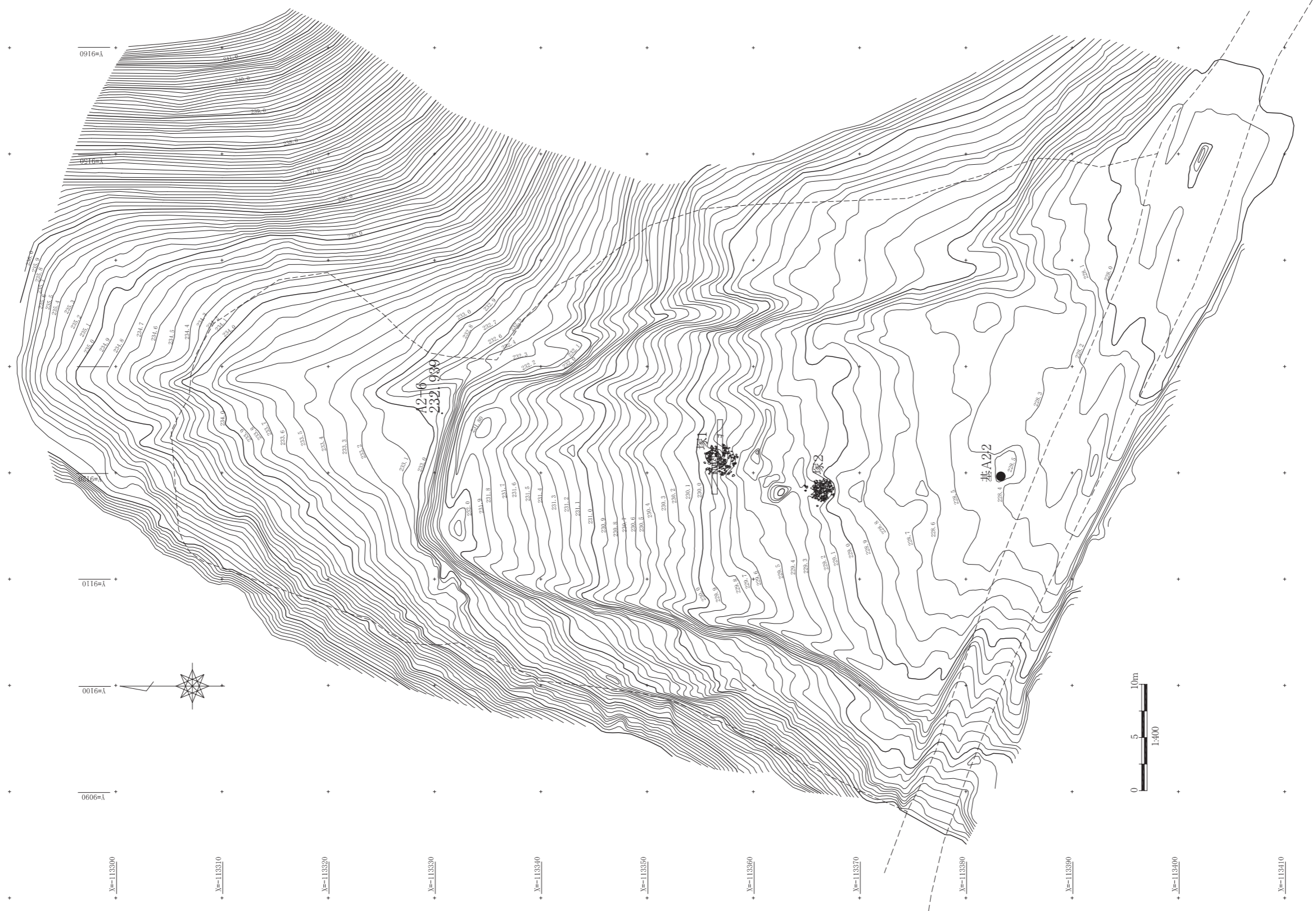


图 18 平泉野遺跡(若井原 194-115 地点) 調査区配置図

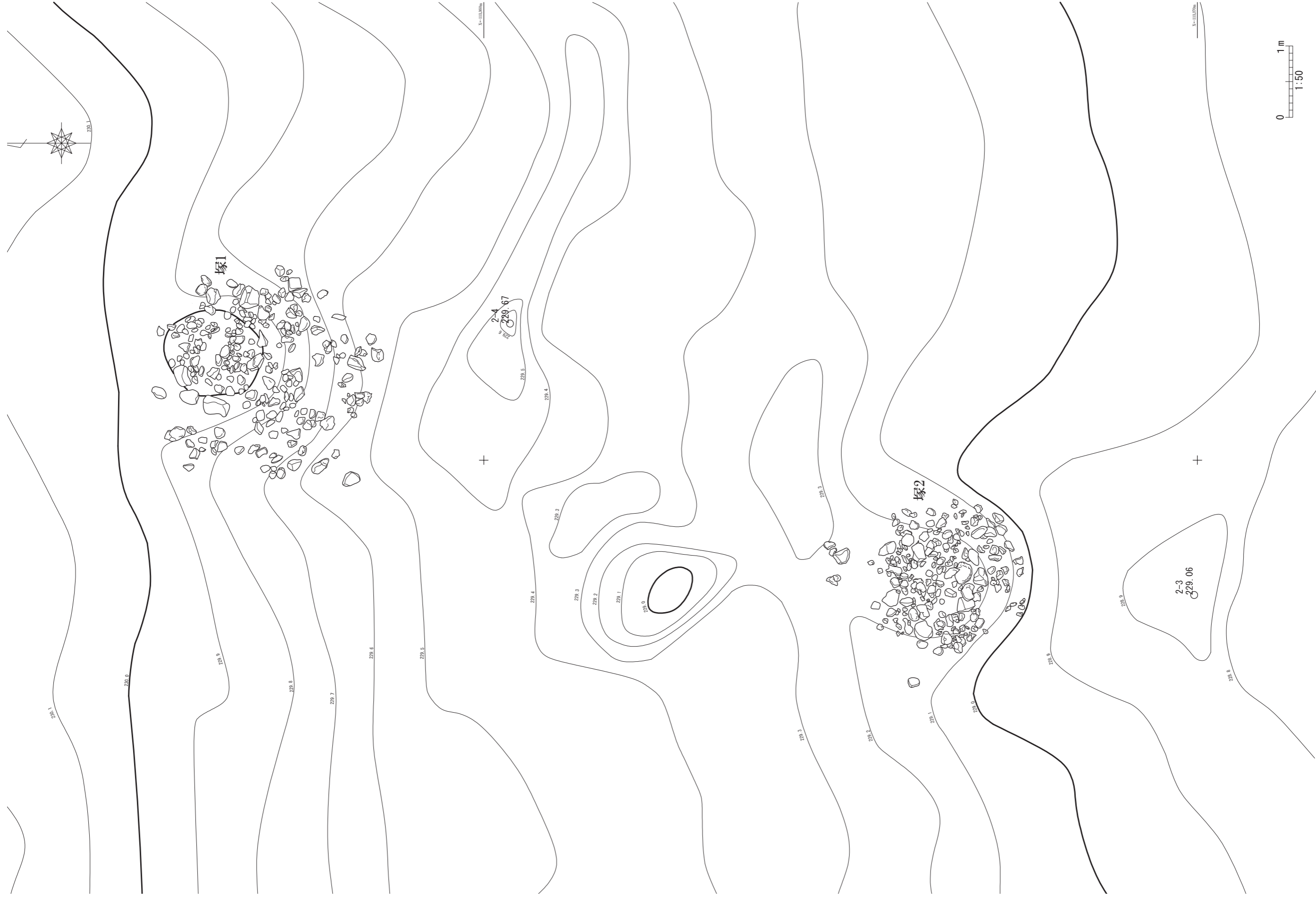
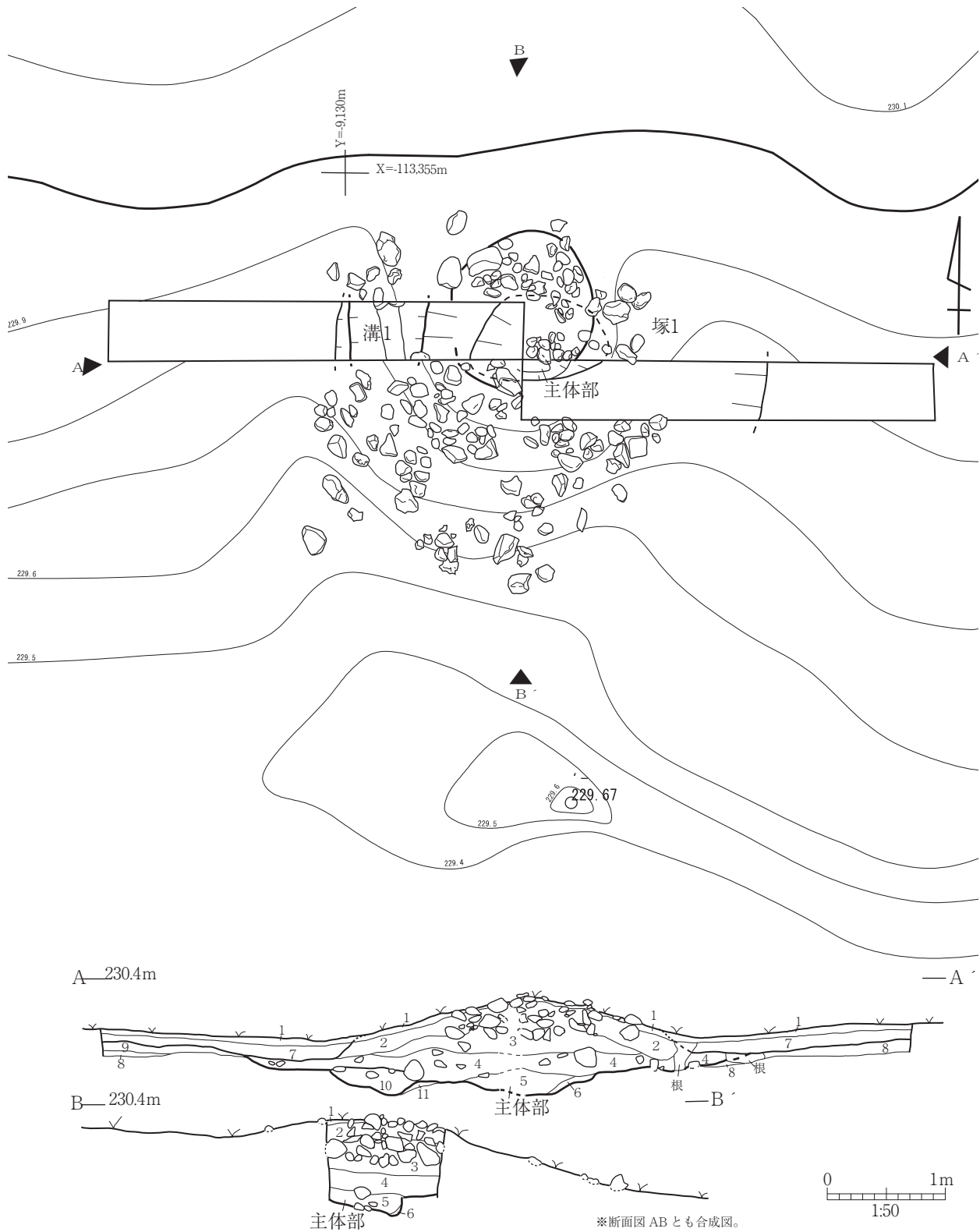


图 19 平泉野遺跡(若井原 194-115 地点) 塚1・2 調査前平面图



土層注記

- 1 10YR2/3 暗褐色シルト。炭化物含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土。基本土層I層。
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト。炭化物少量含む。粘性あり。しまりややあり。大小の礫が多数入る。塚の積み土の最上層。
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト。暗褐色シルト塊(径0.5～5.0cm大)均一に10～20%混。炭化物少量含む。粘性あり。しまりややあり。中心部に多く大小の礫が入る。塚の積み土の中層。
- 4 10YR3/3 暗褐色シルト。にぶい黄褐色シルト塊(径0.5～5.0cm大)均一に少量混。炭化物少量含む。塚の積み土の下層。
- 5 10YR2/2 黒褐色シルト。暗褐色シルト塊(径0.5～5.0cm大)均一に20～30%混。炭化物少量含む。粘性あり。しまりややあり。砂礫が少量混。有機質分多く柔らかい土。主体部埋土。
- 6 10YR2/2 黒褐色シルト。にぶい黄褐色シルト塊(径0.5～3.0cm大)均一に30～40%混。炭化物少量含む。粘性あり。しまりあり。砂礫が多く混。主体部の外側の埋土。
- 7 10YR2/3 暗褐色シルト。炭化物少量含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。基本土層II層。
- 8 10YR3/3 暗褐色シルト。炭化物少量含む。粘性あり。しまりあり。自然堆積層。基本土層IV層。
- 9 10YR2/2 黒褐色シルト。炭化物少量含む。粘性あり。しまりあり。有機質分多く柔らかい土。旧表土層。基本土層III層。
- 10 10YR3/3 暗褐色シルト。にぶい黄褐色シルト塊(径0.5～5.0cm大)均一に30～40%混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりあり。大小の礫入る。溝1の埋土。
- 11 10YR5/6 黄褐色シルト。暗褐色シルト均一に少量混。炭化物微量含む。粘性あり。しまりあり。砂礫多く含む。地山漸移層。基本土層V層。

図20 平泉野遺跡(若井原194-115地点)土層断面図

7 山王窟の調査

本寺の平野部の西端から約3.5km西北西、磐井川左岸に高さ570m程の山王山がある。この山の南南東に張り出した岩壁の標高300m程の所に南西に開口した洞窟があり、山王窟と伝えられ、また日吉神社として信仰されている。(図2-2-42、写真図版23-1)。

山王窟は、『吾妻鏡』文治五年(1189)九月十日条にある、源頼朝により定められた骨寺村の四至で西の境界である。『陸奥国骨寺村絵図』の詳細絵図では「山王石屋」、簡略絵図では「山王」と記され、いずれも正面(西)の「駒形根」の手前に重なる山の一部に描かれている。

山王窟(石屋)と山王山について、『風土記御用書出』(安永四年(1775))には、次のように記されている。

端郷本寺一郷鎮守

一山王社

一小名 山王山

一勸請 人皇五十四代仁明天皇御宇嘉祥三年

慈覚大師の御勸請にて其後鎮守府將軍藤原清衡公御造宮に御座候往古は大社に御座候儀と相聞得巖宮大明神又は麗美宮とも申唱当村名の根元にて一村鎮守に御座候間委細申上候事

一社地 南向

一社 岩穴高七尺幅三間深さ三間有之候内へ勸請仕置候に付社地並に社作御書上不仕候事

一鳥居 一長床 一額

一地主 当御村空地に付地主無之候

一別当 同郡中尊寺衆徒西谷坊

一祭日 四月中の申

端郷本寺

一山王山 高六丁余

(中略)

東は当郡村々並東山室根山遠田郡籠嶽辺其外遠山相見得候得共夫々の銘義申上候事

西は須川嶽大日山迄

南は栗原郡畑岡村畑岡沼並同郡文字村樋ヶ森黒川郡

七ッ森薬喰山辺迄

北は江刺郡気仙郡並南部郡早池峯山其外諸山迄

性格は、その名称から「日吉山王権現」を祀った窟と考えられ、この神が比叡山延暦寺の地主神であることから、天台宗との深い関わりを想定できる。大石氏は「この窟が若神子社の奥の院で、納骨の場としての役割を持っており、若神子—骨寺—山王窟を結ぶ信仰ラインを土俗的なあの世とこの世を結ぶもので、それが天台・山王信仰に取り入れられていった」としている。菅野成寛氏は「中尊寺経蔵別当領となる以前から窟を神聖視する信仰が骨寺村にあり、12世紀には納経が行われた可能性が高い」(菅野2009)としている。また佐藤弘夫氏は「慈覚大師を祀る場所であった」(佐藤2008)としている。

山王窟の発掘調査は行っていないため、構築年代は不明である。また、窟内部に古代から中世の年代を示す遺物は残存していない。

しかし、『吾妻鏡』で四至の西の境界とされていること、詳細絵図にある「山王石屋」の位置、『風土記御用書出』(安永四年(1775))の記載からみて、この窟が「山王窟(石屋)」であることは疑いないであろう。山王社の別当は、昭和40年代まで中尊寺の西谷坊である大長寿院であり、この地で定期的に護摩焚を行っていたという。

過去の調査で窟外側の地形測量を実施しているが、内部の地形測量は初めてである。本年度は、窟内部とその周辺を3Dレーザーで測量し、詳細な地形を記録した。(観測年月日は平成28年6月8日)

日吉神社が祀ってある窟1は標高302m、X=112,420m、Y=7,020m付近にある(付図1~3、5)。入口前面の岩盤はテラス状になっていて、入

口天井部より約1.3mほど張り出している(写真図版23-2)。入口は、幅4.2m、高さ2.6m、奥行き約5.5m程で、奥に進むほど低く、狭くなる。入り口から窟に向かって奥に1.0m程行った左側の内壁は、高さ約0.8mの段が内側にはほぼ直角に0.6m張り出して、奥に続く。最奥部は幅1.0m、高さ1.0mの段になっており、これを利用した祭壇には一躯の石仏が安置され、前面に木製の扉が設置されている(写真図版23-3)。この段は右側の内壁には続かない。

この窟の北西上方、標高308m程の所に窟2がある(付図1~4、写真図版23-4)。入口は、幅

約1.3m、高さ2.0m、奥行き約1.8m程の小規模な窟である。内部には石碑1基が寝かされた状態であり(写真図版23-5)、寛政十三庚申年(1801)の年号と「卯月吉日 大工 甚之允 小工 卯作 挽匠 七右衛門」「奉再造鎮守山王御宮一字」「別當中尊寺大長壽院蓮海」「施主 万次 久五郎」の文字が読み取れる。

窟2から約3.0m西側に窟3がある(付図1~4、写真図版23-4)。入口は、幅約2.5m、高さ2.0m、奥行き約3.6m程である。

(二階堂)

8 骨寺村莊園遺跡の踏査(字下真坂、字下菅生沢周辺)

平成28年度は、『陸奥国骨寺村絵図』にある「馬坂新道」の骨寺村に入るルート^まの比定を目的に踏査を行った。踏査範囲は、詳細絵図で骨寺村の北東部に描かれている「鑑懸」「大師堂」「不動石屋」付近と考えられる巖美町字下真坂周辺とそこから丘陵を北に越えた字下菅生沢^{しもすこうざわ}周辺の山林である。

「馬坂新道」はその名から、「馬も通れるように開鑿された新しい道」と考えられている(大石1984)。詳細絵図では北の山を越えて骨寺村に入る道として描かれており、「大師堂」と慈恵塚とみられる塚の脇から「不動石屋」の丘陵の裏(東)側を通り、「鑑懸」より西側で川を渡ったあたりで西に方向を変え、村の平野部へ向かう。

「鑑懸」は源頼朝により定められた骨寺村の四至で「東鑑懸」とされており、詳細絵図では下端中央、「石ハ井河」(磐井川)との間が最も狭まるあたりにその文字がある。実際の地形では、丘陵の表面の岩が崩落して岩肌が露出した崖となっていることから、地元では「シラカケ」と呼ばれている。「『鑑懸』の語については、地形が鑑状に欠けたところ、という意味」(大石1984)とする説と、民俗学で峠などの境界にある木の枝に木の鑑を投げてかける神事が知られることから、簡略絵図で「東端の道沿いに描かれている木をその『鑑懸』の木とする」(大石1990)説がある。

慈恵塚と大師堂(拝殿)は、本寺の平野部を取り囲む北側丘陵の東端、「逆芝山」と呼ばれる山に位置する。慈恵塚は標高210m付近の頂部近くの小規模な平場に、大師堂はふもとの標高151m付近にある。「詳細絵図の『大師堂』の文字とお堂の絵、簡略絵図の『慈恵塚』『御拝殿』の文字とお堂の絵

は、後筆」(大石2004)と考えられている。大師堂(拝殿)は、「明治以降に建立されたもの」(一関市博物館2014)と考えられており、だとすれば絵図の加筆はそれ以降に行われたことになる。ただ、詳細絵図をよく見るとお堂の下に、表面に石が葺かれた塚らしき絵があり、これについては最初から描かれていた可能性もあるだろう。慈恵塚には、慈恵大師の髑髏^{どくろ}が埋められた場所とする伝承もあるが、これは「近世に本寺にある古塚が『撰集抄』の慈恵大師伝承に結び付けられた可能性が高い」(一関市教育委員会2011)。塚自体の構築時期は不明であるが、「その形状から中世の経塚である可能性がある」(一関市教育委員会2011)。

慈恵塚より600m程西、北側丘陵部のやや南側に向かって張り出した部分の中腹標高180m程の所に不動窟と伝えられる洞窟がある。これ以外に付近に洞窟はなく、絵図の「不動石屋」に比定できる。

「馬坂新道」の骨寺村への入り口については、絵図と実際の地形や遺構を手掛かりに、すでに2つのルートが想定されている。一つは國學院大學が踏査を行い想定した「トリイマエ～慈恵塚～山谷ルート」(図21ルート①)(吉田1999)、もう一つは市教育委員会が22年度に踏査を行い想定した「ゴショノ沢～下菅生沢(沢)ルート」(図21ルート②)(一関市教育委員会2011、鈴木2014)である。

本年度の踏査では、この2つのルートについて再踏査を行うとともに、新たに「トリイマエ～慈恵塚～下菅生沢(尾根)ルート」を踏査し、それぞれの妥当性について比較検討した。

1 踏査成果 (図21、写真1～8)

(1) ルート①「トリアマエ～慈恵塚～山谷」

慈恵塚が骨寺村の入り口の目印であったとの考えによりかつて鳥居があったという「トリアマエ」から、丘陵南斜面を東へ登って慈恵塚へ向かう。塚の脇を通過して山谷墓地に抜け、最終的には達谷窟(平泉町)に達するルートを想定している。

「トリアマエ」付近の丘陵は雑木に覆われ、道の痕跡はほとんどわからない。佐藤光男氏(厳美町字沖要害)によると、「現在慈恵塚に登る『く』の字状の参道のふもと側は造られてから20年も



写真1 絵が描かれた石

たっていない新しい道であり、その前は『トリアマエ』から東に真っ直ぐ登る道であった」という。また、戦後この付近で石切りが行われていたことから、実際矢穴のある石材の他、所々に石の集積がみられる。さらに、僧侶と思われる絵が描かれた石を確認した(写真1)。

慈恵塚から山谷墓地に至る道の3分の1程を踏査し、道が続くことを確認したが、現在は藪に覆われ通行は困難であった(写真2)。



写真2 慈恵塚から山谷へ向かう尾根道

(2) ルート②「ゴシヨノ沢～下菅生沢」

詳細絵図で「馬坂新道」が「不動石屋(窟)」の裏に一度隠れ、再び現れるように描かれている点に注目したルート(一関市教育委員会2011、鈴木2014)である。具体的には、不動窟のある南に張り出した丘陵のすぐ東にある「ゴシヨノ沢」を登り、東西方向の尾根道に達してから東へ向かい、沢道を通して下菅生沢へ抜け、その後、戸河内(平

泉町)を通過して中尊寺に達するルートを想定している。

「ゴシヨノ沢」は、兩岸を急峻な斜面に挟まれた狭い沢であり、登攀は困難であった(写真3)。尾根道は平坦で歩きやすかった(写真4)が、下菅生沢へ向かう沢は落差の大きな滝が途中にあるなど危険を伴うため、迂回して西側の尾根を歩いた。



写真3 ゴシヨノ沢



写真4 東西尾根道

(3) ルート③「トリイマエ～慈恵塚～下菅生沢」

28年度新たに想定したルートである。「トリイマエ」から慈恵塚の脇を通る部分はルート①と同じであるが、そこから下菅生沢へ抜ける道を探した。

慈恵塚から尾根に至る部分は、逆芝山頂部の西側緩斜面を通り北へ向かうルートが最も歩きやすかった(写真5)。下菅生沢へ下る道について、か

つてよく使われていたという道を佐藤光男氏に案内していただいた。沢の西側の尾根道から(写真6)沢に降りてその脇にある道(写真7)に行く。下菅生沢に出る直前には沢の中を歩くことになるが、岩盤は比較的歩きやすく、急斜面には岩を階段状に削り出している部分を確認した(写真8)。



写真5 逆芝山頂部の西側緩斜面



写真6 下菅生沢への尾根道



写真7 下菅生沢への沢沿いの道



写真8 階段状に削られた岩盤

2 まとめ

詳細絵図の「馬坂新道」は丘陵を北に抜けるように描かれているが、踏査の結果、不動窟、慈恵塚のある下真坂周辺から北側丘陵に登る道、また下菅生沢側から登る道とも、急斜面が多く、馬が歩けるような部分は限られていることがわかった。その中でルート③は下菅生沢へ行く道として近年まで使われていたということであり、最も短距離

で丘陵を抜けることができる。

現時点において「馬坂新道」の骨寺村への入り口として、ルート③の可能性が高いとみられるが、確証を得るためには、発掘調査を実施して道の痕跡を確認する必要がある。

(二階堂)

9 平泉野遺跡(若井原194-115地点)の土壌分析

はじめに

本分析調査では、岩手県一関市に所在する骨寺村荘園遺跡内平泉野遺跡の若井原194-115地点塚1の積み土と主体部の埋土を対象として、土壌化学分析(全炭素及び全窒素含量、リン酸含量)と、

土壌洗い出しによる炭化種実、炭化材、骨片等の確認・回収を実施し、遺構の機能(人体の埋納を含む)に関する資料を作成する。

I 土壌化学分析

1 試料

試料は、5層(東トレンチ主体部中央層)と、その比較試料である3層(塚の積み土中層)の2点で

ある。

2 分析方法

全炭素及び全窒素含量は乾式燃焼法、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法(土壌環境分析法編集委員会,1997、土壌標準分析・測定法委員会,1986)に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

1) 試料調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2) 全炭素・全窒素含量

粉碎土試料0.1000g～2.0000gを石英ボートに秤量し、乾式燃焼法により全炭素・全窒素含量を測定する。使用装置は、ヤナコ分析工業製CNコーダーである。分析値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量・全窒素量(T-C・T-N乾土%)を求める。さらに、全炭素量を全窒素量で除し、炭素率(C/N)を求める。

3) リン酸含量

粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに

秤量し、はじめに硝酸(HNO_3)約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO_4)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P_2O_5)濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量($\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$)を求める。

3 結果

土壌化学分析結果を表6に示す。

野外土性(日本ペドロロジー学会編、1997)は、両試料ともLiC(軽埴土)で、粘質である。土色は5層が10YR3/3暗褐、3層が10YR3/1黒褐となり、3層の方が黒色味に富む。全炭素は5層が1.50%、3層が6.91%で、土色(黒色味)に相応する。全窒

素は5層が0.10%、3層が0.39%と全炭素量に相応する。C/N比は5層が15、3層が18である。リン酸含量は5層が0.57mg/g、3層が1.43mg/gである。

比較試料として採取された3層の各分析値の方が5層より大きいことが示された。

表6 土壌化学分析結果

試料名	土色	土性	全炭素 (%)	全窒素 (%)	C/N	全リン酸 P ₂ O ₅ (mg/g)
3層 塚の積み土中層	10YR3/1 黒褐	LiC	6.91	0.39	18	1.43
5層 主体部中央層(東トレンチ主体部土)	10YR3/3 暗褐	LiC	1.50	0.10	15	0.57

備考

- (1) 土性：土壌調査ハンドブック改定版(日本ペドロロジー学会編、1997)の野外土性による。
LiC…軽埴土(粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%)
- (2) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。
- (3) C/N：全炭素÷全窒素。

4 考察

一般的に炭素含量は、主に植生繁茂の指標として用いられ、炭素の集積量は主に植物遺体供給量に規定される。気候的要因による植生の繁茂状態が、炭素含量に大きく影響を与えているとされる。そして、リン酸の多くが植物に由来することが知られている。

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壌や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる

天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが(Bowen, 1983; Bolt and Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g(川崎ほか, 1991)という報告例があり、他に骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0mg/gを越える場合が見られる。

今回の調査では、両試料のリン酸含量が天然賦存量の上限である3.0mg/gを超えるものではなかった。また、比較試料である3層の分析値が5層の分析値より大きい。全炭素量の差異は土色に相応しており、C/N比が大きいことから未分解有機物の存在も確認される。今回の分析結果では、5層が堆積した主体部に人や動物が埋葬された痕跡は確認できず、塚が墓として機能していたことを積極的に示す結果は得られなかった。

II 土壌試料洗い出し・分類同定

1 試料

試料は、5層（東トレンチ主体部中央層）と、その比較試料である3層の2点、計11.8kgで、土嚢袋に入っている。なお、この洗い出しにより5層の土壌中から検出された炭化材8点について、放

2 分析方法

土壌試料の洗い出しは、一部（各1kg、計2kg）を粒径0.5mmの篩を用いて微細な遺物まで回収する方法と、残りの全量（計9.8kg）を粒径2.0mmの篩を用いて遺物を回収する方法を組み合わせ実施する。

試料から炭化物や骨片などの遺物を可能な限り壊さず回収するために、常温乾燥後、肉眼で観察し、炭化種実や炭化材等の遺物を拾い上げる。水を満たした容器に試料を投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmおよび2.0mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて静かに攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20～30回）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。

篩内の試料を粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実の他に、炭化材（主に径2mm以

3 結果

結果を表7に示す。また、同定された炭化種実の写真を図版1に示して同定根拠とする。

分析に供された2試料11,820gを通じて、炭化種実は、3層より栽培種のイネの穎（稈）の基部（小穂軸）が2個（0.001g未満）同定されたのみである。その他、炭化材が5層より0.2g（最大8.9mm）、3層より0.3g（最大8.1mm）と、両試料より菌核が微量確認された。なお、骨片は検出されなかった。

分析残渣は、砂礫主体が5層より556.0g、3層より120.2g、非炭化植物片主体が5層より0.4g、3層

放射性炭素年代測定が実施されている。また、他に塚1の調査現場で採取された炭化材及び炭化物8点も測定されている（第10章参照）。

上）、骨片などの遺物を抽出する。

炭化種実の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を求めて結果を一覧表で示す。同定された分類群は、写真を添付して同定根拠とする。同定後は、炭化種実を常温乾燥後、容器に入れて保管する。

その他の抽出物は、常温乾燥後の重量および一部の最大径を計測し、結果を一覧表で示す。菌核は一部を抽出し、プラス「+」で表示する。分析残渣は、砂礫主体と植物片主体に大まかに分け、常温乾燥後の粒径別重量を表示する。分析後は、抽出物と分析残渣を容器に入れて保管する。なお、非炭化植物片のうち、同定が可能な種実や葉については、抽出同定後、分類群別に容器に入れて水浸保存している。

より6.0gを量る。5層では砂礫が多く、3層では非炭化植物片が多い。なお、非炭化植物片には、両試料より生長中の蘚苔類の茎・葉が確認された他、5層より落葉広葉樹で高木になるクマノミズキの核と、3層より常緑針葉樹で高木になるスギの葉・種子、落葉広葉樹で高木になるコナラ（疑問符含む）の殻斗・果皮・子葉、カラスザンショウの種子、低木のタニウツギ属の種子、草本のスゲ属の果実、タデ属の果実、オカトラノオ属の種子が確認され、いずれも保存状態が極めて良好で

ある。これらの種実・葉などの大型植物遺体は混入の可能性が高く、調査区極近辺のコナラ林・ス

ギ植林に由来すると考えられるため、結果表および図版2に示すにとどめ、考察より除外している。

4 考察

塚1の主体部埋土(5層)および積み土(3層)の試料を全量洗い出した結果、3層よりイネの炭化穎が確認された他、両試料より炭化材が検出された。なお、骨片は検出されなかったことから、上述の土壤化学分析結果と同様に、塚1主体部とさ

れる土壌内へ動物遺体が埋納されたことを積極的に肯定するには至らない。

積み土(3層)より確認された穀類のイネは、当時利用された植物質食糧と示唆され、炭化していることから被熱したとみなされる。

表7 土壤試料洗い出し・炭化種実同定結果

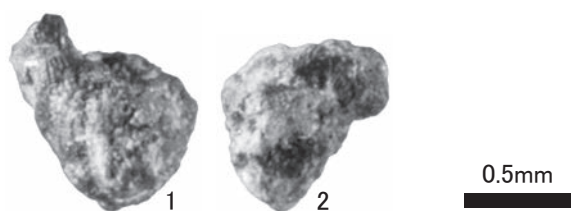
分類群	部位・状態		3層		5層		備考
			塚の積み土中層		主体部中央層		
炭化種実							
イネ	穎(基部)	破片	2	-	-	-	個数, <0.001g
炭化材		>2mm	7.9	8.1	5.0	8.9	最大径(mm)
			0.1	0.2	0.0	0.2	乾重(g)
菌核			+	-	+	-	[+]で示す
砂礫主体		>4mm	26.3	65.0	78.9	309.9	乾重(g)
		4-2mm	4.0	13.1	18.0	90.6	乾重(g)
		2-1mm	4.1	-	27.6	-	乾重(g)
		1-0.5mm	7.6	-	31.0	-	乾重(g)
非炭化植物(混入の可能性)		>4mm	0.8	1.9	0.1	-	乾重(g)
		4-2mm	0.8	1.8	0.0	0.1	乾重(g)
		2-1mm	0.2	-	0.1	-	乾重(g)
		1-0.5mm	0.4	-	0.1	-	乾重(g)
スギ	葉	完形	1	3	-	-	個数
	種子	完形	-	3	-	-	個数
コナラ	殻斗	破片	-	1	-	-	個数
コナラ亜属(コナラ?)	果皮(頂部)	破片	1	1	-	-	個数
コナラ属(コナラ?)	果皮(基部)	破片	3	31	-	-	個数
	果皮	破片	40	200	-	-	個数
	果皮・子葉	破片	1	-	-	-	個数
	子葉	半分	1	2	-	-	個数, 1個食痕
	子葉	破片	2	10	-	-	個数
カラスザンショウ	種子	完形未満	1	-	-	-	個数
クマノミズキ	核	破片	-	-	-	1	個数
タニウツギ属	種子	完形	2	-	-	-	個数
スゲ属	果実	完形	2	-	-	-	個数
タデ属	果実	完形	1	-	-	-	個数, 2面体
オカトラノオ属	種子	完形	2	-	-	-	個数
蘚苔類	茎・葉		+	-	++	+	[+]で示す, 分析中生長
昆虫類(混入の可能性)			-	+	-	-	[+]で示す
分析量			1000	4359	1000	5461	乾重(g)
洗い出しに使用した篩の粒径			0.5	2.0	0.5	2.0	(mm)

文献

- 天野洋司・太田健・草場敬・中井信,1991,中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,28-36.
- Bolt, G.H. and Bruggenwert, M.G.M, 1980,土壌の化学.岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳,学会出版センター,309p.
- Bowen, H.J.M., 1983,環境無機化学-元素の循環と生化学-.浅見輝男・茅野充男訳,博友社,297p.
- 土壌標準分析・測定法委員会編,1986,土壌標準分析・測定法.博友社,354p.
- 土壌環境分析法編集委員会編,1997,土壌環境分析法.博友社,427p.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 川崎弘・吉田滂・井上恒久,1991,九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,23-27.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大学出版会,678p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.
- 日本ペドロロジー学会編,1997,土壌調査ハンドブック改訂版.博友社.
- 鈴木庸夫・高橋冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種-.誠文堂新光社,272p.

※) 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

図版 1 炭化種実



1. イネ 穎(基部)(3層; 塚の積み土中層) 2. イネ 穎(基部)(3層; 塚の積み土中層)

図版2 大型植物遺体



- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1 スギ 葉(3層:塚の積み土中層) | 2 スギ 種子(3層:塚の積み土中層) |
| 3 コナラ殻斗(3層:塚の積み土中層) | 4 コナラ亜属(コナラ?) 果皮(頂部)(3層:塚の積み土中層) |
| 5 コナラ属(コナラ?) 果皮(基部)(3層:塚の積み土中層) | 6 コナラ属(コナラ?) 果皮(基部)(3層:塚の積み土中層) |
| 7 コナラ属(コナラ?) 果皮・子葉(3層:塚の積み土中層) | 8 コナラ属(コナラ?) 子葉(食痕)(3層:塚の積み土中層) |
| 9 カラスザンショウ 種子(3層:塚の積み土中層) | 10 クマノミズキ 核(5層:主体部中央層 東トレンチ主体部土) |
| 11 タニウツギ属 種子(3層:塚の積み土中層) | 12 スゲ属 果実(3層:塚の積み土中層) |
| 13 タデ属 果実(3層:塚の積み土中層) | 14 オカトラノオ属 種子(3層:塚の積み土中層) |

10 AMS法による平泉野遺跡 (若井原¹⁹⁴⁻₁₁₅地点) の年代測定

1 測定対象試料

平泉野遺跡は、岩手県一関市巖美町字若井原194-115に所在する。測定対象試料は、塚1から検出された炭化物および炭化材の合わせて16点である(表1)。

試料No.11～18の炭化材は、塚1の5層で採取された土壌サンプルから篩(2mm)を用いた洗い

出し作業で検出された(別稿自然科学分析報告参照)。

塚1は、主体部とされる掘り込みと、その上位の積み土からなる。測定対象試料が採取された3層は積み土中層、4層は積み土下層、5層は主体部中央層とされる。

2 測定の意義

塚の造営年代を明らかにする。

3 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
(2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、

1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米

国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。

年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表8に、補正していない値を参考値として表9に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲

に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦

年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al.2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表8・9に示す。

塚1から出土した16点の試料にはかなりの年代幅があるが、層によってまとまりが見られる。3層(積み土中層)出土試料No.1の ^{14}C 年代は $390 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1σ)は1450～1614cal ADの間に2つの範囲で示される。中世から近世頃に相当し(佐原2005)、16点の中で最も新しい。

主体部確認面出土試料No.7の ^{14}C 年代は $2390 \pm 30\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1σ)は縄文時代晩期末葉から弥生時代前期頃に相当する(小林2009、小林編2008)。次に述べる4層出土試料の主要な年代範囲に重なる。

4層(積み土下層)出土試料6点(No.2～6、10)の ^{14}C 年代は、 $2580 \pm 30\text{yrBP}$ (試料No.3)から $940 \pm 20\text{yrBP}$ (試料No.5)の間にある。暦年較正年代(1σ)は、No.2～4、6、10が全体として縄文時代晩期中葉から弥生時代中期頃に相当(小林2009、小林編2008)、1点だけ新しいNo.5が1034～1151cal ADの間に3つの範囲で示される。

5層(主体部中央層)出土試料8点(No.11～18)の ^{14}C 年代は、 $4890 \pm 30\text{yrBP}$ (試料No.18)から $2220 \pm 20\text{yrBP}$ (試料No.11)の間にある。暦年較正年代(1σ)は、最も古いNo.18が縄文時代前期後葉頃、最も新しいNo.11が弥生時代中期頃に相当し、これら2点を除く6点は全体として縄文時代中期後葉から後期前葉頃にまとまっている(小林2009、小林編2008)。

以上のように、試料にはかなりの年代幅がある。その中で最も新しい試料は積み土から出土したNo.1で、中世から近世頃の値を示した。次に新しいNo.5は平安時代の後半頃の値を示したが、これは縄文時代から弥生時代の値を示す試料とともに主体部の埋土から出土している。縄文時代や弥生時代の値を示す試料については、主体部の掘削土に含まれていた古い炭化物である可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表8 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)		$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり			
							Libby Age (yrBP)		pMC (%)	
IAAA-160902	No.1	塚1 3層(積み土中層)	炭化材	AAA	-26.51	± 0.56	390	± 20	95.30	± 0.28
IAAA-160903	No.2	塚1 4層(積み土下層)	炭化物	AAA	-26.07	± 0.49	2,260	± 30	75.49	± 0.24
IAAA-160904	No.3	塚1 4層(積み土下層)	炭化物	AaA	-26.09	± 0.50	2,580	± 30	72.54	± 0.25
IAAA-160905	No.4	塚1 4層(積み土下層)	炭化物	AAA	-26.45	± 0.50	2,350	± 30	74.60	± 0.24
IAAA-160906	No.5	塚1 4層(積み土下層)	炭化材	AAA	-27.72	± 0.63	940	± 20	88.92	± 0.27
IAAA-160907	No.6	塚1 4層(積み土下層)	炭化材	AAA	-30.11	± 0.56	2,330	± 30	74.82	± 0.23
IAAA-160908	No.7	塚1 主体部確認面	炭化材	AAA	-28.30	± 0.46	2,390	± 30	74.24	± 0.25
IAAA-160909	No.10	塚1 4層(積み土下層)	炭化物	AAA	-28.30	± 0.46	2,220	± 30	75.89	± 0.24
IAAA-161512	No.11	塚1 5層(主体部中央層) 2.0mm篩	炭化材	AAA	-22.50	± 0.31	2,220	± 20	75.87	± 0.23
IAAA-161513	No.12	塚1 5層(主体部中央層) 2.0mm篩	炭化材	AAA	-28.40	± 0.41	3,950	± 30	61.15	± 0.21
IAAA-161514	No.13	塚1 5層(主体部中央層) 2.0mm篩	炭化材	AAA	-23.41	± 0.41	3,890	± 30	61.63	± 0.21
IAAA-161515	No.14	塚1 5層(主体部中央層) 2.0mm篩	炭化材	AAA	-24.43	± 0.37	3,800	± 30	62.33	± 0.21
IAAA-161516	No.15	塚1 5層(主体部中央層) 2.0mm篩	炭化材	AAA	-25.56	± 0.54	4,040	± 30	60.46	± 0.21
IAAA-161517	No.16	塚1 5層(主体部中央層) 2.0mm篩	炭化材	AAA	-23.30	± 0.40	3,910	± 20	61.45	± 0.19
IAAA-161518	No.17	塚1 5層(主体部中央層) 2.0mm篩	炭化材	AAA	-25.48	± 0.38	3,710	± 20	63.03	± 0.20
IAAA-161519	No.18	塚1 5層(主体部中央層) 2.0mm篩	炭化材	AAA	-24.70	± 0.27	4,890	± 30	54.37	± 0.20

[#8146, 8269]

表9 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

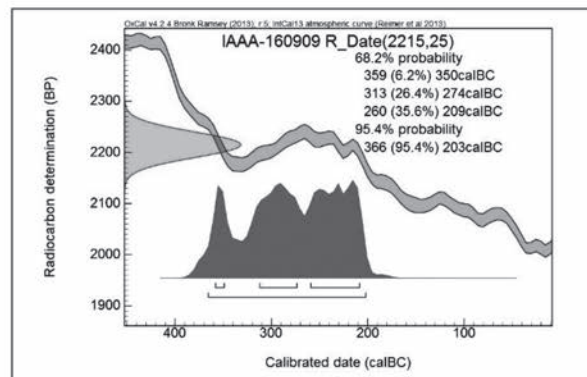
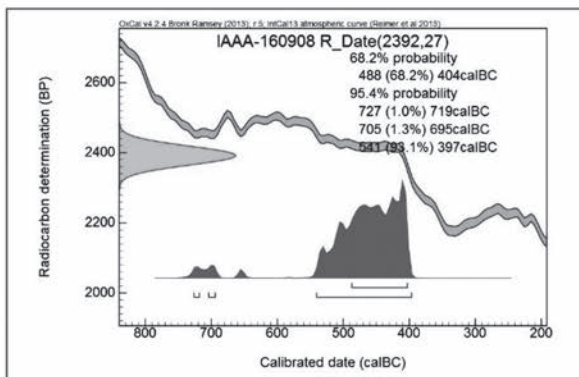
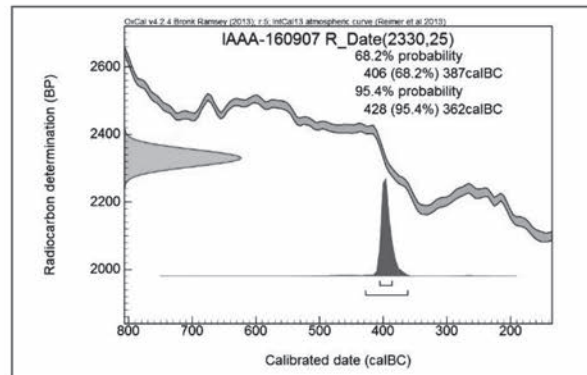
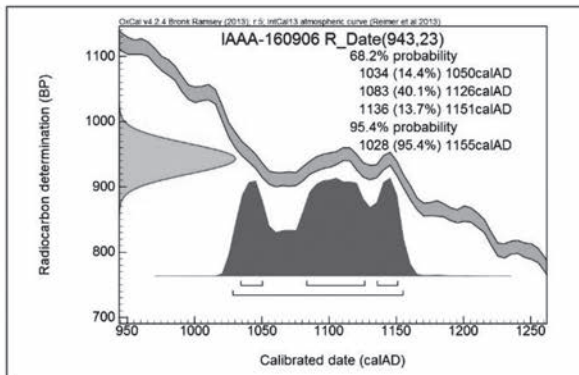
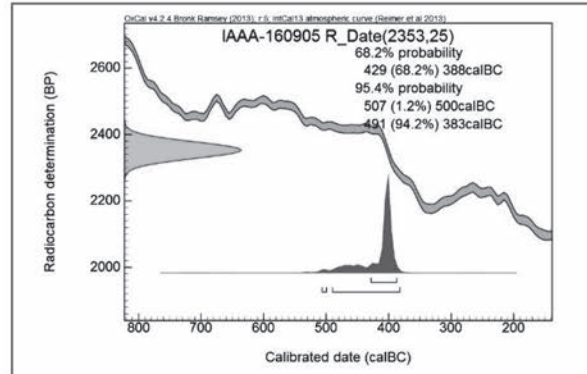
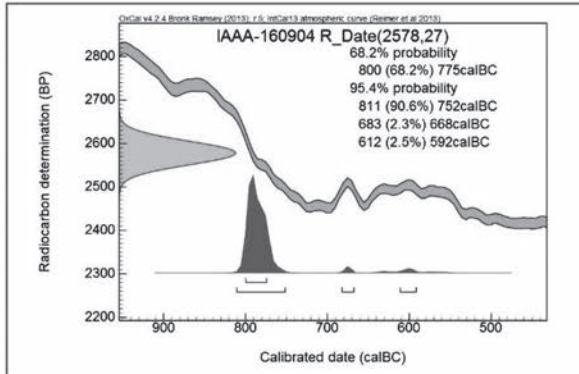
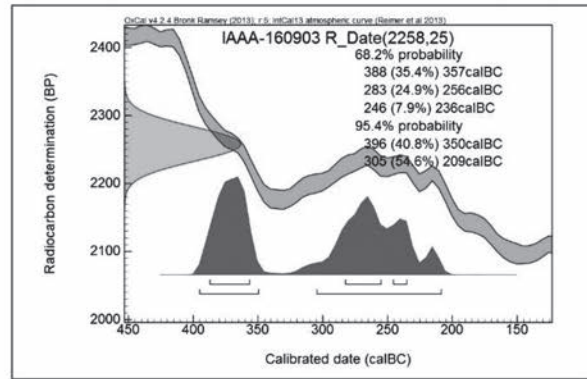
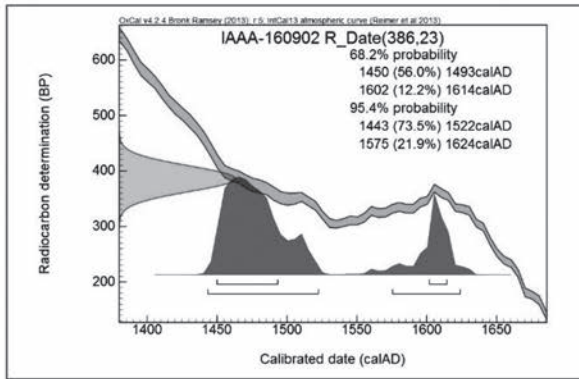
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし			暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)				
IAAA-160902	410	± 20	95.00 ± 0.26	386 ± 23	1450calAD - 1493calAD (56.0%) 1602calAD - 1614calAD (12.2%)	1443calAD - 1522calAD (73.5%) 1575calAD - 1624calAD (21.9%)
IAAA-160903	2,280	± 20	75.33 ± 0.23	2,258 ± 25	388calBC - 357calBC (35.4%) 283calBC - 256calBC (24.9%) 246calBC - 236calBC (7.9%)	396calBC - 350calBC (40.8%) 305calBC - 209calBC (54.6%)
IAAA-160904	2,600	± 30	72.38 ± 0.24	2,578 ± 27	800calBC - 775calBC (68.2%)	811calBC - 752calBC (90.6%) 683calBC - 668calBC (2.3%) 612calBC - 592calBC (2.5%)
IAAA-160905	2,380	± 20	74.38 ± 0.23	2,353 ± 25	429calBC - 388calBC (68.2%)	507calBC - 500calBC (1.2%) 491calBC - 383calBC (94.2%)
IAAA-160906	990	± 20	88.42 ± 0.24	943 ± 23	1034calAD - 1050calAD (14.4%) 1083calAD - 1126calAD (40.1%) 1136calAD - 1151calAD (13.7%)	1028calAD - 1155calAD (95.4%)
IAAA-160907	2,410	± 20	74.04 ± 0.21	2,330 ± 25	406calBC - 387calBC (68.2%)	428calBC - 362calBC (95.4%)

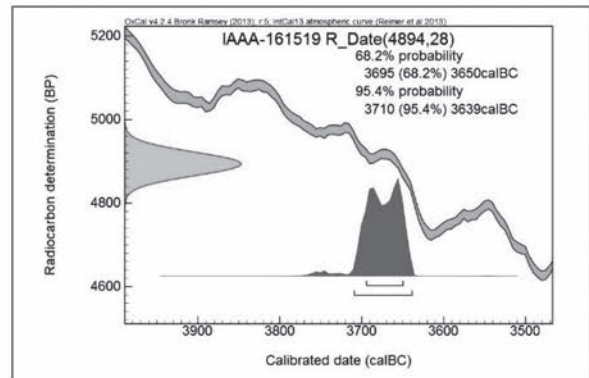
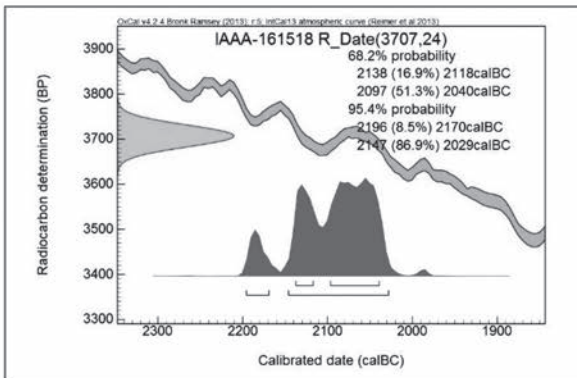
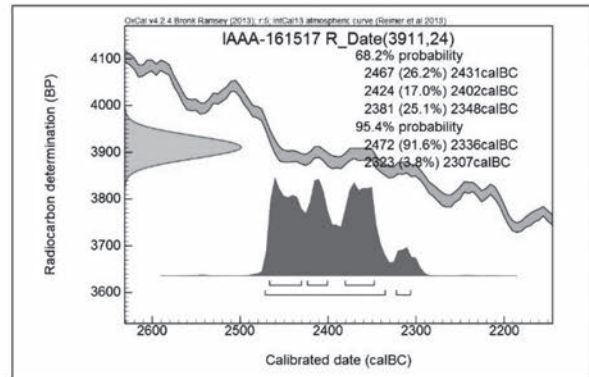
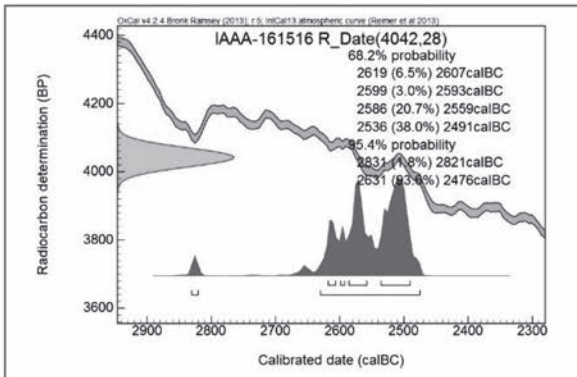
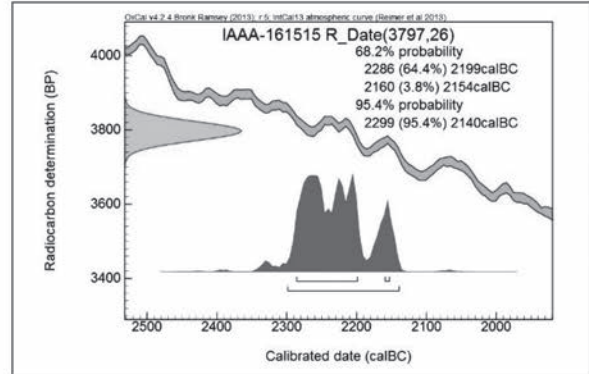
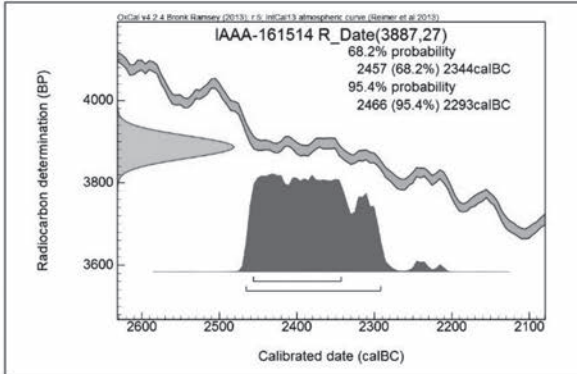
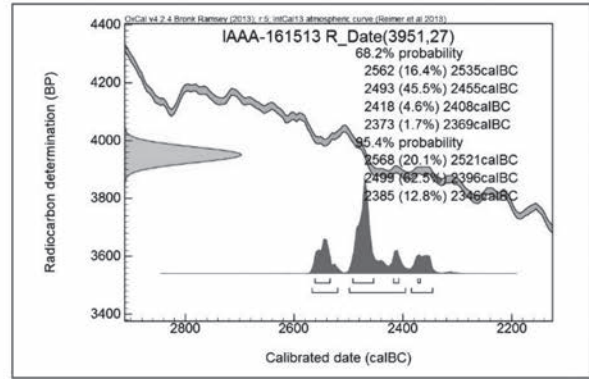
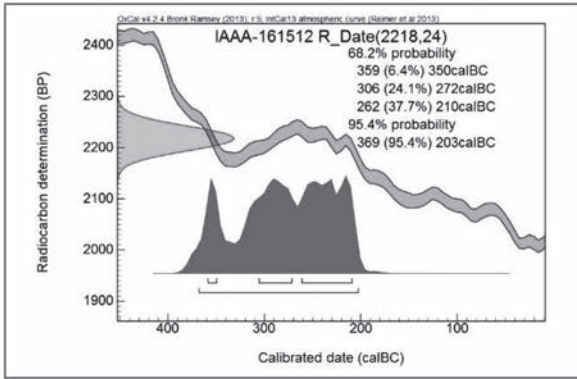
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし						暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)			pMC (%)					
IAAA-160908	2,450	±	30	73.74	±	0.24	2,392 ± 27	488calBC - 404calBC (68.2%)	727calBC - 719calBC (1.0%) 705calBC - 695calBC (1.3%) 541calBC - 397calBC (93.1%)
IAAA-160909	2,270	±	20	75.38	±	0.23	2,215 ± 25	359calBC - 350calBC (6.2%) 313calBC - 274calBC (26.4%) 260calBC - 209calBC (35.6%)	366calBC - 203calBC (95.4%)
IAAA-161512	2,180	±	20	76.26	±	0.23	2,218 ± 24	359calBC - 350calBC (6.4%) 306calBC - 272calBC (24.1%) 262calBC - 210calBC (37.7%)	369calBC - 203calBC (95.4%)
IAAA-161513	4,010	±	30	60.72	±	0.20	3,951 ± 27	2562calBC - 2535calBC (16.4%) 2493calBC - 2455calBC (45.5%) 2418calBC - 2408calBC (4.6%) 2373calBC - 2369calBC (1.7%)	2568calBC - 2521calBC (20.1%) 2499calBC - 2396calBC (62.5%) 2385calBC - 2346calBC (12.8%)
IAAA-161514	3,860	±	30	61.84	±	0.20	3,887 ± 27	2457calBC - 2344calBC (68.2%)	2466calBC - 2293calBC (95.4%)
IAAA-161515	3,790	±	30	62.41	±	0.20	3,797 ± 26	2286calBC - 2199calBC (64.4%) 2160calBC - 2154calBC (3.8%)	2299calBC - 2140calBC (95.4%)
IAAA-161516	4,050	±	30	60.39	±	0.20	4,042 ± 28	2619calBC - 2607calBC (6.5%) 2599calBC - 2593calBC (3.0%) 2586calBC - 2559calBC (20.7%) 2536calBC - 2491calBC (38.0%)	2831calBC - 2821calBC (1.8%) 2631calBC - 2476calBC (93.6%)
IAAA-161517	3,880	±	20	61.67	±	0.18	3,911 ± 24	2467calBC - 2431calBC (26.2%) 2424calBC - 2402calBC (17.0%) 2381calBC - 2348calBC (25.1%)	2472calBC - 2336calBC (91.6%) 2323calBC - 2307calBC (3.8%)
IAAA-161518	3,720	±	20	62.97	±	0.19	3,707 ± 24	2138calBC - 2118calBC (16.9%) 2097calBC - 2040calBC (51.3%)	2196calBC - 2170calBC (8.5%) 2147calBC - 2029calBC (86.9%)
IAAA-161519	4,890	±	30	54.40	±	0.19	4,894 ± 28	3695calBC - 3650calBC (68.2%)	3710calBC - 3639calBC (95.4%)

[参考値]

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55 (4), 1869-1887
- 佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, 佐原眞, ウェルナー・シュタインハウス監修, 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集, ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻, 学生社, 14-19
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363





[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

11 総括

1 梅木田遺跡の調査

本年度調査した東部平場は、調査区のほとんどが埋没した沢とみられる黒い土に覆われていた。遺構や遺物はその上から確認した。

遺構は掘立柱建物跡3棟、柱穴約50基などを確認した。そのうち1棟には溝が廻っていた。遺物は表土から17～18世紀と見られる肥前産や大堀相馬産の陶磁器を確認した。日常雑器の破片であり、屋敷の生活で使用されたものと考えられる。

これらのことから、東部平場には江戸時代中・後期に、溝あるいは埋没した沢で区画された複数

の掘立柱建物が営まれていたといえる。このことは、江戸時代に書かれた「風土記御用書出」に記載のある「梅木田屋敷」の存在を裏付ける。

平成25年度調査で、13世紀中頃～後半の龍泉窯系青磁鎬蓮弁紋碗の破片が出土している。このことは、これまでの調査で掘立柱建物、柱列として組み合うことを確認した以外の柱穴の中に、13世紀の遺構の存在の可能性を示している。しかし、詳細を明らかにすることはできていない。

2 白山社及び駒形根神社の調査

駒形根神社から西に向かう林道を約500m進んだ地点に、南北方向に延びる林道が接続している。本年度は、分岐点から南方向に延びる林道及びその周辺に7つのトレンチを設定し、調査した。

その結果、遺構は竪穴住居8棟、土坑67基、ピット143基などを確認した。遺物は、縄文時代中期の土器、土偶、石器を多数確認した。さらに、17

～18世紀の肥前産陶磁器を3点確認した。

こうしたことから、縄文時代の住居と土坑からなる集落が営まれていたことが明らかとなった。特に白山社に近い南側から遺構・遺物を多く確認しており、平場の南側に集落の存在を指摘できる。調査の目的である「骨寺堂跡」の痕跡は確認できなかった。

3 平泉野遺跡の調査

本年度は、中川9地点、若井原194-115地点の2カ所を調査した。

中川9地点は、白山社及び駒形根神社のすぐ北側にあり、平泉野台地の南東に広がる平場の北辺にあたる。東側には中川、駒形、若井原の字境が存在している。駒形根神社から西へ伸びる林道の北側を長さ60m、幅2～3mにわたりトレンチを設定した。

その結果、調査区の東側約35mにわたる溝を確認した。地形に沿っていることから、道路側溝あるいは区画溝の可能性がある。調査区東部で溝は南に屈曲し、林道に切られている。表土から縄文時代中期の土器と石器が出土したが、溝の年代を推測するには至っていない。

若井原194-115地点では、26年度踏査で確認し

た段切り区画と2基の塚のうち、北に位置する塚を調査した。塚は直径約3m、高さ0.4mで、表面に石が集中している。塚を断ち割ったところ、主体部とみられる掘り込みと、その上に3層の積み土を確認した。

遺物は出土しなかったため、自然化学分析を実施した。その結果、人や動物の骨の痕跡は確認できず、炭化した稲の籾殻を確認した。放射性炭素年代測定(AMS法)の結果、11～12世紀のものを1点、15～16世紀のものを1点検出した。塚の構築年代は16世紀以降であると考えられる。

なお、今回調査した塚は26年度に調査した中川4地点の約30基の塚に類似している。しかし、いずれも遺物は確認できず、塚の性格は不明である。

4 まとめ

梅木田遺跡は、平成12、25～28年度にかけて調査を実施した。25年度調査で出土した中国産青磁の破片以外に、中尊寺経蔵別当領の痕跡を確認することはできなかった。主要な平場の調査を終えたことから、本年度で調査は一区切りとなる。

白山社及び駒形根神社では、縄文時代中期の集落跡を確認した。平泉野台地の南東平場は、縄文時代の集落遺跡であることを指摘できるが、ここ

でも経蔵別当領としての痕跡や、「骨寺(堂)跡」の痕跡は確認できていない。

平泉野遺跡の中川9地点で、35mにも及ぶ溝を確認した。古代以降とみられる遺構の発見は大きな成果であり、今後この周辺を調査することで経蔵別当領としての痕跡を見つけ出したい。

(菅原)

【参考文献】

- 一関市教育委員会2011『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』。
一関市教育委員会2015『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』。
一関市教育委員会2016『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』。
一関市博物館2014『小さき杜に坐す神』
伊藤信1957「辺境在家の成立—中尊寺領陸奥国骨寺村について—」『歴史』第15号 東北史学会。
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2003『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第412集清田台遺跡発掘調査報告書』。
大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号。
大石直正1990「一 東北中世村落の成立—中尊寺領骨寺村」『北日本中世史の研究』吉川弘文館
大石直正2004「Ⅲ 絵図研究の成果」『骨寺村荘園遺跡』一関市教育委員会
菅野成寛2009「「陸奥国骨寺絵図」の宗教史 窟信仰と村の成り立ち」『季刊 東北学』第21号
工藤やよい2008「東北南部における縄文中期前半土偶の研究」『宮城考古学』第10号 宮城考古学会。
黒田日出男1995「陸奥國中尊寺領骨寺村との対話—描かれた東国の村と境相論—」『描かれた荘園の世界』新人物往来社。
國學院大學1997「中世骨寺村絵図の歴史地理学的調査(第6次)」。
佐藤弘夫2008『死者のゆくえ』岩田書院
島田直明2012「Ⅲ. 骨寺村荘園遺跡の植生・植物相—特に丘陵地の植生」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班。
関根達人2009「北奥の一世紀—堂ヶ平経塚の検討—」『平泉文化研究年報』第9号 岩手県教育委員会。
土井宣夫2012「Ⅱ. 地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班。
鈴木弘太2014「骨寺村と中尊寺を繋ぐ道」『中世人の軌跡を歩く』高志書院。
平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「Ⅳ. 一関巖美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班。
吉田敏弘1999「骨寺への道」『中世骨寺村調査報告書 絵図の骨寺村を探る』美しい本寺推進本部。
吉田敏弘2008『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森。

表 10 梅木田遺跡陶磁器遺物観察表

※写図…写真図版

No.	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	産地	年代 (C)	備考
1	-	表面採集	磁器	火入	体	肥前	17 末～18 末	内面露胎あり
2	-	表土	陶器	壺	体	在地	19 以降	お歯黒壺(金属器)模倣、鉄釉・灰釉、鏝状の隆帯めぐる
3	-	表土	磁器	碗	口	肥前	17 末～18 末	写図 7-43- 1
4	-	表土	磁器	碗	口～体	肥前	18 後～19 初	外面に松樹の文様あり
5	-	表土	磁器	皿	口	肥前	17 末～18 末	写図 7-43- 2
6	-	表土	陶器	壺	体	大堀相馬	19	
7	-	表土	磁器	皿	体	肥前	17 末～18 末	
8	-	表土	磁器	碗	体	肥前	18 ～19	
9	-	表土	陶器	不明	体	不明	近世以降	
10	-	表土	陶器	壺	口	大堀相馬	18	写図 7-43- 3
11	-	表土	陶器	壺	体～底	大堀相馬	18	高台部露胎、写図 7-43- 4
12	-	表土	磁器	小杯	口	肥前	18 ～19	
13	-	表土	磁器	碗	体	肥前	18 ～19	
14	-	整地層?	磁器	碗	底	肥前	17 末～18 末	
15	-	整地層?	磁器	皿	口～底	肥前	17 末～18 末	高台部露胎、内禿、写図 7-43- 5

表 11 白山社及び駒形根神社陶磁器遺物観察表

※写図…写真図版

No.	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	産地	年代 (C)	備考
1	5トレンチ	表土	磁器	皿	口	肥前	17 末～18 末	写図 15-33- 1
2	5トレンチ	表土	磁器	碗	口	肥前	17 末～18 末	写図 15-33- 2
72	7トレンチ	表土	陶器	壺	口	肥前	17 後～18 後	呉器手、写図 15-33- 3

表 12 白山社及び駒形根神社土器・土製品遺物観察表

※写図…写真図版

No.	地点	層位	種類	器種	部位	年代	備考
1	3トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	口縁部無文、その下に無調整の細隆線貼付
2	4トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	刻目のある隆帯が付き肥厚、その下は平行沈線により区画
3	4トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	隆帯が付き肥厚、その下に縦位に連続する原体圧痕を施す
4	4トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	無調整の細隆線による渦巻文
5	4トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	小型、受口状を呈する
6	4トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	低い隆帯が付く短い口縁部に刺突文を施す
7	4トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	キャリパー形の器形とみられる、隆帯と沈線により渦巻文・楕円形状の文様を描く、写図 13-29- 3
8	4トレンチ	攪乱	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	隆沈文で渦巻を施す突起
9	4トレンチ	攪乱	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	楕円形状に区画された内部に円形刺突文を施す
10	4トレンチ	攪乱	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	隆帯貼付による横 S 字状文?、内面に隆帯を貼り付け沈線を施した渦巻文あり、写図 12-28- 3
11	4トレンチ	攪乱	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	波状口縁の小突起部、口唇部に原体圧痕後隆帯が貼り付けられ縄文を施す、頸部には幅広の浅い沈線が施されるのみ、写図 13-29- 1
12	4トレンチ	攪乱	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	波状口縁の小突起部に橋状把手が取り付く、橋状突起の周辺には刺突文が施される、頸部は原体圧痕がみられる、写図 13-29- 2
13	4トレンチ	攪乱	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	頸部との境を沈線文(一部連弧状)で区画する、上部には横 S 字状の突起がつく、写図 13-30- 2
14	4トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	沈線により区画した内側に半截竹管文を施す
15	4トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	頸部との境を沈線文で区画する、その下は連弧文がめぐる
16	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	口縁直下に幅広の隆帯、その下に平行沈線による渦巻文のモチーフ
17	5トレンチ	攪乱	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	口縁端部に連続する刻目

No.	地点	層位	種類	器種	部位	年代	備考
18	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	隆帯が付き肥厚、隆帯とその下に原体圧痕を施す
19	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	無文帯に刻目を施す、その下は沈線による連弧文
20	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	波状口縁の小突起が連続する、隆帯により波状文・渦巻状文が描かれる、写図 13-29- 4
21	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	沈線文により楕円形状の文様を描く、写図 13-30- 3
22	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	キャリパー形、短く直立気味の口縁に沈線文・円形竹管文・原体圧痕を施す、頸部は細隆線・沈線で渦巻状・S 字状・楕円形のモチーフを描く、写図 12-28- 5
23	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	やや内傾する直立気味の短い口縁部に隆帯をめぐらせ区画、頸部は沈線により楕円形状・三角形?の文様を描く、写図 13-30- 4
24	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	隆帯と沈線により渦巻状・楕円形状の文様を描く、上部には横 S 字状の突起がつく、写図 13-30- 5
25	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	隆帯を貼り付け平行沈線で区画、2条の連続刺突文
26	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	キャリパー形、波状口縁の波頂部に突起
27	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	頸部に小さな楕円形の粘土を貼り付けし、刻目を施す
28	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	口唇部に縦位、頸部に連弧状の原体圧痕
29	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	小波状口縁、口縁直下に横位の原体圧痕、以下は地文、写図 12-28- 1
30	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	上部に渦巻状の突起、口唇部には原体圧痕?が施され、外面には沈線による三角形?の文様を描く、内面上端に波状の隆帯が貼り付けられる、写図 13-30- 6
31	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	口縁端部に縦位原体圧痕
32	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	隆帯を貼り付け沈線による渦巻文を施した中空把手
33	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	口縁部は短く直立、その下に鏝状の隆帯がめぐり、舌状の小突起がつく、写図 12-28- 2
34	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	隆帯と平行沈線によって区画、その間に櫛歯状工具?によって連続する(矢羽状の)斜行沈線文を施す、写図 12-28- 6
35	5トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	隆帯と沈線により渦巻状の文様を描く、渦巻状文によって区画された内部に刺突文を施す、写図 13-29- 5
36	7トレンチ	表土	土器	無頸壺?	口縁部	縄文中期	隆帯と沈線により渦巻状文を施し渦巻状・楕円形状の区画をつくる、写図 13-29- 6
37	7トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	隆帯と沈線により渦巻状の文様を描く、口唇部には隆帯による渦巻状の突起がつく、写図 13-30- 1
38	7トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	扁平、中空把手がつく、沈線以下は地文+連弧文
39	7トレンチ	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	平行沈線によって区画し文様(渦巻状文?)を施す、写図 12-28- 4
40	5トレンチ	表土	土器	深鉢	頸部	縄文中期	隆帯を貼り付け刻目を施す、その下は地文施文後波状に原体圧痕
41	4トレンチ	表土	土器	深鉢	胴部	縄文中期	縦位に無調整の細隆線による直線文・波状文を交互に施す
42	5トレンチ	表土	土器	深鉢	胴部	縄文中期	半截竹管による押引文
43	5トレンチ	表土	土器	深鉢	胴部	縄文中期	円形刺突文
44	7トレンチ	表土	土器	深鉢	底部	縄文中期	底面が不整な四角形を呈する
45	4トレンチ	攪乱	土製品	土偶	-	縄文中期	有脚立像土偶の脚部先端のみ残存、表・裏面ともに平行沈線による文様が施される、写図 14-31- 2
46	5トレンチ	表土	土製品	土偶	-	縄文中期	板状形態、頭部・両腕部・腰部以下を欠く、腹面・背面ともに無文、両乳房と腹部を表現する小さな貼付がある、写図 14-31- 1
47	4トレンチ	表土	土製品	土器片製円板	-	縄文中期	地文のみのもの
48	5トレンチ	表土	土製品	土器片製円板	-	縄文中期	地文のみのもの、沈線文のものあり
49	7トレンチ	表土	土製品	土器片製円板	-	縄文中期	地文のみのもの

表 13 平泉野遺跡（中川9地点）土器遺物観察表

※写図…写真図版

No.	地点	層位	種類	器種	部位	年代	備考
1	-	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	口縁端部に隆帯を貼り付け肥厚させる
2	-	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	無文、写図 18-6-1
3	-	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	2条の隆帯とそれをつなぐ橋状把手、隆帯間に無調整の細隆線で波状文を施す、写図 18-6-2
4	-	表土	土器	深鉢	口縁部	縄文中期	波状口縁の波頂部に渦巻状突起がつく、2条の隆帯間に無調整の細隆線で波状文を施す、写図 18-6-3
5	-	表土	土器	深鉢	頸部	縄文中期	口縁部とを平行沈線で区画、その直下に無調整の細隆線で波状文を施す、写図 18-6-4
6	-	表土	土器	深鉢	胴部	縄文中期	平行沈線によって菱形様の文様を施す、写図 18-6-5
7	-	表土	土器	深鉢	胴部	縄文中期	縦位の平行沈線によるスリット文・波状文、写図 18-6-6

表 14 梅木田遺跡石器・石製品遺物観察表

※写図…写真図版

No.	地点	層位	種類	器種	年代	備考
1	-	表土	石製品	石板	近代	粘板岩、表・裏面に罫線あり
2	-	表土	石製品	砥石	不明	仕上げ砥か?、顕著な使用面は1面、写図 7-43-6
3	-	表土	石器	石鏃	縄文	頁岩、写図 7-44-1
4	-	表土	石器	石鏃	縄文	頁岩、写図 7-44-2
5	-	表土	石器	剥片	縄文	赤色頁岩、写図 7-44-3
6	-	表土	石器	剥片	縄文	頁岩、写図 74-4

表 15 白山社及び駒形根神社石器遺物観察表

※写図…写真図版

No.	地点	層位	種類	器種	年代	備考
1	5トレンチ	攪乱	石器	篋状石器	縄文	頁岩、上部欠損
2	7トレンチ	表土	石器	篋状石器	縄文	頁岩
3	7トレンチ	表土	石器	篋状石器	縄文	頁岩、写図 14-32-1
4	7トレンチ	表土	石器	篋状石器	縄文	頁岩、写図 14-32-2
5	7トレンチ	表土	石器	篋状石器	縄文	頁岩、写図 14-32-3
6	5トレンチ	表土	石器	尖頭器	縄文	頁岩、石鏃様だが大型、上部欠損、写図 14-32-4
7	4トレンチ	表土	石器	石匙	縄文	頁岩、縦型、下部欠損、写図 14-32-5
8	5トレンチ	表土	石器	石匙	縄文	頁岩、横型、右側欠損、写図 14-32-6
9	4トレンチ	表土	石器	凹石	縄文	安山岩
10	5トレンチ	表土	石器	凹石	縄文	安山岩
11	5トレンチ	表土	石器	凹石	縄文	安山岩、側面を使用
12	5トレンチ	表土	石器	凹石	縄文	安山岩
13	5トレンチ	表土	石器	凹石	縄文	安山岩
14	5トレンチ	表土	石器	凹石	縄文	安山岩
15	5トレンチ	表土	石器	凹石	縄文	安山岩
16	5トレンチ	攪乱	石器	凹石	縄文	安山岩、小型、磨石としても用いられる
17	5トレンチ	攪乱	石器	凹石	縄文	安山岩、小型
18	5トレンチ	表土	石器	凹石	縄文	安山岩
19	6トレンチ	表土	石器	凹石	縄文	安山岩
20	7トレンチ	表土	石器	凹石	縄文	安山岩、表・裏両面に凹部、下端に敲打痕、写図 14-32-7
21	5トレンチ	表土	石器	磨石	縄文	安山岩
22	5トレンチ	攪乱	石器	磨石	縄文	安山岩
23	5トレンチ	攪乱	石器	磨石	縄文	安山岩
24	5トレンチ	表土	石器	磨石	縄文	安山岩
25	5トレンチ	表土	石器	磨石	縄文	安山岩

No.	地点	層位	種類	器種	年代	備考
26	5トレンチ	表土	石器	磨石	縄文	安山岩、大型
27	6トレンチ	表土	石器	磨石	縄文	安山岩
28	6トレンチ	表土	石器	磨石	縄文	安山岩、大型
29	7トレンチ	表土	石器	磨石	縄文	安山岩
30	7トレンチ	表土	石器	磨石	縄文	安山岩
31	6トレンチ	表土	石器	砥石?	縄文	安山岩質溶岩

表 16 平泉野遺跡（中川9地点）石器遺物観察表

※写図…写真図版

No.	地点	層位	種類	器種	年代	備考
1	-	表土	石器	籠状石器	縄文	頁岩、写図 18-6-7
2	東端部	表土	石器	剥片	縄文	頁岩、写図 18-6-8
3	-	表土	石器	凹石	縄文	安山岩、写図 18-6-9



1 調査前全景



2 遺構確認全景



3 北壁土層断面



4 掘立柱建物1・2確認



5 遺構完掘全景

梅木田遺跡(1)



6 掘立柱建物1完掘



7 掘立柱建物1 P1土層断面



8 掘立柱建物1 P2土層断面

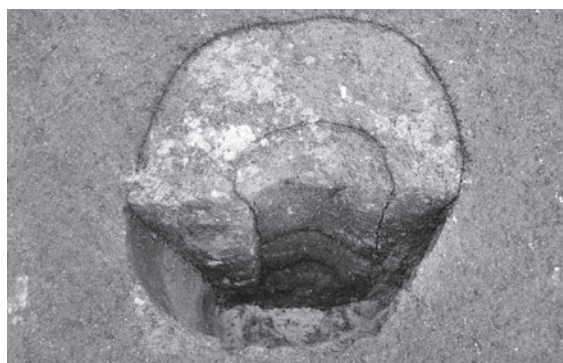


9 掘立柱建物1 P3土層断面

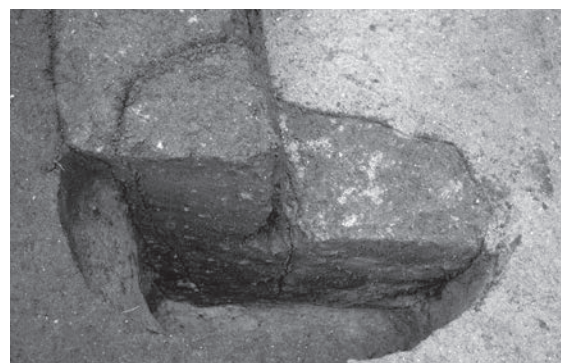


10 掘立柱建物1 P4土層断面

梅木田遺跡(2)



11 掘立柱建物1 P5土層断面



12 掘立柱建物1 P6土層断面



13 掘立柱建物1 P7土層断面



14 掘立柱建物1 P8土層断面



15 掘立柱建物2・3完掘

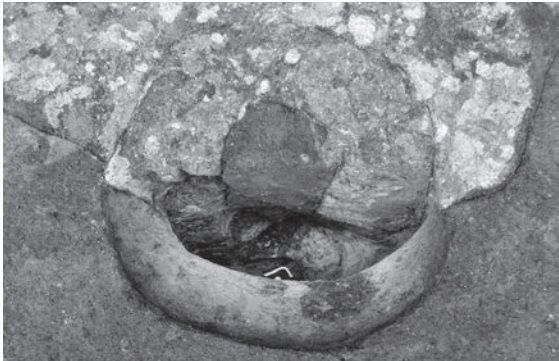
梅木田遺跡(3)



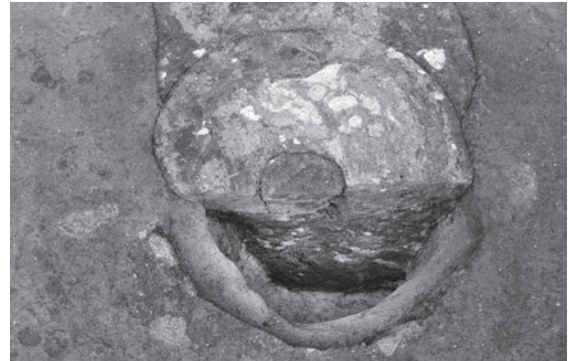
16 掘立柱建物2確認



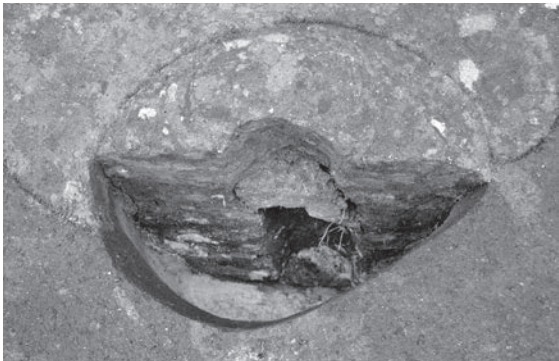
17 掘立柱建物2 P1土層断面



18 掘立柱建物2 P2土層断面



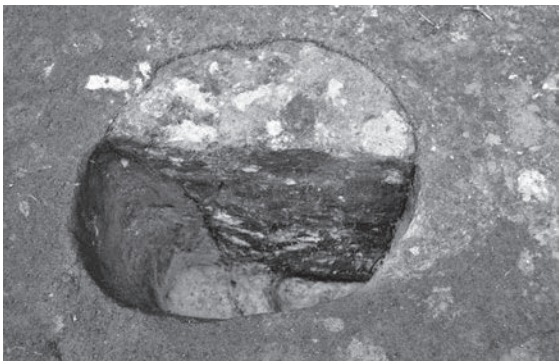
19 掘立柱建物2 P3土層断面



20 掘立柱建物2 P4土層断面



21 掘立柱建物2 P5土層断面

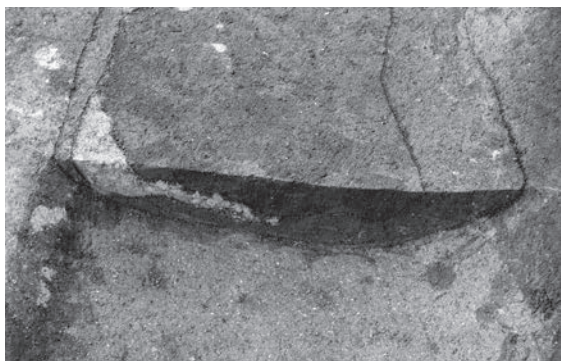


22 掘立柱建物2 P6土層断面



23 溝14 Aベルト土層断面

梅木田遺跡(4)



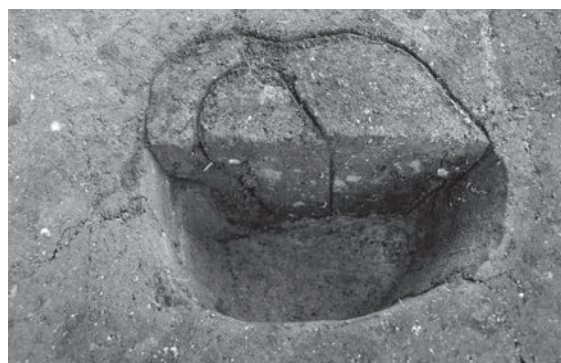
24 溝 14 Bベルト土層断面



25 掘立柱建物3 P1土層断面



26 掘立柱建物3 P2土層断面



27 掘立柱建物3 P3土層断面



28 掘立柱建物3完掘

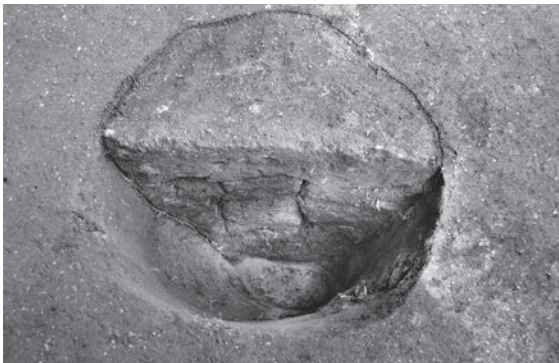
梅木田遺跡(5)



29 掘立柱建物3 P4土層断面



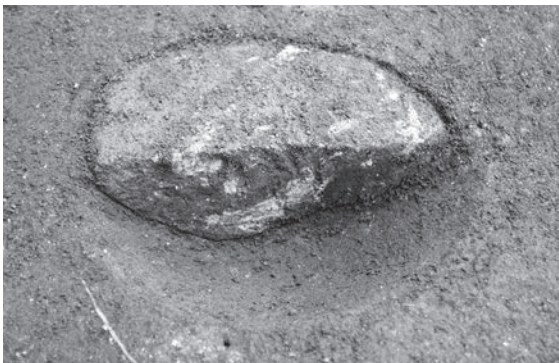
30 掘立柱建物3 P5土層断面



31 掘立柱建物3 P6土層断面



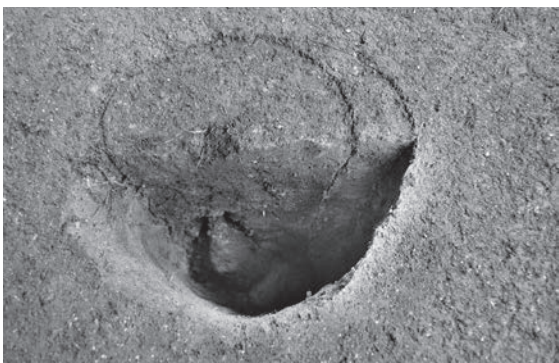
32 掘立柱建物3 P7土層断面



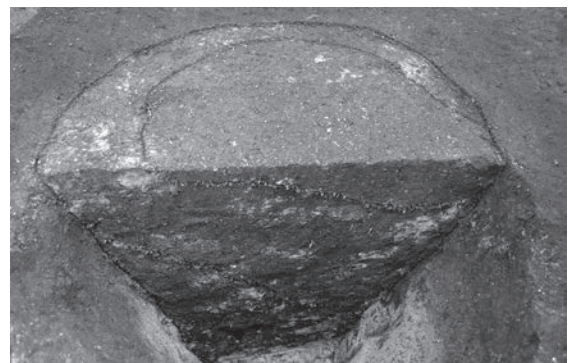
33 掘立柱建物3 P8土層断面



34 掘立柱建物3 P9土層断面



35 掘立柱建物3 P10土層断面



36 P601土層断面

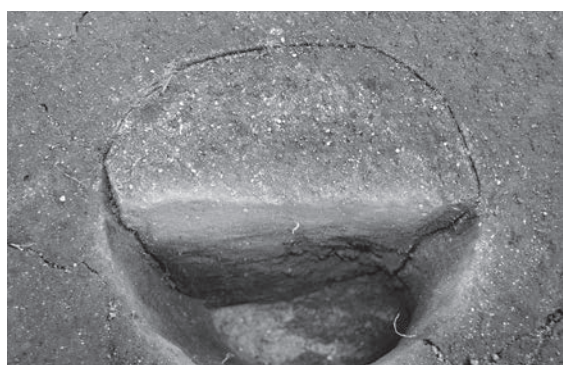
梅木田遺跡(6)



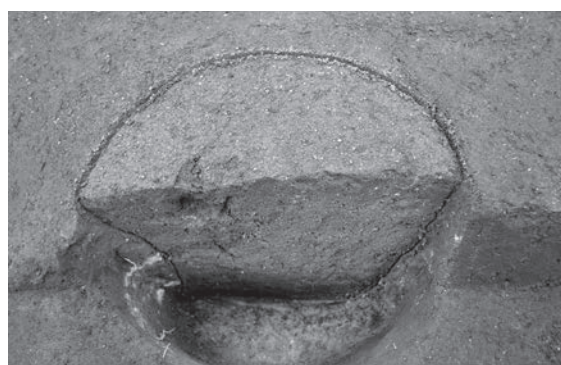
37 P 602 土層断面



38 P 603 土層断面



39 P 604 土層断面



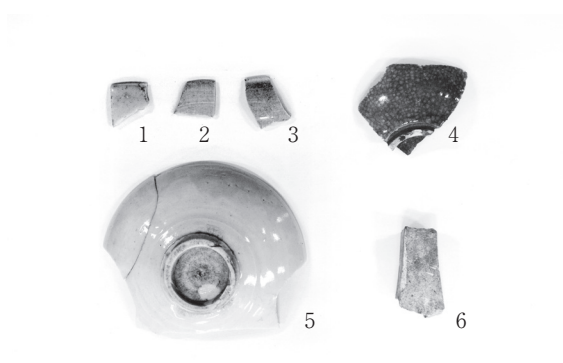
40 P 605 土層断面



41 小溝状遺構群完掘



42 小溝3土層断面



43 出土遺物(1)



44 出土遺物(2)

梅木田遺跡(7)



1 1トレンチ北壁土層断面



2 1トレンチ東壁土層断面



3 1トレンチ遺構確認状況(全景)



4 1トレンチ遺構確認状況(部分)



5 土坑1土層断面



6 2トレンチ南壁土層断面



7 2トレンチ遺構確認状況(全景)



8 2トレンチ遺構確認状況(部分)

白山社及び駒形根神社(1)



9 3トレンチ南壁土層断面



10 3トレンチ遺構確認状況



11 4トレンチ東壁土層断面



12 4トレンチ南壁土層断面



13 4トレンチ遺構確認状況(全景、南から)

白山社及び駒形根神社(2)



14 4トレンチ遺構確認状況(全景、北から)



15 住居1・2確認状況



16 5トレンチ東壁土層断面



17 5トレンチ遺構確認状況(全景、南から)

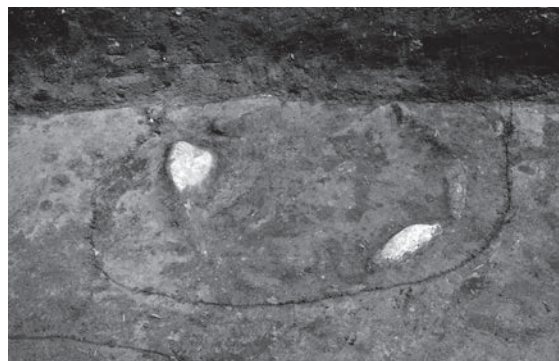


18 5トレンチ遺構確認状況(全景、北から)

白山社及び駒形根神社(3)



19 住居3確認状況



20 住居3石囲炉確認状況



21 住居4確認状況



22 住居6確認状況



23 住居5確認状況

白山社及び駒形根神社(4)



24 6トレンチ南壁土層断面



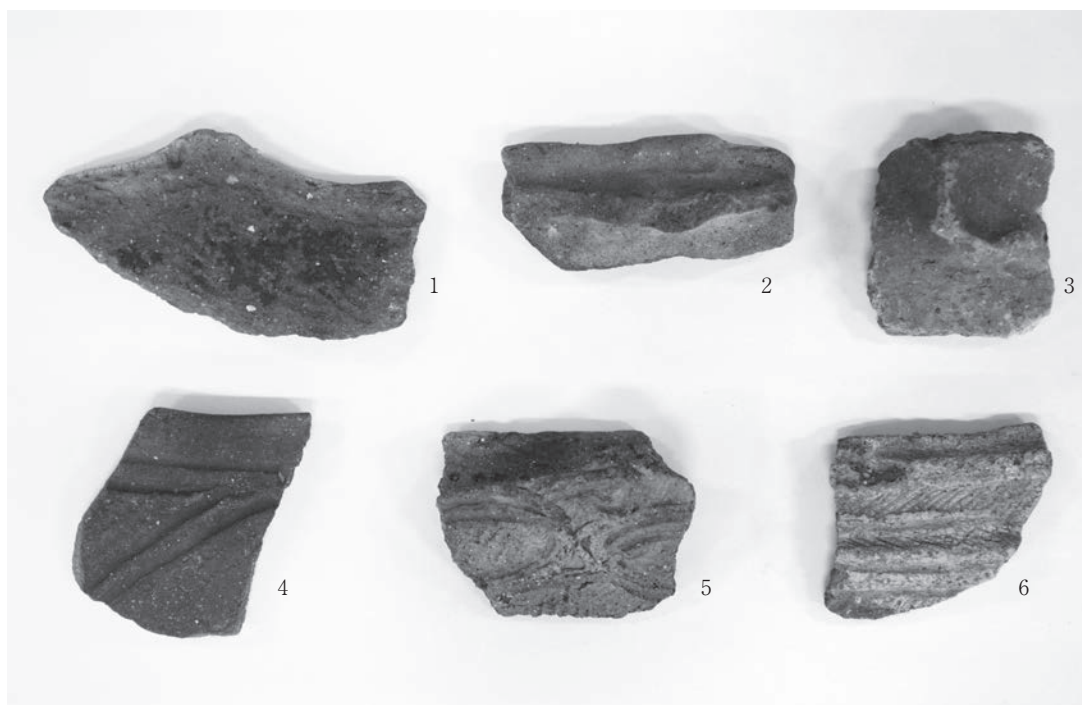
25 6トレンチ遺構確認状況



26 7トレンチ南壁土層断面

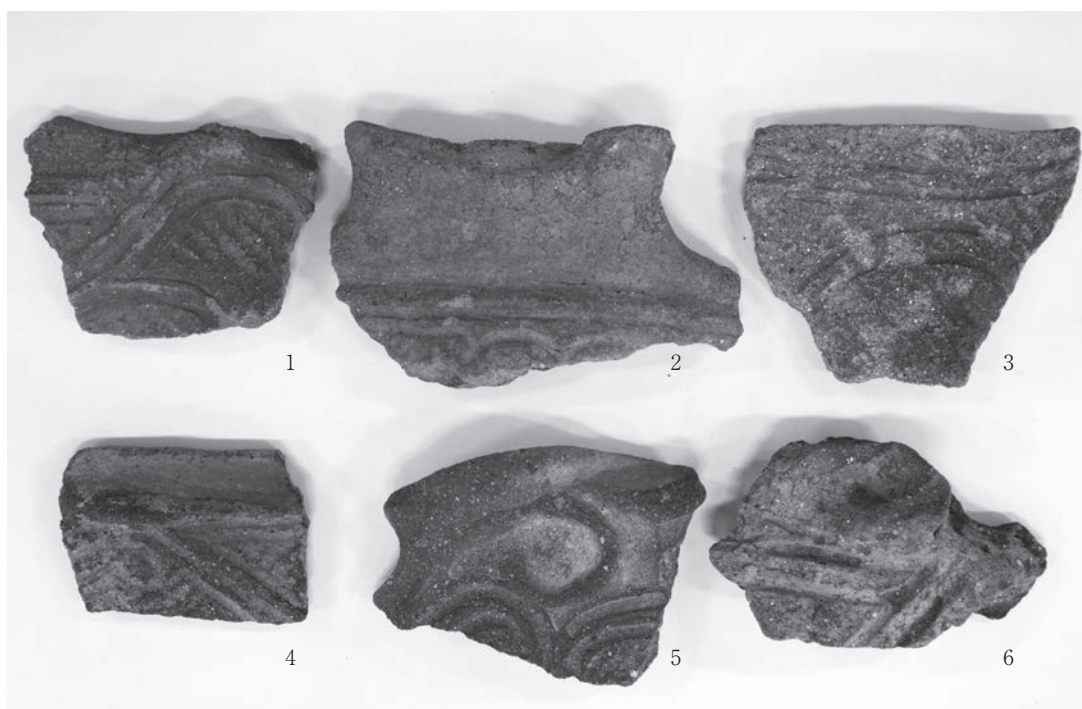


27 7トレンチ遺構確認状況



28 出土遺物(1)

白山社及び駒形根神社(5)



29 出土遺物 (2)

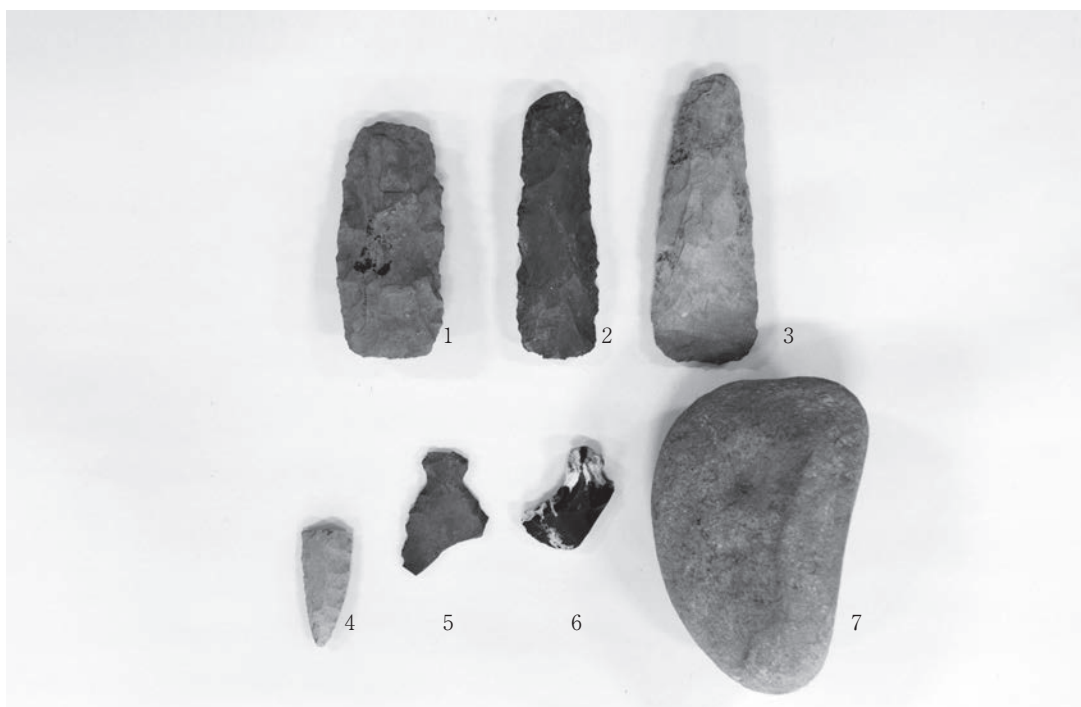


30 出土遺物 (3)

白山社及び駒形根神社 (6)

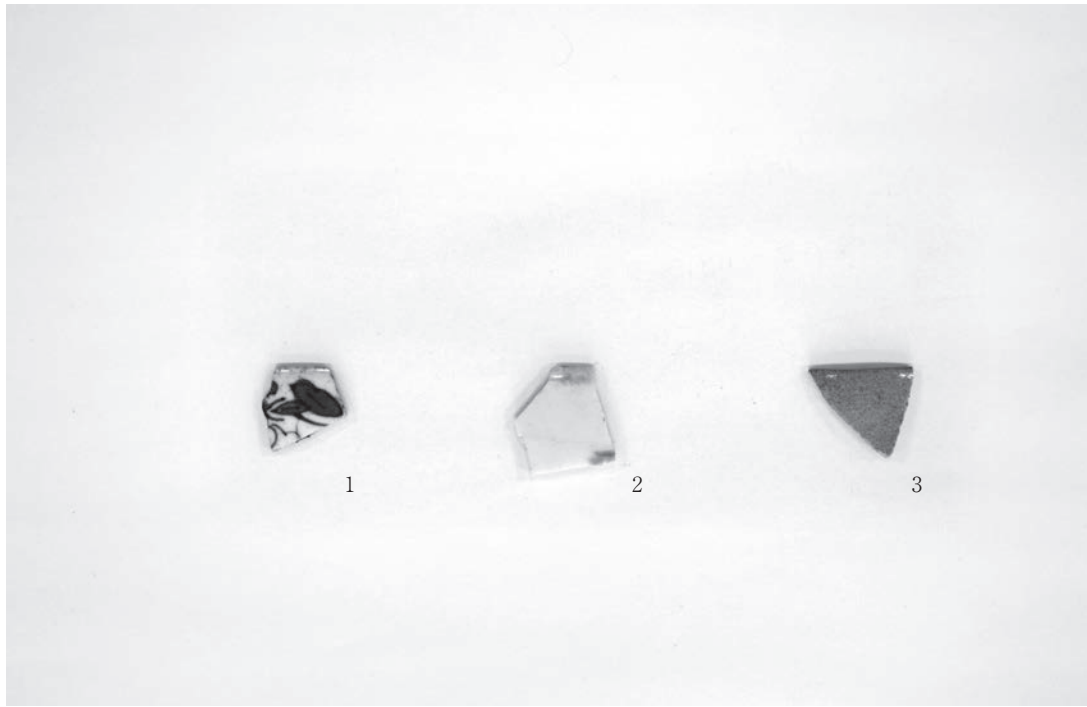


31 出土遺物 (4)



32 出土遺物 (5)

白山社及び駒形根神社 (7)



33 出土遺物(6)

白山社及び駒形根神社(8)



1 全景(西から)



2 溝1東端屈曲部確認状況(東から)

平泉野遺跡(中川9地点)(1)



3 溝1確認状況(西から)



4 溝1南東端土層断面(南から)

平泉野遺跡(中川9地点)(2)



5 調査区Aライン土層断面



6 出土遺物

平泉野遺跡(中川9地点)(3)



1 調査前全景 (南から)

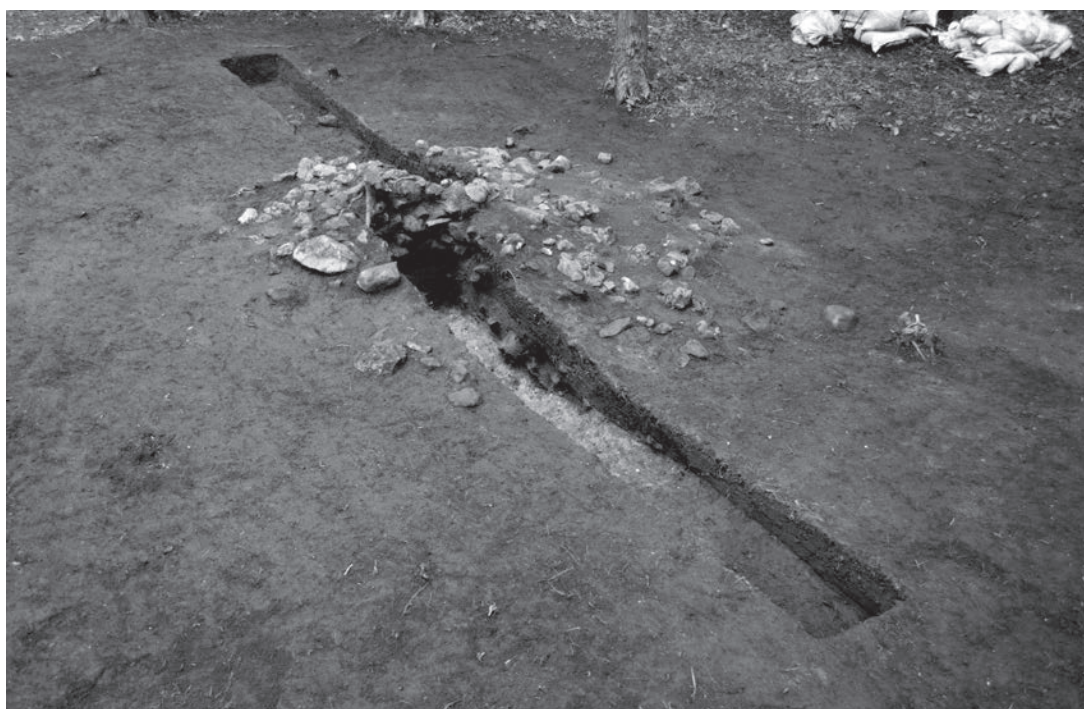


2 塚1・2調査前状況 (南から)

平泉野遺跡 (若井原 194-115 地点) (1)



3 塚1調査前状況



4 塚1全景(北西から)

平泉野遺跡(若井原194-115地点)(2)



5 塚1 土層断面 (南東から)



6 塚1 主体部土層断面 (南東から)

平泉野遺跡 (若井原 194-115 地点) (3)



7 塚1主体部(東から)



8 溝1土層断面(南西から)

平泉野遺跡(若井原194-115地点)(4)



1 山王山遠景 (南西から)



2 窟1前面 (西から)



3 窟1内部正面



4 窟2・3 (南から)



5 窟2内部の石碑

山王窟

抄 録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	骨寺村莊園遺跡確認調査報告書							
副書名	梅木田遺跡・白山社及び駒形根神社・平泉野遺跡・山王窟							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	菅原孝明・二階堂里絵・山川純一							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒021-8501 岩手県一関市竹山町7-2 TEL 0191・21・2111(代)							
発行年月日	2017年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほねでらむら しょうえん 骨寺村莊園	いちのせきしげんびちょう あざこまがた・わかいはら 一関市巖美町字駒 形・若井原	03209	NE72 -2283	38° 58' 33"	140° 57' 31"	20160725 ～ 20161214	883m ²	遺跡確認 調査
うめのきだ 梅木田	いちのせきしげんびちょう あざなかがわ 一関市巖美町字中川	03209	NE72 -2253	38° 58' 47"	140° 56' 56"	20160425 ～ 20160630	318m ²	遺跡確認 調査
へいせんの 平泉野	いちのせきしげんびちょう あざわかいはら 一関市巖美町字若井 原	03209	NE72 -2297	38° 58' 43"	140° 56' 21"	20160701 ～ 20161208	226m ²	遺跡確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
骨寺村莊園	莊園	縄文 中世 近世		竪穴住居 土坑 柱穴 焼土遺構 溝		縄文土器 土偶 石器 陶磁器		
梅木田	集落	中世 近世		掘立柱建物 柱穴 小溝状遺構群		陶磁器 石器		
平泉野	散布地	縄文 近世		塚 段切り造成 溝		縄文土器 石器		

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集
骨寺村荘園遺跡確認調査報告書
梅木田遺跡・白山社及び駒形根神社・平泉野遺跡・山王窟

発行 平成29年3月24日

編集・発行 一関市教育委員会
〒021-8501
岩手県一関市竹山町7-2
電話 0191・21・2111(代)

印刷 川嶋印刷株式会社
〒029-4194
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電話 0191・46・4161(代)